

2015 年度

連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味に関する研究

千葉大学大学院
人文社会科学研究所
博士後期課程
王 守利

凡 例

1. 本稿において引用・参照した論文は、日本語文献については著者の姓の五十音順に、また中国語文献についてはピンイン順に示す。同一著者の文献は出版年順に配列する。
2. 章・節・項は、原則としてアラビア数字で示す。たとえば、「1.1.1」は「第1章第1節第1項」を指す。
3. 本稿の用例は、コーパスから採用したものが大半を占めるが、一部は筆者による創作である。例文の文法的妥当性は、すでに日本語母語話者のチェックを経ている。また、本稿では用例が多いため、各章ごとに通し番号を初期化し、(1) から新たに番号をふる。図表番号も同様に扱う。
4. 注は、章ごとに番号をふり、各ページの下部に示す。
5. 本稿では、たとえば、テイタという表記は、「ていた」、「ていました」などの変異形を含む総称として用いる。
6. *の記号が例文の頭に付されている場合は、非文法的な文であることを示す。?の記号が例文の頭に付されている場合は、非文法的とまでは言えないが、不自然な文であることを示す。
7. 例文の後の括弧()内には出典の書名や新聞名を示す。なお、新聞名の後の数字は、発行年月日を示す。

目次

| | | |
|----------|----------------------------------|-----------|
| 1 | はじめに | 1 |
| 1.1 | 問題提起 | 1 |
| 1.2 | 連体修飾節について | 2 |
| 1.2.1 | 連体修飾節の捉え方の概観 | 3 |
| 1.2.2 | 連体修飾節の分類 | 10 |
| 1.3 | 研究対象 | 11 |
| 1.4 | 研究目的と研究方法 | 14 |
| 1.5 | 本稿の構成 | 14 |
| 2 | 先行研究および問題点 | 17 |
| 2.1 | 連体修飾節に関する先行研究および問題点 | 17 |
| 2.2 | 連体修飾節におけるテイタに関する先行研究および問題点 | 23 |
| 2.3 | 動詞のアスペクテ的意味に関する先行研究および問題点 | 25 |
| 2.4 | まとめ | 27 |
| 3 | 非限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクテ的意味 | 28 |
| 3.1 | 非限定的連体修飾節と主節との関係 | 28 |
| 3.1.1 | 付帯状況 | 29 |
| 3.1.2 | 逆接・対比 | 30 |
| 3.1.3 | 原因・理由 | 32 |
| 3.1.4 | 継起 | 33 |
| 3.2 | 「途切れ」について | 34 |
| 3.2.1 | 格関係一致 | 35 |
| 3.2.2 | 調査 | 37 |
| 3.3 | 他のアスペクテ的意味との関連 | 39 |
| 4 | 限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクテ的意味 | 44 |
| 4.1 | 考察範囲 | 44 |
| 4.2 | 「途切れ」について | 45 |
| 4.3 | 他のアスペクテ的意味との関連 | 49 |

| | | |
|----------|---------------------------------------|----|
| 5 | 連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味の特徴 | 52 |
| 5.1 | 「途切れ」と動詞分類..... | 52 |
| 5.2 | 「途切れ」とテンス..... | 58 |
| 5.2.1 | 「一般的事態」の場合..... | 62 |
| 5.2.2 | 「一時的事態」の場合..... | 63 |
| 5.3 | 「途切れ」と文脈の関係..... | 64 |
| 5.4 | 「完了」の検討..... | 66 |
| 5.5 | まとめ | 68 |
| 6 | 連体修飾節におけるテイルとの比較 | 70 |
| 6.1 | 先行研究 | 70 |
| 6.2 | 「原因・理由」と「付帯状況」..... | 72 |
| 6.3 | 連体修飾節におけるテイタとテイルの用例調査..... | 74 |
| 6.4 | まとめ | 76 |
| 7 | 連体修飾節におけるタとの比較 | 78 |
| 7.1 | タ形が含まれる連体修飾節と主節との関係..... | 78 |
| 7.2 | 連体修飾のしかた..... | 79 |
| 7.3 | 「形容詞+タ」への適用..... | 81 |
| 8 | タにおける「変化」の意味について | 83 |
| 8.1 | はじめに | 83 |
| 8.2 | 形容詞のタ | 83 |
| 8.2.1 | 先行研究..... | 83 |
| 8.2.2 | 本稿の立場..... | 85 |
| 8.2.3 | コーパスによる「激しかった」と「激しい」の調査..... | 86 |
| 8.3 | 形容動詞のタ | 88 |
| 8.4 | 名詞のタ | 90 |
| 8.5 | 連体修飾節のタの用法—「変化」について..... | 91 |
| 8.5.1 | 「変化」の用法..... | 91 |
| 8.5.2 | 動詞のタについて..... | 92 |
| 8.5.3 | 位置づけ..... | 93 |

| | | |
|-----------|-----------------------------------|------------|
| 8.6 | まとめ | 93 |
| 9 | 「状態持続」について | 94 |
| 9.1 | 問題提起 | 94 |
| 9.2 | 先行研究 | 95 |
| 9.3 | 時定項分析と「状態の持続」 | 96 |
| 9.4 | まとめ | 100 |
| 10 | 主節におけるテイタの aspek 的意味の調査 | 101 |
| 10.1 | はじめに | 101 |
| 10.2 | 主節におけるテイタの aspek 的意味 | 101 |
| 10.2.1 | 基本的なテンス・aspek 的意味 | 101 |
| 10.2.2 | 「状態の変化の結果」について | 103 |
| 10.2.3 | 状態の持続 | 104 |
| 10.2.4 | 単なる心理状態 | 105 |
| 10.2.5 | 「途切れ」について | 108 |
| 10.2.6 | まとめ | 110 |
| 10.3 | 小説に出現するテイタの aspek 的意味の調査 | 110 |
| 10.3.1 | 調査対象 | 110 |
| 10.3.2 | 調査方法 | 111 |
| 10.3.3 | 小説に出ているテイタの aspek 的意味 | 112 |
| 10.3.4 | 調査結果 | 114 |
| 10.3.5 | まとめ | 116 |
| 10.4 | 文脈からの影響 | 116 |
| 10.5 | まとめ | 117 |
| 11 | 連体修飾節におけるテイタの aspek 的意味の調査 | 119 |
| 11.1 | aspek 的意味 | 119 |
| 11.1.1 | 動作の持続 | 119 |
| 11.1.2 | 変化の結果の持続 | 119 |
| 11.1.3 | 状態の持続 | 120 |
| 11.1.4 | 単なる心理状態 | 121 |

| | | |
|--------|--------------|-----|
| 11.1.5 | 途切れ | 121 |
| 11.1.6 | パーフェクト | 121 |
| 11.1.7 | 反復・繰り返し | 122 |
| 11.2 | 調査 | 123 |
| 11.2.1 | 調査目的と調査対象 | 123 |
| 11.2.2 | 調査方法 | 125 |
| 11.2.3 | 調査結果 | 126 |
| 11.3 | まとめ | 128 |
| 12 | 結論と今後の課題 | 129 |
| 12.1 | 結論 | 129 |
| 12.2 | 今後の課題 | 131 |
| | 参考文献 | 133 |
| | 用例出典 | 140 |
| | 従来の筆者の研究との関係 | 143 |
| | 謝 辞 | 145 |

1 はじめに

1.1 問題提起

日本語のアスペクトに関しては、すでに多くの研究が行われている。そして、これらの研究は、主に文末の場合を中心的にとり上げる一方、連体修飾節の場合についてはあまりとり上げていない。また、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味はあまり重視されておらず、テイルのアスペクト的意味とほぼ同様であると考えられているのが現状である。たとえば、以下の例は、連体修飾節のテイルをテイタに置き換えられる例である（本稿は、被修飾名詞を「＝」で示し、連体修飾節を「―」で示す）。

(1) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。

（『あした来る人』）

(2) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。

（『赤い指』）

しかし、連体修飾節におけるテイタは、テイルと同じアスペクト的意味を表すとは限らない。次の例のように、テイタをテイルに置き換えられない例もある。

(3) ……定価を守っていた百貨店も、対抗上昨年暮れから安売りに走り、定価を設定する意味合いが薄れた。 （「朝日」94.8.14）

(4) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。 （『赤い指』）

そこで、連体修飾節に現れるテイタの特徴と、テイルにはないテイタのアスペクト的意味の有無を追究する必要性が生じる。

また、以下の例のように、日本語学習者には文の自然さの判断が困難であるような連体修飾節におけるテイルとテイタの区別に関しても、何らかのルールの有無を検討することが有用である。

(5) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。

(岩崎卓(1998:53))

(5) 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。

(同上)

本稿は、連体修飾節と主節との関係の角度から、連体修飾節におけるテイタの aspek 的意味を考察し、以上の課題を解決しようとするものである。

1.2 連体修飾節について

連体修飾節の説明に入る前に、連体修飾とは何かを簡単に説明する。

連体修飾は、名詞修飾ともいう。日本語記述文法研究会(2008)は、名詞修飾を、次のように規定している。

名詞について詳しく述べたり、名詞の指示対象を限定したりするために、名詞の前に様々な成分を置くことを名詞修飾という。(日本語記述文法研究会(2008:43))

名詞を修飾する成分には、語や節がある。語の場合、連体詞、名詞、形容詞・動詞、副詞的成分などが考えられる。節の場合、「動詞、形容詞、名詞+「だ/である」などからなる述語と、その述語に対する主語や補語や状況語、およびそのほかの修飾成分から構成される節」(日本語記述文法研究会(2008:49))などが考えられる。例を挙げると、次のようになる。

(6) その本 (連体詞による修飾) (日本語記述文法研究会(2008:43))

(7) 法律の本 (名詞による修飾) (日本語記述文法研究会(2008:44))

(8) 白い花 (形容詞による修飾) (日本語記述文法研究会(2008:47))

(9) この魚は汚れている川にも何とか住めるようだ。(動詞による修飾¹⁾)

(日本語記述文法研究会(2008:48))

¹ 「ただし、これらの文の中で名詞修飾を行う動詞の過去形や動詞のシテイル形は、過去の出来事や動きの進行中を表すのではなく、被修飾名詞の性質を表す働きをしている」(日本語記述文法研究会(2008:48))。

(10) 先生からいただいた本 (節による修飾)

(日本語記述文法研究会 (2008 : 49))

一方、寺村秀夫 (1984) は、連体修飾節とは、「コト²が確言または概言の活用をしてまとまった節を形成してから、より大きな文の構成要素である名詞を修飾する形式」(寺村秀夫 (1984 : 186)) であるとしている。

本稿は、連体修飾節のテイタを扱うものであり、主に動詞が含まれる連体修飾節を中心に論述を進める。ただし、連体修飾節と共通の特徴がある場合には、名詞や形容詞なども研究対象に含める。これについては、具体的には第 8 章で述べる。

「同じく連体修飾という文法形式を観察するにしても、その問題意識によって、また、文法というものをどう考えるかによって、捉える局面や切り込みかたが違ってくるのは当然である。」(寺村秀夫 (1975 : 72)) 以下では、まず連体修飾節に対する研究者の捉え方を概観する。それから、本稿における「連体修飾節」の捉え方を述べる。

1.2.1 連体修飾節の捉え方の概観

連体修飾節の位置づけについて、従属節の分類の仕方は研究者により異なっている。まず、その分類を概観する。

1.2.1.1 寺村秀夫 (1975-1978) 、寺村秀夫 (1984)

寺村秀夫 (1984 : 185-186) では、従属節は、接続節、引用節、連体 (修飾) 節、名詞節に分けられる。

典型的な連体修飾節では、被修飾名詞は実質的名詞であるが、被修飾名詞は、接続助詞化や助動詞化など形式化した場合もあり、名詞節のようなものときもある。

こうした被修飾名詞については、それが「実質的な名詞から、トキ、トコロ、モノ、ノのようにいわゆる形式化し、修飾部の表す内容と、後続の主節をつなぐ接続助詞の

² 寺村秀夫 (1984 : 11) によれば、コトとは、そのかなめである述語が、そのいろいろな活用形に関わりなく、それぞれの述語の辞書的意味とその補語とが結びついて、あるまとまった意味を表すものである。

ようなものに変質していく³、あるいは、ハズダ、ワケダのように、文末で形式用言と合して助動詞化する」(寺村秀夫(1984:194))という二つの方向に分かれることが指摘されている。

寺村は、「被修飾名詞が、もともと持っていた実質的な意味を失い、あるいは、実質的、具体的な意味が関係的、抽象的なものに変化し、そのほかの語との結びかた、つまり、シンタクティックな面だけ名詞としての特徴を持ち、常に修飾部分と結びついてのみその特殊な意味が発揮できる」(寺村秀夫(1984:210))ようになった場合を、「名詞の形式化」と名づけた。同じく連体修飾節の被修飾名詞の形式化の延長線上にあると位置づけられたのは、名詞節であり、これについては「コト、ノ、カなどで全体が名詞として働き、主節の中で補語基となる場合を、一応分けて考えることができる。」(寺村秀夫(1984:186))と述べている。

このような被修飾名詞の形式化したものは、「シンタクティックな面だけ(王注、以下も同様)で名詞としての特徴を保ち、常に修飾部分と結びついてのみその特殊な意味が発揮できる」(寺村秀夫(1984:210))とされているため、考察に際しては、典型的な連体修飾節と分けて考える必要があると思われる。

また、連体修飾節の分類について、寺村秀夫(1975-1978、1984)は、被修飾名詞と連体修飾節の関係を、内の関係と外の関係の2種類に分け、後の研究に大きな影響を与えている。主名詞が連体修飾節と一つの文を形成し得るような関係(意味的格関係)にあるような修飾を内の関係(寺村秀夫(1984:207))といい、主名詞が連体修飾節との間に格関係をもたないような修飾を外の関係という。つまり、「サンマを焼く男」のように、「男がサンマを焼く」という形に戻せるもの、つまり、被修飾語と修飾部に格関係が成り立つものを「内の関係」とし、「サンマを焼く匂い」のように、そのような形に戻せないものを「外の関係」とする。寺村秀夫(1975)は、連体修飾の構造を、シンタクスと意味の両面から、次のように分類し特徴づけている。

| | |
|-----------------|-----------|
| 「連体修飾構造は、まず大きく、 | |
| 構文的には | 意味的には |
| 「内の関係」…… | 「付加的修飾」 |
| 「外の関係」…… | 「内容補充的修飾」 |

³ つまり、「接続助詞化」(寺村秀夫(1984:210))という。

という二つの類型に分けられると一応言うことができると思われる。」

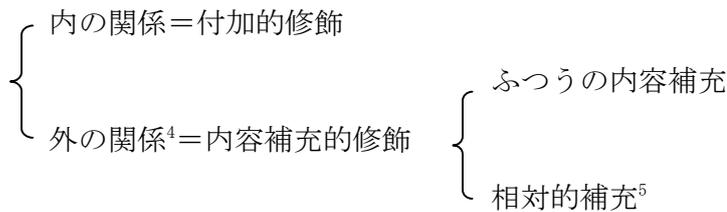
(寺村秀夫 (1975 : 111))

さらに、「外の関係」について、寺村秀夫 (1975) は、次のように述べている。

「…外の関係の意味的特徴として挙げた、修飾部が底の名詞の「内容を補充する」ということの中には、それが内容そのものをいわば正面から補充し、表す場合と、それが底の名詞が本来的に相対する概念の内容を表す、いわば「反面補充」とでも言うべき場合の、少なくとも2つのものが区別されねばならないことが分かる。」

(寺村秀夫 (1975 : 114))

以上のことを整理すると、次のようになる。



(寺村秀夫 (1975 : 115))

1.2.1.2 町田健 (1989)

町田健 (1989 : 101-102) は、従属節中の時制を検討するとき、従属節を、統語的機能という観点から、名詞節、内容節、形容詞節、副詞節に分けている。

同じく「名詞節」と呼ばれてはいるものの、研究者の考え方により、その実質的内容は異なる。名詞節とは、文を名詞化する機能をもつ形態である「コト」、「ノ」、「ト」を伴う節であるとされている。ここでの「ト」を伴う節を、寺村秀夫 (1984) は、引用節と位置付け、引用の～トのあとに出てくる「言う (類)」「思う (類)」の内容を表

⁴ 「外の関係」の被修飾語になれる名詞は、大きく四つに分類される。それは、「発話・思考の名詞」、「コト」を表す名詞、感覚の名詞、「相対性」の名詞などである。詳しくは寺村秀夫 (1977b) を参照。

⁵ 寺村秀夫 (1977b) では、「逆補充」という呼称も使われている。

すと指摘している。

また、町田健（1989）の言う形容詞節は、名詞句を修飾する機能を果す節であるとされ、内容節は、「考え」、「信念」、「主張」、「知識」、「におい」、「音」などの名詞に先行し、その名詞の具体的な内容を示す節であるとされている。形容詞節は、寺村秀夫（1975）の言う「内の関係」の連体修飾節であり、内容節は、寺村秀夫（1975）の言う「外の関係」の連体修飾節に含まれる。一方、「トキ」などの被修飾名詞が形式化したものは、町田健（1989）では主節を副詞的に修飾する機能を果す副詞節と位置づけられている。

1.2.1.3 益岡隆志・田窪行則（1992）

益岡隆志・田窪行則（1992：181）は、従属節を、補足節、副詞節、連体節に分けたうえ、連体節をさらに補足語修飾節、相対名詞修飾節、内容節に分けている。

益岡隆志・田窪行則（1992：182）は、従属節の中で述語を補う働きをするものを、補足節と呼び、「名詞相当表現+格助詞」で表されるとしている。そして、名詞相当表現に名詞の性質を与えるのが、形式名詞の「こと」、「の」、「ところ」である、と指摘している。この補足節は、寺村秀夫（1984）がいう名詞節に相当する。一方、被修飾名詞の形式化した「トキ」は、時を表す副詞節に含まれている。これは、町田健（1989）と同じ立場である。

益岡隆志・田窪行則（1992）は、被修飾名詞に対する修飾の仕方の違いにより、連体節を3つの種類に分けている。つまり、補足語修飾節、相対名詞修飾節、内容節である。それぞれの例は、以下のようになる。

(11) この小説を書いた作家 (益岡隆志・田窪行則(1992:200))

(12) 鈴木さんがお金を貸した人 (同上)

(13) 鈴木さんに会う前に高津さんと相談して多いたほうがよい。
(益岡隆志・田窪行則(1992:202))

(14) 小さな商店が並んでいるすぐそばに大きなスーパーができるそうだ。 (同上)

(15) 誰かが近づいてくる気配がした。 (益岡隆志・田窪行則(1992:204))

(16) 外国人に日本語を教える (という) 仕事は容易な仕事ではない。 (同上)

例（11）と例（12）では、被修飾名詞「作家」「人」は、連体節中の述語「書いた」「貸した」に対して、補足語の関係（「作家が書いた」、「（その）人に貸した」という関係）にあり、このような修飾節を補足語修飾節という。これは、町田健（1989）がいう「形容詞節」に相当し、寺村秀夫（1975）の言う「内の関係」の連体修飾節に相当する。

例（13）と例（14）では、被修飾名詞「前」「すぐそば」は、連体節中の述語に対する特定の補足語と相対的な関係にあり、このような修飾節を相対名詞修飾節という。これは、寺村秀夫（1975）の言う「外の関係」のうちの「相対的補充」の連体修飾節に含まれる。

例（15）と例（16）では、連体節で表される内容は、被修飾名詞が指す対象の内容を表しており、このような修飾節を内容節という。これは、寺村秀夫（1975）の言う「外の関係」のうちの「ふつうの内容補充」の連体修飾節に相当する。

つまり、益岡隆志・田窪行則（1992）がいう「連体節」は、寺村秀夫（1975）の言う連体（修飾）節に相当すると言えよう。

1.2.1.4 益岡隆志（1997）

益岡隆志（1997）は、従属節を、名詞節、連体節、連用節、並列節に分けている。

連体節が名詞を修飾するのに対し、連用節は述語や主節全体を修飾する節で、前述した寺村秀夫（1984）の「接続節」や町田健（1989）の「副詞節」に相当する。前述した寺村秀夫（1984）の「引用節」について、益岡隆志（1997：12）は「基本的に連用節に属するものとしておいて、一部の引用節が補足語の働きをするという見方を採用することにする」と述べている。

連体節は、益岡隆志（1997）では三つの類型に区別される。一つ目は、寺村秀夫（1975-1978）の言う「内の関係」の連体修飾節である。二つ目は、被修飾名詞の内容を説明する連体節であり、内容節と呼ばれる。三つ目は、連体節と被修飾名詞の関係が表面上明示されていないタイプの表現であり、「縮約連体節」と名づけられている。それぞれの例を挙げると、以下のようなになる。

- (17) 太郎が書いたレポート (益岡隆志 (1997 : 12))
 (18) 花子がそのことを知らなかった事実 (益岡隆志 (1997 : 13))
 (19) 予習をしなかった報い (同上)

益岡隆志 (1997) の言う内容節と縮約連体節は、寺村秀夫 (1975) の言う「外の関係」の連体修飾節の「ふつうの内容補充」および「相対的補充」に相当する。したがって、益岡隆志 (1997) の言う連体修飾節は、寺村秀夫 (1975) の言う連体修飾節に相当するということになる。

1. 2. 1. 5 日本語記述文法研究会 (2008)

日本語記述文法研究会 (2008) では、従属節が主節に対して果す役割によって、複文⁶は大きく、補足節、名詞修飾節、副詞節、等位節・並列節に分かれるとされている。

このうち、名詞修飾節は連体修飾節のことだと言える。名詞修飾節の構造には、被修飾名詞が修飾節の中の述語に対して主語や補語や状況語にあたるような格関係をもつものと、そのような格関係がないものがある (日本語記述文法研究会 (2008 : 51))。前者はいわゆる「内の関係」で、後者はいわゆる「外の関係」である。また、前者は「格成分名詞修飾節」と名づけられ、後者はさらに、「内容補充修飾節」「相対名詞修飾節」「付随名詞修飾節」に分けられる。それぞれの例は、以下のようになる。

- (20) チョコレートをもらった人はうれしそうだった。 (格関係名詞修飾節)
 (日本語記述文法研究会 (2008 : 59))
 (21) 昨日、銀行が襲撃される事件が起こった。 (内容補充修飾節)
 (日本語記述文法研究会 (2008 : 51))

⁶ 益岡 (1997 : 1) は、「複文」について、次のように述べている。

「複文は、「単文」と対立する文法概念である。…「複文」とは、述語を中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文、すなわち、述語を中心としたまとまりが二つ以上集まって構成された文のことである。」

「複文における述語を中心としたまとまりを「節」と呼び、複文は複数の節が集まって一つの文を作りあげるものである、ということが出来る。この「節」には、それだけで文として独立できるものと、他の節に依存することで文の一部を構成するものがある。」 (益岡 (1997 : 1)) これらの節は、それぞれ「主節」、「従属節」と呼ばれる。

- (22) 母親が雑誌を読んでいる前で子どもが遊んでいる。 (相対名詞修飾節)
(日本語記述文法研究会 (2008 : 51))
- (23) ジュースを買ったおつりを受け取った。 (付随名詞修飾節)
(日本語記述文法研究会 (2008 :54))

つまり、日本語記述文法研究会 (2008) は、寺村秀夫 (1975) がいう「内の関係」の連体修飾節を格成分名詞修飾節と呼ぶ。「内容補充修飾節」は、前述した「内容節」(町田健 (1989)、益岡隆志・田窪行則 (1992)、益岡隆志 (1997)) に相当し、いわゆる寺村秀夫 (1975) の「内の関係」の連体修飾節に相当すると言える。

「相対名詞修飾節」は、益岡隆志・田窪行則 (1992) の「相対名詞修飾節」と一致し、「付随名詞修飾節」は、益岡隆志 (1997) の「縮約連体節」に当たると言えよう。「相対名詞修飾節」と「付随名詞修飾節」は、いわゆる寺村秀夫 (1975) の「外の関係」の連体修飾節の「相対的補充」に含まれると言える。

1.2.1.6 まとめ

以上、先行研究における従属節の中での連体修飾節の位置づけと、その捉え方を概観した。

内の関係の連体修飾節は、「形容詞節」(町田健 (1989))、「補足語修飾節」(益岡隆志・田窪行則 (1992))、「格成分名詞修飾節」(日本語記述文法研究会 (2008)) などとも呼ばれる。外の関係の連体修飾節は、「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分かれるが、「ふつうの内容補充」は、「内容節」(町田健 (1989)、益岡隆志・田窪行則 (1992)、益岡隆志 (1997))、「内容補充修飾節」(日本語記述文法研究会 (2008)) などとも呼ばれる一方、「相対名詞修飾節」(益岡隆志・田窪行則 (1992)、日本語記述文法研究会 (2008))、「縮約連体節」(益岡隆志 (1997))、「付随名詞修飾節」(日本語記述文法研究会 (2008)) などは「相対的補充」に含まれると言える。

このように、研究者により、連体修飾節の分類は一見異なるように見えるが、寺村秀夫 (1975-1978、1984) の連体修飾節の分類から外れるものはないと思われる。つまり、文法用語は違うものの、それらの実質的な内容にはさしたる異同はないと言える。ただし、寺村秀夫 (1975-1978、1984) は、被修飾名詞の形式化した場合も含めて連体

修飾の延長と見なしている点で、他の先行研究よりもこのカテゴリーを幅広く扱っていることがわかる。

連体修飾節は、連体節、名詞修飾節、形容詞節とも呼ばれているが、本稿では「連体修飾節」という呼称に統一する。また、被修飾名詞（日本語記述文法研究会（2008）、益岡隆志（1997）、益岡隆志・田窪行則（1992）など）は、底の名詞（寺村秀夫（1975-1978）など）、主名詞（野田尚史他（2002）、庵功雄（2001b）など）、カザラレ（高橋太郎（1979b）など）などとも呼ばれているが、本稿では以下一貫して「主名詞」という呼称を使う。

1.2.2 連体修飾節の分類

連体修飾節の分類について、日本語記述文法研究会（2008）は、構造による分類と、機能による分類に分けて論じている。前節で述べた連体修飾節の分類は、連体修飾節の構造による分類である。連体修飾節は、機能の面で、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節に分けられる。

日本語記述文法研究会（2008：50）は、主名詞となる名詞が表すものの集合の中から、修飾節が指示対象を限定して取り出す働きをするようなものは限定的修飾節であり、指示対象を限定する必要がない名詞に対して補助的な情報を付け加えたり、主節の事態に対する背景的な事態を提示するといったはたらきをする修飾節は、非限定的修飾節であるとしている。たとえば、

(24) つらい経験をしてきた人間には、他人の痛みがわかるだろう。

（日本語記述文法研究会（2008：50））

(25) つらい経験をしてきた私には、他人の痛みがわかる。 （同上）

例（24）の連体修飾節は限定的修飾節であり、例（25）の連体修飾節は非限定的修飾節である。例（24）では、主名詞「人間」を連体修飾節「つらい経験をしてきた」が限定している。例（25）では、連体修飾節が、主節の事態「私には、他人の痛みがわかる」に対して、「私はつらい経験をしてきた」という背景的な事態を提示している

7。

この点に関しては、先行研究の認識はほぼ一致していると思われる。

「限定とは、修飾される名詞（これを主名詞と呼ぶことにする）の表す集合を分割し、その真部分集合を作り出すはたらきを指す」（金水敏（1986：606））一方、「非限定的な連体成分の機能は、背景、理由、詳細説明などの情報を主文に付加する所にある」と金水敏（1986：607）は指摘している。また、金水敏（1986：608）は、一般に限定的連体には焦点が置かれ易く、情報付加連体には焦点が置けないと指摘している。

限定的な修飾節は、主名詞に対して限定を加えるのに対し、非限定的な修飾節は、主名詞に対して情報を付加するという一般的な見方を本稿も採っている。

限定的修飾節と非限定的修飾節は、制限的修飾節と非制限的修飾節（庵功雄（2001b）、三宅知宏（1995）など）とも呼ばれる。内容の面では違いはないと考えられるため、本稿では、「限定的修飾節」および「非限定的修飾節」（寺村秀夫（1984）、日本語記述文法研究会（2008）、益岡隆志（1997））という呼称に統一する。

1.3 研究対象

前節では、先行研究における連体修飾節の捉え方と分類を述べた。本節では、本稿での「連体修飾節」の捉え方を述べる。

先行研究においては、連体修飾節に対する捉え方がまちまちであるが、寺村秀夫（1975-1978、1984）の設定した連体修飾節の枠を超えるものはないことは前述した。以下では、寺村氏の考え方に沿って論述を進めたい。

まず、主名詞の角度から研究対象を考える。1.2.1.1 で述べたが、主名詞は、実質的な名詞である場合もあれば、接続助詞化や助動詞化など形式名詞化している場合もある。たとえば、トキ節は、寺村秀夫（1975-1978、1984）では連体修飾節の主名詞の接続助詞化したものとして扱われ、「連体修飾節+名詞」という構造と、「～から」「～

⁷しかし、この二つの区別は必ずしも明確にされているとはいえない。これについては、加藤万里（2005）の考察がある。また、次の例のように、非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節が同時に使われる場合もある。

例：何年も忘れていたほのかな暖かみを持っている言葉を耳にした感じである。

（『あした来る人』）

この場合、「ほのかな暖かみを持っている」は、主名詞「言葉」を限定しているのに対し、「何年も忘れていた」は、主名詞「言葉」に情報を加えている。

けれども」のような接続助詞を伴った節との中間に位置づけられるが、町田健(1989)、益岡隆志・田窪行則(1992)、日本語記述文法研究会(2008)など多くの先行研究では「副詞節」として扱われている。

寺村秀夫(1978:3)は、「トキ」や「タメ」は、前の節に対してはそれを支える底の名詞として働き、後の節に対しては、「ソノトキ」「地震ノタメ」のように副詞的な修飾句として機能する。前の節に付き、それと共に後の節に対して連用的にかかっていく、という点では、それは接続助詞的な役割を持っているといえる。」と指摘している。このように、これら形式名詞化した主名詞は、実質名詞とは性質が違い、実質名詞とは分けて考える必要があると思われる。

このため、本稿でいう連体修飾節は、被修飾名詞が実質名詞である場合の典型的な連体修飾節であり、トキ節など被修飾名詞の形式化した場合の連体修飾節は考察対象から外している。

次に、連体修飾節の分類の角度から考えると、本稿の研究対象は、内の関係に限られる。寺村秀夫(1975-1978、1984)は、連体修飾節と被修飾名詞との関係から、「内の関係」と「外の関係」を分けている。たとえば、以下の例である。

(26) 控え室に戻った私は、9分間、時間を過ぎたことを係りの人にわびた。

(益岡隆志(1997:169-170))

(27) 責任を感じた功一は金の工面をまさ子に頼ることにした。

(益岡隆志(1997:169))

(28) 日本で、HIVで汚染された非加熱血液製剤を危険と知りながら血友病患者に投与し続けていた事件が発覚した。

(『人類サバイバルの条件』)

(29) 逮捕される前日、四月二十一日の夜は、新宿にいた。(寺村秀夫(1977b:28))

(26)と(27)は内の関係の例であり、(28)と(29)は外の関係の例である。例(26)では、連体修飾節の事態が起こったことに続いて主節の事態が起こるという関係になっている。つまり、「私」は、控え室に戻った後に係りの人にわびたのであり、連体修飾節と主節とは「継起」の関係にある。一方、例(27)では、「責任を感じた」という連体修飾節の事態は、「金の工面をまさ子に頼ることにした」という主節の事態の原因となっている。つまり、連体修飾節と主節の間には、因果関係が見られる。

それに対し、例 (28) では、連体修飾節は、主名詞の内容だけを説明し、主節との間には何の関係もない。(29) も同様に、連体修飾節は、主名詞の内容だけを補充し、主節とは無関係である。「外の関係では、修飾部が底の名詞の内容を述べている、或はその内容を補充している、という点にその特徴がある。」(寺村秀夫 (1977b : 5)) と述べられているように、外の関係の連体修飾節の場合は、連体修飾節は主名詞だけを修飾し、主節とは意味的關係が見られない。

1.1 で述べたが、本稿は、連体修飾節と主節との関係の角度から、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察するものである。そのため、連体修飾節と主節との間に一定の關係が見られる内の關係の連体修飾節のみをその研究対象とする。

以上の二点をまとめると、本稿は、実質名詞を主名詞とした内の關係の連体修飾節をその研究対象とするということになる。それでは、主名詞の意味特性と、内の關係および外の関係の連体修飾節との關係は、どのようになっているのだろうか。

寺村秀夫 (1978) は、主名詞の意味特性について、次のように述べている。

「内の關係を成立させるのは、いわば構文的条件だといってよい。従って底に立ち得る名詞は何でもよい。もう少し用心深くいえば、文中に独立して名詞として使われるものなら何でもよいということである。これに対し、外の關係が成立するのは、底の名詞が、その内容が文によって表されるような意味特性をもつものである場合に限る。」
(寺村秀夫 (1978 : 2))

すなわち、内の關係では主名詞に特に制限はないが、外の關係では主名詞になれる名詞は限られているということである。その具体的な意味特性について、寺村氏は次のように述べている。

「内の關係が成立するためには底の名詞は実質名詞でありさえすればよい。(「ハズ」などのようにふつう形式名詞といわれる名詞の多くは内の關係を成り立たせない…中略…) 外の關係のうち、「ふつうの内容補充」的修飾を成り立たせるためには、底の名詞は、いわば「コト性」を持ったものでなければならない。「実質性」を持つ名詞の中には、「コト性」を持つものもあれば持たないものもある。また、「相対的補充」の修飾を成り立たせるのは上に見たように、底の名詞の「相対性」だと考えら

れるが、これまた「実質性」「コト性」と交錯するものである。」

(寺村秀夫 (1975 : 115))

要するに、内の関係の連体修飾節の主名詞は、「実質性」をもつ名詞、つまり「実質名詞」であればいいのに対し、外の関係の連体修飾節の主名詞は、「コト性」或は「相対性」をもつ名詞でなければならないということである。

このように、内の関係の連体修飾節は、その主名詞が常に実質名詞であることによって特徴づけられると言える。したがって、本稿の研究対象は、内の関係の連体修飾節に限られるということになる。

1.4 研究目的と研究方法

本稿は、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の解明をその研究目的とする。また、連体修飾節におけるテイルとタの比較研究を通じて、連体修飾節におけるテイルとタの構文上の相違点を明らかにすることも本稿は目指している。さらに、主節におけるテイタとの比較研究によって、主節および連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の特徴を明らかにするのも、本稿の研究目的の一つである。

連体修飾節を含む複文を考察するには、連体修飾節（述語を含む）、主名詞、主節の述語という三つの要素を考慮し、この三つの関係を明らかにする必要がある。したがって、連体修飾節と主名詞との関係だけでなく、連体修飾節と主節との関係なども検討することが必要になると思われる。本稿は、連体修飾節と主節との関係から、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察するものである。

研究方法としては、先行研究を検討したうえ、主に『現代書き言葉均衡コーパス中納言』、『中日対訳コーパス』(2003 第一版)、新潮文庫 100 冊などから集めた小説や新聞の用例を分析する。また、連体修飾節におけるテイル、タおよび主節におけるテイタのアスペクト的意味などとの比較研究を通じて、連体修飾節におけるテイタの特徴をより詳しく解明することを試みる。

1.5 本稿の構成

本稿は 12 章から構成されている。具体的には以下の通りである。

第 1 章 はじめに

第 2 章 先行研究および問題点

第 3 章 非限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味

第 4 章 限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味

第 5 章 連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味の特徴

第 6 章 連体修飾節におけるテイルとの比較

第 7 章 連体修飾節におけるタとの比較

第 8 章 タにおける「変化」の意味について

第 9 章 「状態持続」について

第 10 章 主節におけるテイタのアスペクト的意味の調査

第 11 章 連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の調査

第 12 章 結論と今後の課題

第 1 章「はじめに」では、本論文を書くきっかけ（問題提起）および研究対象を説明し、本論文の研究目的および研究方法、本稿の構成を示す。

第 2 章では、先行研究および問題点を示す。具体的には、連体修飾節に関する先行研究、連体修飾節のテイタに関する先行研究、および動詞のアスペクト的意味に関する先行研究を示したうえで、それぞれの問題点を指摘する。

本稿は、連体修飾節と主節との関係から連体修飾節のテイタの意味を考察し、テイルにはないテイタのアスペクト的意味—「途切れ」を中心的に扱っている。

連体修飾節は、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節に分けられる。そして、非限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除いても文意が大きく変わらないのに対し、限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除くと文が成り立たなくなるか、文意が変わるといふ点で両者には違いがある。このため、連体修飾節のテイタがもつ「途切れ」のアスペクト的意味を考察する際には、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節を分けて検討する必要があると思われる。これらは、具体的には、第 3 章と第 4 章で扱われる。第 3 章および第 4 章では、それぞれ、非限定的連体修飾節におけるテイタがもつ途切れのアスペクト的意味と、限定的連体修飾節におけるテイタがもつ途切れのア

スペクト的意味が中心的に考察される。

それに引き続き、第 5 章では、「途切れ」を表す連体修飾節が含まれる複文が有する特徴を、テンス、動詞の分類、文脈の関係、「完了」などの角度から検討する。

テイルにはないテイタの「途切れ」のアスペクト的意味を包括的に考察した後、第 6 章と第 7 章では、連体修飾節におけるテイルおよびタとの比較を通して、テイタの構文的特徴の特定を試みる。具体的に言うと、第 6 章では、格関係一致可否の角度から、連体修飾節におけるテイルとの相違を検討する。また第 7 章では、連体修飾節には修飾の仕方が二つあるという角度から、連体修飾節におけるタとの相違を考察する。

第 7 章では、連体修飾節におけるタとの比較から、連体修飾節におけるテイタの構造上の特徴を特定したうえで、それが「形容詞＋タ」に適用できることを瞥見した。この点をさらに追究し、「形容詞＋タ」、「形容動詞＋タ」などにも同じ特徴が適用できるという予測のもとで、第 8 章では、これらに共通する「変化」というタの意味を詳しく検討する。

続く第 9 章では、これまでの主節におけるテイタと連体修飾節におけるテイタについての考察を手掛かりに、「状態の持続」というアスペクト的意味を提案する。

第 10 章では、主節におけるテイタのアスペクト的意味を考察し、第 11 章では、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察する。それぞれ、小説に使われるテイタの使用率を調査し、小説にはどのようなアスペクト的意味が多く使われているかを明らかにする。

最後に、第 12 章では、本稿における議論を総括し、今後の課題を述べる。

2 先行研究および問題点

2.1 連体修飾節に関する先行研究および問題点

まず、連体修飾節に関する先行研究について概観する。

従来、連体修飾節は、多様な視点から研究されてきた。そのうちの一つは、連体修飾節を、テンス、アスペクト¹の角度から研究するものであり²、もう一つは、主名詞の角度から、連体修飾節と主名詞との格関係や意味関係などを研究するものである³。さらに、非限定的連体修飾節に関しては、連体修飾節と主節との意味的關係を追究する研究⁴もある。

まず一つ目のテンスの角度からの研究としては、主に岩崎卓（1998b）、三宅知宏（1995）などが挙げられる。岩崎卓（1998b）は、非限定用法の連体修飾節には、限定用法の連体修飾節にはない特異なテンスの現象があると指摘し、内の關係の限定的連体修飾節に焦点を絞って、連体修飾節のテンスを考察した。三宅知宏（1995）は、三原健一（1992）が提唱した「視点の原理」⁵が適用されるのは、限定的連体修飾節の場合に限られ、非限定的修飾節は、この原理には従わず、常に発話時視点により時制形式が決定される、と述べている。この理論に従うと、以下の二例における連体修飾節のテイルとテイタは、ともに発話時視点によりテイルかテイタかが決定されるので、テンスの角度から見れば区別がつかないということになってしまう。

- (1) 開け放っていた縁側の戸をしめると、にわかにガラス戸越しに見る夜がふかくな
ったように思われた。 (『氷点』)

¹ ここでいう連体修飾節のテンス、アスペクトには、連体修飾節におけるル形、タ形の場合も含まれている。

² たとえば、寺村秀夫（1984）、岩崎卓（1995、1998a、1998b、2001）、工藤真由美（1989）、町田健（1989）、三原健一（1992）、中島孝幸（1994、1995）、三宅知宏（1995）、須田義治（2005）、日本語記述文法研究会（2007）、大島資生（2011）などがある。

³ たとえば、高橋太郎（1994）、日本語記述文法研究会（2007）などがある。

⁴ たとえば、益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）などがある。

⁵ 「視点の原理」とは、次のようなものである。

a. 主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は発話時視点によって決定される。

b. 主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は主節時視点によって決定される。

(2) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。(『赤い指』)

しかし、はたして連体修飾節のテイタはすべてテイルに置き換えることができるだろうか。筆者には疑問に思われる。

二つ目の視点である格関係について言うと、主名詞と連体修飾節の間には格関係がある一方、主名詞と主節の述語の間にも格関係は存在する。先行研究は、ほとんど主名詞と連体修飾節の格関係だけを扱っており、主名詞と連体修飾節の格関係と、主名詞と主節（主節の述語）の格関係、および上記の二つの格関係の一致可否についてはまだ研究が行われていない。そして、連体修飾節と主名詞の格関係の点だけから見れば、次の例文中の連体修飾節におけるテイルとテイタは区別ができない。

(3) 僕は床に落ちていた服を拾って着た。シャツの胸はまだ冷たく湿っていた。

(『ノルウェイの森』)

(4=2) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。

(『赤い指』)

例(3)でも例(4)でも、主名詞(服、ガラス戸)は、連体修飾節に対してガ格の関係をもつが、例(3)ではテイタが使われており、例(4)ではテイルが使われている。連体修飾節と主名詞の格関係だけでは、以上の連体修飾節のテイルとテイタの区別ができない。連体修飾節と主名詞との意味関係については、三つ目の視点で検討する。

最後に、非限定的連体修飾節をめぐる連体修飾節と主節の意味的關係という三つ目の視点に関する研究としては、益岡隆志(1997)、庵功雄他(2001)、日本語記述文法研究会(2008)などが挙げられる。

まず、益岡隆志(1997)は、非限定的連体節表現が具体的にどのような情報付加を行うのかを観察している。

「非限定的連体節表現の機能には、大別して二つの系列のものがある。一つは主節(または、それに準じるもの)で表されている事態に対する情報付加であり、もう一つは主名詞に対する情報付加である。」(益岡隆志(1997:168))

益岡隆志(1997:168)は、主節の事態に対する情報付加の主なものとして、「対比・逆接」、「継起」、「原因・理由」、「付帯状況」の関係を挙げている。それぞれの例を挙げると、以下のようになる。

(5) スタート時、最近の高校生を教えるのは難しいのでは、と不安だったという染丸師匠は、……今やノビノビ授業に取り組んでいる。 (「神戸新聞」1993.6.14)

(6) 控え室に戻った私は、9分間、時間を過ぎたことを係りの人にわびた。
(『マンボウ酔族館』)

(7) 責任を感じた功一は金の工面をまさ子に頼ることにした。
(「神戸新聞」1993.6.1)

(8) 「いいお天気だわあ。」と、門柱に軽く寄りかかるようにして空を見上げていた由美が言った。
(庄司薫『白鳥の歌なんか聞えない』)

例(5)では、連体修飾節で表されているスタート時の状況が主節で表されている今の状況と対比されている。例(6)では、連体修飾節の事態に続いて主節の事態が起こっている。つまり、「私」は、控え室に戻った後に係りの人にわびた、という時間関係になっている。例(7)では、連体修飾節「責任を感じた」と主節「金の工面をまさ子に頼ることにした」の間に因果関係がある。例(8)では、「由美が言った」という事態に付随する状況を連体修飾節「門柱に軽く寄りかかるようにして空を見上げていた」が表している。

一方、主名詞に対する情報付加とは、談話の冒頭や途中でよく使われ、名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報を連体修飾節によって与えるものである、とされている。たとえば、以下の用例である。

(9) コカイン密輸事件で逮捕、送検された角川書店社長の角川春樹容疑者は、父親の源義氏ともども異色の俳人として名が通っている。 (「神戸新聞」1993.8.31)

例(9)からもわかるように、連体修飾節は、主名詞の情報付加の役割をしているが、連体修飾節と主節の間には関係が見られない。

また、情報付加の働きをしているとは考えられない非限定的連体節表現は、「述定的装定」の表現と呼ばれている。たとえば、益岡隆志（1997：172）は、以下の例を挙げている。

(10) 身内の病人を秘して公務出張に精励している局長に一種の感動を覚えた。

（松本清張『中央流沙』）

例（5）から（9）までの非限定的連体節表現は、情報付加の働きをしているので、連体修飾節を取り除いても文は成立する。一方、例（10）のように、情報付加とは別の働きをもつものについては、連体修飾節を省略することができない。省略すると、次に示すように、不完全な文になってしまうからである。

(10′) ?局長に一種の感動を覚えた。

「これらの文が不完全なものになってしまうのは、主節の述語がその対象（ヲ格、二格）に事物（人物を含む）ではなく、事態を要求するからである。」（益岡隆志（1997：173））すなわち、例（10）は、次のような内容を表しているわけである。

(10′′) 局長が身内の病人を秘して公務出張に精励していることに一種の感動を覚えた。

このように、連体修飾節が形式の上では名詞を修飾する「装定」の表現になっているが、意味内容からすると「述定」として機能しているものがある（益岡隆志（1997：173））。非限定的連体修飾節は、基本的に情報付加の役割を果たしているが、本稿は、こうした情報付加の役割を果たすという特徴づけが当てはまらないような事例を考察対象から除外する。

庵功雄他（2001）によれば、非限定的連体修飾は、連体修飾節と主節が「継起」、「付帯状況」、「理由」、「逆接」といった意味的關係をもつ場合に用いられ、これら四つの用法は、いずれも主節の出来事や動作が起こる背景的な状況を表しているという点で共通している。これは、益岡隆志（1997）の説明とほぼ等しい。

相違点は、せいぜい、庵功雄他（2001）では、各々の意味的關係において連体修飾

節の述語がどのような形をとるかの説明が加えられている程度である。つまり、「継起」の場合は、連体修飾節の述語は、動作的な動詞に限られ、かつタ形をとる一方、「付帯状況」の場合は、結果状態を表す動詞のテイル形かタ形、または形容詞が連体修飾節の述語となり、「理由」と「逆接」の場合は特に制限がないとされている。また、話の脇筋を連体修飾節で表現することによって、本筋を明確にするということが非限定的名詞修飾を用いる理由として挙げられているが、これは、会話の先触れとなる非限定的名詞修飾を通じて、聞き手に対してスムーズに情報伝達を行うための配慮であるとされる。

さらに、日本語記述文法研究会（2008）は、非限定的連体修飾節について、それは、名詞についての補助的な情報の付加、主節の事態に対する背景的な事態の提示、主節の述語が要求する事態の提示という働きをすると述べ、詳しい説明を与えている。その中で、名詞についての補助的な情報の付加とされているものは、益岡隆志（1997）でいう談話の冒頭や途中で用いられる主名詞に対する情報付加に相当する。また、背景的な事態には、逆接的内容、対比、原因・理由、継起、付帯状況といったものがあるとされている点は、益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）の指摘とほぼ同じ内容だと考えられる。最後に、「主節の述語が要求する事態の提示」とは、益岡隆志（1997）が述べた「述定的装定」のことだと考えてよい。前述したように、この「述定的装定」は、典型的な非限定的連体修飾節の機能とはいえないため、本稿の考察対象からは除外される。

以上の諸説を表にすると、以下のようになる。表 1 は、非限定的連体修飾節と主名詞との関係のまとめであり、表 2 は、非限定的連体修飾節の述語と主節の述語との関係のまとめである。

表 1 非限定的連体修飾節と主名詞との関係

| | 非限定的名詞修飾節と主名詞との関係 |
|------------------|-----------------------------------|
| 益岡隆志（1997） | 名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報（談話） |
| 庵功雄他（2001） | 聞き手に対してスムーズに情報伝達を行うための配慮（会話） |
| 日本語記述文法研究会（2008） | 補助的な情報の付加 |

前述した通り、非限定的連体修飾節が主名詞に対する情報付加を行う場合には、連体修飾節は主名詞だけにかかわり、連体修飾節と主節との間には関係が見られない。連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を判断するためには、主節との関係の検討が必要になるため、このように、連体修飾節と主節との間に関係が見られない場合も考察対象からは除外される。

表2 非限定的連体修飾節の述語と主節の述語の関係

| 上) 非限定的名詞修飾節の述語と主節の述語の関係機能 | | 益岡隆志 (1997) | 庵功雄他 (2001) | | 日本語記述文法研 究会 (2008) |
|-------------------------------|----------------|----------------|--------------------------------------|----------------------------------|-----------------------|
| | | | 意味関係 | 動詞の制限 | |
| 情報付加 | 対比・逆接 | 逆接・対比 | なし | 逆接的内容 ⁶ 対比 | |
| | 原因・理由 | 原因・理由 | なし | 原因・理由 | |
| | 継起 | 継起 | 動作的な動詞 に限られ、タ形 | 継起 | |
| | 付帯状況 | 付帯状況 | 結果状態を表 す動詞のテイ ル形かタ形、ま たは形容詞 | 付帯状況 | |
| 情報付加 以外 | 「述定的装 定」の表現 | | | 主節の述語が要求 する事態の提示 ⁷ | |

先行研究は、連体修飾節と主節との関係を考察する一方、そこからさらに、連体修飾節に現れるテイタ、テイルなどの意味を追究するには至っていない。連体修飾節が

⁶日本語記述文法研究会 (2008) は、逆接的内容と対比を分けている。たとえば、日本語記述文法研究会 (2008 : 89) には、以下の例文が挙げられている。(1) は逆接的内容で、(2) は対比である。

(1) 好き嫌いがほとんどない私だが、ナスだけは苦手だ。(逆接的内容)

(2) 社交的で万事華やかな兄に比べ、弟は今一つぱっとしない。(対比)

つまり、主語が一つの場合は「逆接」(逆接的内容)を表すのに対し、主語が二つ以上の場合には「対比」を表すということになる。

⁷日本語記述文法研究会 (2008) は、思考や認識を表す動詞の「気づく」「想像する」や、感情を表す動詞の「感動する」「うらやむ」「失望する」など、および「捕まえる」「見る」「みかける」「目撃する」「出くわす」といった動詞については、何らかの事態を表す名詞節もその補語になり得る、と述べている。この点では、日本語記述文法研究会 (2008) の考察は、益岡隆志 (1997) より詳しいと言える。

含まれる複文は、連体修飾節、主名詞、主節（主節の述語）という三つの要素からなるため、この種の複文を考察する際には、これら三つの要素を考慮し、それらどうしの関係を明らかにする必要があると思われる。連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察する際には、以上のような、連体修飾節と主節との関係についての知見が当然必要になる。本稿は、以上の研究をもとに、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味と他の文構成要素とのかかわりを検討していく。

2.2 連体修飾節におけるテイタに関する先行研究および問題点

テイタのアスペクト的意味の特徴に注目した先行研究としては、中嶋孝幸（1995）と秋月康夫（2003）が挙げられる。

「一般に連体修飾節中のテイタ形はテイル形で置き換えることが可能な場合も多い」（中嶋孝幸（1995：30））が、テイタのすべてがテイルに置き換えられるわけではない。中嶋孝幸（1995）は、次の例を挙げている。

(11) ……定価を守っていた百貨店も、対抗上昨年暮れから安売りに走り、定価を設定する意味合いが薄れた。 （「朝日」94.8.14）

「これらの例では連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、以前の事態と対照的な事態が生じていることが主節で表されている。そこで有効に機能しているのがテイタ形である。……傍線部の動詞をテイル形にすると、連体修飾節と主節で意味が矛盾することになる」（中嶋孝幸（1995：30））

つまり、例（11）は、「事態の継続が途切れて新しい事態が生じた」（中嶋孝幸（1995：29-30））ことを表している。このような、連体修飾節に現れるテイルに置き換え不能⁸なテイタのもつ意味を「途切れ」と呼ぶとすれば、連体修飾節のテイタには途切れの意味があるということになる。

テイタの「途切れ」のアスペクト的意味は、秋月康夫（2003）において提唱された。

⁸ 本稿でいう「テイルに置き換え不能」は、日本語母語話者の判断によるものでなく、調査事例の分析によるものである。

秋月康夫 (2003) は、「ちょうど先生の話をしていたところです」などの文における「ていたところだ」の文法的性格について考察し、「ところだ」に前接する「ていた」は独自のアスペクトを表すとしてそれを「途切れ相」と名付けた。途切れ相という用語は、次のように定義されている。

「動作の継続や思考・感情の状態の持続が、動きが完成したり行為者の意志によって終わるのではなく、動作や思考・感情の主体の外部の出来事によって切れ目を生じ、その後も同じ動作や思考・感情の状態が続くのかどうかが決まっていない局面」
(秋月康夫 (2003 : 59))

つまり、先ほどの例文中の「していたところです」は、「先生」がその場に入ってきたときの「話」が中断した局面を取り出して表現する (秋月康夫 (2003 : 60)) ののである。

秋月氏は、「テンス的には現在に対する一時的後退性、アスペクト的には<途切れ>を表す用法があり、「ていたところだ」における「ていた」は、「ところだ」の作用によりこの用法のアスペクト的な側面が取り出されたものである」(秋月康夫 (2003 : 53)) と述べている。けれども、この点については、「途切れ」という意味が、「ところだ」の後接する場合だけでなく、連体修飾節一般の文脈においても見いだせるのではないかという疑問が残る。

テイタに「途切れ」という意味を認め、かつこれをテイタの独自のアスペクト的意味と見なす点では、中嶋孝幸 (1995) の主張は、秋月康夫 (2003) と共通する。また、「途切れ」は、「持続していた状態が途切れる」という基本的な意味をもつが、「ところだ」文と連体修飾節では文の構造が異なるため、途切れの特徴も異なるものと考えられる。つまり、「ところだ」という文脈では、それは、前述した「途切れ相」という文法的性格を有するが、連体修飾節という文脈では、途切れは、違う様相と特徴を呈するものと考えられる。

さらに、「途切れ」を表す例文は多く見られるが、それらが「テイルに置き換え不能」という特徴をもつことについては、これまであまり注目・研究されてこなかった。中嶋孝幸 (1995) では、途切れの意味については、前記の記述があるのみであり、このような文のテイタの特徴についてはさらなる検討が必要であろう。たとえば、以

下の用例を見てほしい。

(12) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。
〔『あした来る人』〕

(13=2) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。
〔『赤い指』〕

二例とも、連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節において対照的な事態が生じているが、注目されるのは、どちらの連体修飾節においても、テイルが使われていることである。これらは、中畠孝幸（1995）の主張への反例のようにも見えるが、本稿はむしろ、連体修飾節で「途切れ」の意味のテイタを使うときに必要となるような条件が中畠孝幸（1995）では考慮されていないために、上の二例があたかも反例のように見えてしまうのだと考える。

このように、本稿は、連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味に着目し、途切れの意味のテイタを使うための条件を考察する。また、連体修飾節におけるテイルとの比較により、テイタの特徴を追究する。

2.3 動詞のアスペクト的意味に関する先行研究および問題点

動詞の分類についての先行研究としては、金田一春彦（1955）、藤井正（1976）、奥田（1977）、工藤真由美（1995）などがよく知られている。そして、従来、動詞のアスペクト的意味としては、主に「動作の持続」（又は「進行中」）と「変化の結果の持続」（又は「結果の残存」）の二つが挙げられてきた。これらのアスペクト的意味は、語彙的意味に依存していると言える。つまり、動作動詞（または金田一春彦（1955）の言う「継続動詞」）の場合、動詞のアスペクト的意味は、「動作の持続」（又は「進行中」）になり、変化動詞（または金田一春彦（1955）の言う「瞬間動詞」）の場合、動詞のアスペクト的意味は、「変化の結果の持続」（又は「結果の残存」）になる。

しかし、従来指摘されてきた「動作の持続」と「変化の結果の持続」というテイル（テイタ）の主な二つのアスペクト的意味だけでは、小説などの実際の分析には不十分であると思われる。たとえば、次の用例を見てほしい。

(14) みんなこくんとうなずく。「同じ数を使っていいの」 後ろの端の座席に座って
いた大野くんが、机に両手をついて乗り出すようにして言う。

(『算数授業に子どもたちの生きる姿を見た』)

(15) 窓ぎわに立っていた村井が、白衣のポケットに手を入れたまま啓造をみてうす
わらいを浮かべた。 (『氷点』)

(16) 文部省と大学病院は研修義務化に向けての準備に早急に取り組むべきだろう。
…中略…臨床研修が義務化されれば、この期間のアルバイトはできなくなる。

研修医を安く雇っていた病院などには痛手だろうが、やむを得ない。

修業中の医師に診察を受けていた患者にとっても好ましい方向だろう。

(「毎日新聞」95.1.11)

例 (14) の「座る」と (15) の「立つ」は、従来の研究では変化動詞と見なされてきた。しかし、それらは、典型的な変化動詞「死ぬ」、「結婚する」などとは異なる。そのことは、たとえば、「長い間死んでいる」、「長い間結婚している」とは言えないのに対し、「長い間座っている」、「長い間立っている」とは言えるという点からも明らかである。小説の中では特に、「座る」「立つ」は高い出現率を示している。ゆえに、これらの動詞の継続相の意味を解明することが、一つの課題になる。また、これと類似の動詞がほかにないか、またそれは、どのような方法で判断できるかを追究する必要もあると思われる。

こうした課題を解決するためには、「状態の持続」というアスペクト的意味を導入する必要があると本稿は考える。したがって、本稿では、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を手がかりとして、新たに「状態の持続」というアスペクト的意味を提案したい。

一方、例 (16) における「雇う」と「受ける」の継続相は、「動作の持続」の意味とは解釈しにくい。このような例に対しては、連体修飾節におけるテイタの意味解釈に「途切れ」というアスペクト的意味を導入することによって対応したい。2.1 で示されたテイタの「途切れ」のアスペクト的意味については、その特徴や他のアスペクト的意味との区別などはまだ研究されていない。本稿は、連体修飾節のテイル、連体修飾節のタ、および主節のテイタとの比較研究などのあらゆる角度から、連体修飾節に

おけるテイタの特徴を明らかにすることを目指す。

2.4 まとめ

以上、連体修飾節に関する先行研究、連体修飾節におけるテイタに関する先行研究、および動詞のアスペクト的意味に関する研究を概観し、それぞれの問題点を指摘した。

連体修飾節に関する先行研究に従うと、連体修飾節におけるテイタとテイルの区別をテンスの角度から判断することはできず、また、連体修飾節と主名詞との格関係の観点からだけでも、この問題を解決することは無理であると思われる。また、先行研究は、連体修飾節と主名詞との関係については詳しく研究してきたが、連体修飾節とアスペクト的意味との関連等については深く追究してこなかったことが明らかになった。

本稿は、連体修飾節のアスペクト的意味を考察するためには、連体修飾節、主名詞、主節の三者の関係を検討しなければならないという立場に立っている。従来の研究では、連体修飾節と主名詞の格関係、主名詞と主節の格関係、両者の格関係の一致可否、そして連体修飾節と主節との関係といった角度から連体修飾節のテイタのアスペクト的意味が追究された例はない。本稿は、こうした従来看過されてきた角度から、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を追究したい。

本稿は、連体修飾節におけるテイタは、テイルにないアスペクト的意味をもつと考える。そして、そのアスペクト的意味とは、途切れであると思われる。しかし、従来の研究では、この点は深く追究されておらず、研究の余地がまだ多く残されている。本稿は、連体修飾節におけるテイタの途切れの意味に着目し、「途切れ」の意味特徴を追究する。また、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を手がかりとして、新たに「状態の持続」という動詞のアスペクト的意味を提案したい。

3 非限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクトの意味

連体修飾節は、機能的には、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節に分けられる。非限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除いても文意は大きく変わらないのに対し、限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除くと文が成り立たなくなるか、文意が変化する場合がある。こうした違いがあるため、連体修飾節のテイタが「途切れ」を表すとき、限定的連体修飾節の場合と非限定的連体修飾節の場合とでは違う様相が観察される。まず、非限定的連体修飾節の場合を見ていこう。

3.1 非限定的連体修飾節と主節との関係

連体修飾節には、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節がある。そして、2.1 で述べた通り、非限定的連体修飾節の機能は、まず、主名詞に対する働きは情報付加で、主節に対する働きは情報付加とそれ以外に分けられる。情報付加はさらに、逆接・対比、継起、付帯状況、原因・理由に分けられる。2.1 では、連体修飾節と主節との関係を検討し、結果を表 2 にまとめた。そこから「情報付加以外」を除くと、次の表になる。

表 1： 非限定的連体修飾節の述語と主節の述語の関係

| 関係 (機能上) | 益岡隆志 (1997) | 庵功雄他 (2001) | | 日本語記述文法 研究会 (2008) |
|--------------|----------------|-------------|----------------------------------|-----------------------|
| | | 意味関係 | 動詞の制限 | |
| 情報 付 加 | 対比・逆接 | 逆接・対比 | なし | 逆接的内容、対 比 |
| | 原因・理由 | 原因・理由 | なし | 原因・理由 |
| | 継起 | 継起 | 動作的な動詞に限られ、 タ形 | 継起 |
| | 付帯状況 | 付帯状況 | 結果状態を表す動詞の テイル形カタ形、または 形容詞 | 付帯状況 |

以上はいずれも連体修飾節の概観であり、より具体的に、連体修飾節におけるル形、タ形、テイタ形、テイル形がどのような特徴をもつのかは明白ではなく、さらなる追究を必要とする。本稿では、非限定的連体修飾節に現れるテイタに焦点を絞り、実例を通して、テイタが含まれる連体修飾節と主節の意味関係を確認しながら、連体修飾節におけるテイタの「途切れ」のアスペクトの意味を考察したい。

3.1.1 付帯状況

付帯状況とは、連体修飾節の状態が主節の出来事と同時に存在することを表す（庵功雄他（2001））ものである。非限定的連体修飾節の「付帯状況」の機能については、以下のような例がある。

(1) ふいに種一の机の上の電話が鳴った。そしてそのすぐ近くに座っていた種一が、
ついうっかり受話器を取り上げてしまったのだ。

「はい」

と、種一は半分まだ笑いの残っている顔で受話器を握りしめ、そして瞬間的に白い無表情になった。 (『新橋烏森口青春篇』)

(2) 女たちと一緒に立っていたアルさんは言った。 (『あした来る人』)

例(1)は、「種一」が「座っていた」という状態に付随して「受話器を取り上げた」という動作を行ったことを表す。例(2)は、「アルさん」が「言った」という動作に付随する状態を連体修飾節「女たちと一緒に立っていた」が表している。

庵功雄他（2001）では、この用法における連体修飾節の述語は、結果状態を表す動詞のテイル形かタ形、または形容詞であるとされている（表1を参照）。この説を裏づける例としては、ほかに、「たたずむ」「みあげる」といった動詞を用いた以下のような例が観察される。

(3) 改札口にたたずんでいた鈴木が私に気づいて手を振った。

(日本語記述文法研究会（2008：89）)

(4) 「いいお天気だわあ。」と、門柱に軽く寄りかかるようにして空を見上げていた由美が言った。 (益岡隆志 (1997 : 169))

しかし、連体修飾節の述語は、常に結果状態を表す動詞のテイル形であるとは限らない。たとえば、以下の用例である。

(5) 昼食の時間だった。職員室でいつも通り弁当を食べる。皆の服装が違っている以外は日ごろと同じ光景なのだが、教師達もなんとなく浮ついているように見える。会話も多い。話題は職員対抗リレーにおける藤本の快走と、体育祭が終わった後どこへ飲みに行くかということ。どのチームが優勝するかという話は一切出ない。

仮装行列の話が出た。隣で食べていた藤本が私に訊いた。

「前島先生は酔っ払ったピエロだという話ですけど、本当に酒を飲むのですか。」

「まさか、中身は水だよ」

(『放課後』)

例 (5) では、「藤本」が「私に訊いた」という動作を行った時点に「(昼食) を食べていた」という状態が付随している。この「食べる」は、動作動詞（継続動詞ともいう）であり、「食べていた」は、「動作の継続」の意味になる。要するに、主名詞が「食べる」という動作を継続しながら、主節の動作を行った、ということである。また、次の例も同様に考えることができる。

(6) 路傍で煙草を喫んでいた運転手が声をかけて来た。八千代が荷物を持っていないのを不審に思っている風であった。 (『あした来る人』)

この例でも、「運転手」が「声をかける」という動作に付随する状態を、連体修飾節「路傍で煙草を喫んでいた」が表している。

3.1.2 逆接・対比¹

¹ 厳密に言えば、テイタが含まれる連体修飾節と主節の述語の関係は「対比」であり、「逆接」ではないが、ここでは「対比」と「逆接」の区別をしない立場に立っている。

テイタが含まれる連体修飾節と主節との間に対比の関係が見られる例は数多い。たとえば、以下のような例である。

(7) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。 (『赤い指』)

(8) 石田部長の名も安田辰郎の名もある。しかし佐々木喜太郎の名はどこにもなかった。一佐々木が安田辰郎の名前で乗船したことは、この結果で明瞭だった。

三原の前に屹立していた巖壁は崩れた。彼はこんどこそ勝利をつかんだ！

(『点と線』)

以上の二つの例では、連体修飾節の述語と主節の述語との間に対比の関係が見られる。例(7)では、「外出していた」と「帰る」、例(8)では「屹立していた」と「崩れた」という主名詞前後の動詞が対比の意味をもっている。

益岡隆志(1997)、庵功雄他(2001)、日本語記述文法研究会(2008)が挙げている例は、そのほとんどが主名詞と連体修飾節の間および主名詞と主節との間に主体の関係がある例であるが、以下のような、主名詞と連体修飾節の間および主名詞と主節との間に対象の関係がある例もある。

(9) その長い間放擲していた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりた
いし、そうかと言ってあんまり知らない田舎へなぞ行ったら淋しくてしようがあるま
いからと言った、例の私の不決断な性分から、この土地ならそのすべてのものが私に
さまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知った人
には会わないだろうしと思って、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわ
ざわざ私はやって来たのであった。 (『美しい村』)

(10) すると伯父は持っていたフォークを置いて、そんなけちな事を考える必要はな
いと言った。お前のお母さんはまだ若いし、元気だ。学資はいままで通りに続けてや
るから、やれる所までやってみろ。お前にそれだけの能力があるものならば、能力の
限りを発揮するのが正しい生き方というべきだ。 (『青春の蹉跎』)

例(9)では、連体修飾節の述語「放擲していた」と主節の述語「取り上げる」の間で、また例(10)では、連体修飾節の述語「持つ」と主節の述語「置く」の間で、い

ずれも対比的な関係が成り立っている。

以上の例では、主名詞と連体修飾節の格関係と、主名詞と主節の格関係は一致していることがわかる。しかし、そうではない場合もある。

(11) 受話器を片手で押さえ、種一は世にもアワレ、というような顔をして我々を見回した。それから慌てて受話器を覆っていた手を離し、「あっ、わかりましたですう」と、言った。 (『新橋烏森口青春篇』)

(12) 僕はずいぶん長いあいだベッドの中でじっとしていたが、思いなおしてベッドから出て、床に落ちていた時計を拾い上げ、月の光の方に向けてみた。 (『ノルウェイの森』)

3.1.3 原因・理由

たとえば、以下のような例である。

(13) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。 (益岡隆志 (1997 : 169))

(14) そこへ娘たちが、にぎやかに笑いさざめきながら近づいてきた。娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした。それを岩陰から眺めていた人魚姫は、取り残されたような思いで悲しくなった。王子が娘たちの手で白い寺院の中に運びこまれてしまうと、姫はしょんぼりして海の底のお城へもどっていった。 (『本当は恐ろしいグリム童話』)

以上の二例では、どちらの場合も、連体修飾節の部分は主節の事態が起こる原因・理由を説明している。例(13)は、「私は去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていたので、今日明日にも令状のくる心配があった。」という因果関係を表す文と同じ内容を表している。例(14)も同様で、「人魚姫は娘たちが倒れている王子を見つけ走り寄って抱き起こしたことを岩陰から眺めていたので、取り残されたような思いで悲しくなった。」という因果関係を表す文と同じ内容をもつと見ることができる。また、これら二つの例からもわかるように、主節の述語は、「心配する」「悲しくなる」とい

った内的情態動詞であることにも共通点が見られる²。

3.1.4 継起

庵功雄他（2001）によれば、継起は、連体修飾節の出来事が終わってから主節の出来事が起きたことを表し、そこでは、連体修飾節の述語は、動作的な動詞に限られ、かつタ形をとる。たとえば、以下の例文は典型的であり、タ形のみを取っている。

- (15) 昼食を食べた大下は急ぎの仕事をしに会社に戻った。（庵功雄他（2001：388））
(16) 非常呼集を受けた警官はすぐ現場に赴いた。（佐良木昌、新田義彦（2008））
(17) 裁判所から出てきた被告は新聞記者たちに取り巻かれた。（同上）

(15) は、「大下」が「昼食を食べた」あとで「会社に戻った」ことを表し、(16) は、「警官」が「非常呼集を受けた」あとで「現場に赴いた」ことを表す。また、(17) は、「被告」が「裁判所から出てき」てから、「新聞記者たちに取り巻かれた」ことを表している。いずれの例でも、連体修飾節と主節との間には、時間的な継起の関係がある。一方、庵功雄他（2001：389-390）は、テイタをとる例としては、次の一例だけを挙げている。

- (18) 荷物が届いたとき、すでに倉庫に到着していた田中係長は手際よく荷物を運び入れた。（庵功雄他（2001：390））

庵功雄他（2001）は、(18) は、継起とも理由とも解釈が可能であると述べたうえで、話の脇筋（ここでは、荷物が「すでに倉庫に到着していた」ことを指す）を連体修飾

² それに対し、タ形が含まれる連体修飾節と主節が「原因・理由」を表す場合は、主節の動詞は、内的情態動詞のほかにも動作動詞の場合もありうる。次の例文を見られたい。

- (1) 最愛の息子を失った彼女は、人生に絶望した。（佐良木昌、新田義彦（2008））
(2) 人生に絶望した彼は海に身を投げた。（同上）
(3) 煙草をやめた高木はストレスのためかよく食べる。（庵功雄他（2001：388））
(4) 風邪を引いた渡辺は学校を休んだ。（庵功雄他（2001：389））

このように、タ形が含まれる場合は、連体修飾節と主節のどちらかに内的情態動詞が使われる場合のほか、どちらにおいても動作動詞が使われる場合もある。それに対し、テイタ形が含まれる場合は、本稿が集めた例文を見る限り、主節に内的情態動詞が使われる例が多い。この点に関しては、今後さらに多くの例文を集めた上で検討を続けたい。

節で表現することによって、本筋（ここでは、「荷物が届いたとき、田中係長が荷物を運び入れた」ことを指す）を明確にするという談話における働きがそこにはあると主張している。連体修飾を用いないとすれば、(18) は、次のように表現されよう。

(18') 荷物が届いたとき、田中係長はすでに倉庫に到着していて手際よく荷物を運び入れた。

益岡隆志・田窪行則（1992：115）によれば、テイル形はまた、動きが完了していることを表すことができる。そして、「もう」「すでに」「まだ」（否定表現の場合）などが同時に用いられると、完了状態の意味がより明確になる、と述べている。本稿は、「すでに到着していた」については、到着した結果の持続の「状態」を表すものと見なし、「運び入れた」という「動作」との組み合わせは、物事が相次いで起こるといった典型的な「継起」関係とはいえないと考える。ほかにこのようなテイタが「継起」を表す例文がまだ確認されていないため、本稿は、この種の事例に関しては、一応「継起」の関係を認めないものとする。

このように、タ形が含まれる連体修飾節と主節は、「継起」の関係を明白に表すことができるのに対し、テイタ形が含まれる連体修飾節と主節が「継起」の関係を表すような例文はめったに見られない³。これは、タ形は、完成相として、基本的に動作の全体を表し、前の動詞の動作が完結してから、次の動詞の動作が続く（つまり、「継起」になる）のがごく自然だからである。一方、テイタ形は、継続相として、動作や変化の進行中の一局面を表すため、動作間の「継起」関係を表現しにくい。

3.2 「途切れ」について

庵功雄他（2001）の「動詞の制限」の説明によれば、連体修飾節のテイルとテイタの場合、連体修飾節と主節との関係には「付帯状況」、「逆接・対比」、「原因・理由」

³ テイタが含まれる連体修飾節と主節との関係は、すべて時間的な前後の関係に見えるが、「途切れ」の用法の基本は、連体修飾節の動詞が表す動作や状態が中断し、新しい状態（とはいえ、前の動作や状態と対照的と言えるような動作や状態に限られる）に移行するという点にある。このため、この用法は、「継起」のようにも見えるが、典型的な「継起」とはいえない。前の動詞が表す動作や状態が「終結」しなければ、「継起」とはいえないからである。

の三つがある。例 (19) は、「逆接・対比」の例で、例 (20) は、「原因・理由」の例、そして、例 (21) は、「付帯状況」の例である。

(19=7) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。

(『赤い指』)

(20=13) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。(益岡隆志 (1997: 169))

(21) 昭夫はため息をつき、カーテンから離れた。ソファに腰を下ろした。

「どう？」ダイニングチェアに座っていた八重子が訊いてきた。(『赤い指』)

途切れが表されるときには、連体修飾節と主節との間に対照的事態が見られるということからすれば、途切れの意味をもつことが可能なのは、「逆接・対比」の場合のみであると考えられる。

3.2.1 格関係一致

以下の二例とも、連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節において対照的な事態が生じているが、例 (22) ではテイタが使われているのに対し、例 (23) ではテイルが使われている。

(22) 開け放っていた⁴縁側の戸をしめると、にわかにガラス戸越しに見る夜がふかくなつたように思われた。(『氷点』)

(23) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。(『赤い指』)

非限定的連体修飾節で途切れを使うときの条件について、本稿は、格関係一致の角度から考察する。格関係は、主名詞と連体修飾節の間にある一方で、主名詞と主節の述語の間にも存在する。先行研究 (高橋太郎 (1994)、日本語記述文法研究会 (2007) など) は、ほぼ主名詞と連体修飾節の格関係だけを扱っており、主名詞と主節 (主節

⁴ 「開け放つ」は、他動詞で、「開け放す」の老人語 (『新明解国語辞典 第五版』) であり、意味は「開け放す」に同じである (『大辞泉』)。

の述語)の格関係、および上記の二つの格関係の一致可否には触れていない。

例(22)では、主名詞が縁側の戸で、「縁側の戸を開け放していた」、「縁側の戸を閉める」という関係で、主名詞は連体修飾節に対しても主節に対しても対格をもつので、格関係が一致している。一方、例(23)では、主名詞「ガラス戸」は、連体修飾節の述語「開けっ放しになっている」に対しては主格の関係をもち、主節の述語「閉める」に対しては対格の関係をもつため、格関係が一致していない。例(22)では、「開け放っていた」状態が主節の事態により中断されて(途切れて)状態が変化し、閉まる状態が生じたと言える。「縁側の戸」が対象であり、対象の状態の変化が見られる。

(24=7) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。

(『赤い指』)

例(24)では、連体修飾節の「外出していた」状態が、主節の事態が実現されたことにより中断されて(途切れて)状態が変化し、「帰ってきた」という新しい事態が生じている。ここでは「政恵」が動作の主体であり、主体の状態の変化が見られる。

つまり、同一の主体(或は対象)が矛盾した連体修飾節の状態と主節の状態の双方に同時に置かれることは不可能なので、双方の格関係が一致すると、連体修飾節の状態が主節の状態により途切れて状態が変化し、新しい状態として主節の状態が生じるということになる。これは、(この種のテイタ形を)「テイル形にすると、連体修飾節と主節で意味が矛盾することになる」という中島孝幸(1995:30)の指摘の意味するところだと思われる。ここでは、連体修飾節の状態と主節の状態に連続性が見られる。その一方で、次の例のように、テイルが含まれる連体修飾節の場合も、連体修飾節と主節との間に対照的事態が見られる。

(25) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごを結びつけているリボンを解いた。

(『あした来る人』)

(26=23) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。

(『赤い指』)

以上の二例では、主名詞(リボン、ガラス戸)は、主節の対象(「杏子がリボンを

解いた」、「昭夫がガラス戸を閉める」）である一方、連体修飾節の主体（「リボンが子犬の首輪とかごとを結びつけている」「ガラスが開けっ放しになっている」）でもある。ここでは、連体修飾節と主節が同じ対象（主体）を共有していないので、連体修飾節の状態と主節の状態は矛盾していない。このような場合には、テイルもテイタも両方許されるものと考えられる。

3.2.2 調査

この格関係一致の視点から見た途切れの特徴を確認するために、合わせて9作品の小説（『あした来る人』、『黒い雨』、『青春の蹉跎』、『ノルウェイの森』、『赤い指』、『点と線』、『証明』、『人間の証明』、『氷点』）を対象として、連体修飾節と主節とが逆接⁵の関係にあるような非限定的連体修飾節に現れるテイルとテイタの例を集めて調査した⁶。「ていた」「でいた」「ている」「でいる」⁷の形式を主な調査対象とした。また、調査に際しては、次のような例は除外した。たとえば、

(27) 梶は今まで結んでいたネクタイを解いて、赤いネクタイに結び替えた。

（『あした来る人』）

「今まで」があればテイタが確実に選ばれるので、これを含む文は、本稿の調査対象としては不適切である。同様の表現としては、「それまで、これまで、今日まで、昨夜まで、～（動詞）まで、先刻」などが挙げられる。これらを含む事例は、すべて調査の対象外とした。以上の条件に合致する文例は、合計112例であった。調査結果は、

⁵次の例において、連体修飾節と主節は「対比」の関係にあると思われるが、これを「逆接」とは言いにくいので、考察対象からは除外した。

「稽古も大変だけれど、雑事が多いのよ。ところが面白いことに、いつも茶の間にごろごろしている連中が、こんな時はよくやってくれるんだからねえ。会場やら、プログラムや会券の印刷からポスターまで、いつのまにか役割が決まっちゃってね。おかげで助かるわねえ」

（『氷点』）

⁶ 連体修飾節のテイタとテイルは、文末のテイタ、テイルより数が少ないうえ、連体修飾節と主節との関係を「逆接」に限定したため、条件に合致する例文はさらに少なくなった。限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節の区別は必ずしも明確ではないので、判断に迷うところもある。この点については、時間を置いてまた見直したい。

⁷ 「てた」「でた」などの省略形は、連体修飾節では考えられないため、調査対象に入れていない。

表3の通りである。

表3 格関係一致の視点からの調査結果

| 視点 | テイタ | テイル |
|--------|-----------------|-----|
| 格関係一致 | 83 ⁸ | 0 |
| 格関係不一致 | 12 | 17 |

連体修飾節におけるテイルの格関係の一致の例が0件であることから、テイタが含まれる連体修飾節は、連体修飾節と主節との格関係の一致をその特徴とすることがわかる。また、83件という用例数からわかるように、「途切れ」が連体修飾節において使用率が高いことも窺える。

テイタが含まれる連体修飾節が格関係の不一致を示す用例は12件である。たとえば、次のようなものである。

(28=12) 僕はずいぶん長いあいだベッドの中でじっとしていたが、思いなおしてベッドから出て、床に落ちていた時計を拾い上げ、月の光の方に向けてみた。

(『ノルウェイの森』)

検証事例：

(29) 部下の二人が敵の腕を掴み、銃を取り上げた。残りの二人が関谷を引き起こし、落ちている銃を拾い上げた。(『白鳥殺人事件』)

これらの例では、連体修飾節と主節と同じ対象（主体）を共有していない。連体修飾節の状態と主節の状態が矛盾していないので、テイルもテイタも許されるものと考えられる。

この点を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（中納言）で検証してみた。「落ちる」の他動詞は「落とす」である。そこで、「落ちている%を」、「落ちていた%を」、「落としている%を」、「落としていた%を」の4項目を設定し、それぞれについて、連体修飾

⁸ そのうち、ガ格（主格）が一致するのは60例であり、ヲ格（対格）が一致するのは23例である。

⁹ 「%」は、0個以上の任意の文字列（例：国立%所⇒「国立国語研究所」「国立社会保障・人口問題研究所」など）の記号である。

節と主節が「逆接」の関係にあるような非限定的連体修飾節に現れる用例数を調べた。「落ちている%を」、「落ちていた%を」は格関係が一致していない。「落としている%を」、「落としていた%を」は格関係が一致している¹⁰。調査結果を次の表4にまとめた。

表4 格関係一致可否と連体修飾節のテイタ・テイルの使用の関係

| 調査項目 | 用例数 (条件に合致した用例数) |
|----------|-----------------------|
| 落ちている%を | 21 (18) |
| 落ちていた%を | 62 (23) |
| 落としている%を | 24 (0) |
| 落としていた%を | 18 (4 ¹¹) |

格関係が一致していない場合は、「落ちている」(18例)と「落ちていた」(23例)の双方が使われている。一方、格関係が一致する場合は、「落としていた」(4例)は使われているが、「落としている」(0例)は使われていない。格関係が一致していない場合は、連体修飾節のテイタをテイルに置き換えることが可能であるが、格関係が一致している場合は、テイルに置き換えることができないものと見られる。

このように、非限定的連体修飾節のテイタが「途切れ」を表すとき、連体修飾節と主節とは逆接の関係にあり、かつ主名詞の連体修飾節に対する格と主名詞の主節に対する格が一致することがその特徴であることが明らかになった。

3.3 他のアスペクト的意味との関連

まず、以上のような、連体修飾節におけるテイタが「途切れ」を表す例を、連体修飾節と主節とが「付帯状況」の意味関係にある例と比較してみよう。

(30=2) 女たちと一緒に立っていたアルさんは言った。 (『あした来る人』)

(31=3) 改札口にたたずんでいた鈴木が私に気づいて手を振った。

(日本語記述文法研究会 (2008 : 89))

¹⁰ 「落ちている%が」、「落ちていた%が」、「落としている%が」、「落としていた%が」なども調べたが、条件に合致する用例数が全部で5件足らずとあまりに少ないため、ここでは主なデータとして取り上げないことにした。

¹¹ たとえば、次のような用例である。

「同じ歳の人や歳下の人がお父さんより偉くなって、一杯お金を稼いでいても？」 膝上に視線を落としていた利治が顔を上げ、まっすぐに城山の瞳を射抜いた。 (『カリスマ』)

例 (30) では、「アルさん」が「言った」という動作に付随する状態を連体修飾節「女たちと一緒に立っていた」が表している。例 (31) は、「鈴木」が「改札口にたたずんでいた」という状態に付随して「手を振った」という動作が行われたことを表している。

両者の違いは、連体修飾節と主節が「逆接」の意味関係にある場合には、主名詞としての一つの主体は、連体修飾節で表される状態と主節で表される状態の双方に同時に存在することはできないのに対し、連体修飾節と主節が「付帯状況」の意味関係にある場合には、主節の動作に同時に付随する状態を連体修飾節が表すので、主名詞としての主体は、連体修飾節で表される状態と主節で表される状態の双方に同時に存在することができることにある。

須田義治 (2005) は、「以下にあげる例はシテイタにも言い換えられる」と述べている。

(32) 百合はうなづいて、テレビの歌番組に見入っている (○見入っていた、筆者注)
子供たちに、「早くお風呂入っちゃいなさいよ」と声をかけた。 (『ビタミンF』)

(33) 子供は、とっさに、じいっと見つめている、(○見つめていた、筆者注) 三千代
の眼をおそれた。 (『めし』)

例 (32) と例 (33) における「見入っていた」と「見つめていた」¹²は、「動作の持続」の意味として捉えることができる。しかし、二例とも、連体修飾節の状態に変化は見られない。つまり、例 (32) の場合、主節の述語は「声をかける」で、子供たちの「見入っている」状態には変化が見られない。子供たちは、テレビの歌番組に見入りながら、百合のかけてくる声を聞いているのである。一方、例 (33) では、主節の述語が「おそれる」という感情を表す内的状態動詞で、恐れる主体は子供、恐れる対象は「じいっと見つめている三千代」である。ここでは、主体の状態と対象の状態のいずれにも、何の変化も見られない。「見つめている」は、状態として三千代を修飾しているだけで、三千代の状態に変化を起こさない。つまり、例 (32) と例 (33) は、

¹²「見入っていた」と「見つめていた」は、正確に言えば状態の持続であるが、「見入る」と「見つめる」は、動作でないとは言い切れない。ここでは「見入る」と「見つめる」を動作として捉えている。

連体修飾節においてテイタが使われてはいるが、それは、持続的な意味を表すだけで、(主体あるいは対象の) 状態の変化を起こさないという点で共通している。

次に、連体修飾節のテイタが「途切れ」を表す例を、連体修飾節と主節が「原因理由」の意味関係を表す例と比較してみよう。3.1 で挙げた次の例を見てほしい。

(34=13) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。(益岡隆志(1997:169))

(35=14) そこへ娘たちが、にぎやかに笑いさざめきながら近づいてきた。娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした。それを岩陰から眺めていた人魚姫は、取り残されたような思いで悲しくなった。王子が娘たちの手で白い寺院の中に運びこまれてしまうと、姫はしょんぼりして海の底のお城へもどっていった。

(『本当は恐ろしいグリム童話』)

工藤真由美(1995)は、パーフェクトを、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」を表していると規定し、次の3点を強調している。

①発話時点、出来事時点とは異なる<設定時点>が常にあること

②設定時点に対して出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての<先行性>を含んでいること

③しかし、単なる<先行性>ではなく、先行して起こった運動が設定時点とのむすびつき=関連性をもっていると捉えられていること。つまり、運動自体の<完成性>とともに、その運動が実現した後の<効力>も複合的に捉えるというアスペクト的要素をもっていること

(工藤真由美(1995:99))

要するに、パーフェクトの特徴は、「先行性」、「完成性」、運動が実現した後の「効力」などにあるのである。

例(34)では、「私」は、「去年の検査で第二乙種合格を申し渡され」たあと、「今日明日にも令状のくる心配があった」ということが述べられている。これは、連体修飾

節で表される事態が完了したあと、その事態の効力が続いた結果として、主節の事態につながったものと思われる。例(35)も同様で、「人魚姫」は、「娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした」ことを「岩陰から眺め」た後、つまり、「眺める」という動作が完了した後、「取り残されたような思いで悲しくなった」わけで、ここでも、前の事態の効力ゆえに、主節の事態に至ったものと見ることができる。

要するに、これらの例では、連体修飾節で表されている事態が原因となり、後続の主節の事態(結果)が引き起こされている。つまり、連体修飾節の動作が完成した後、その効力が続き、それが主節に反映されているのである。したがって、この種の連体修飾節に現れるテイタは、パーフェクトの意味を表すことができる。

以上の例に見られるように、連体修飾節のテイタがパーフェクトの意味を表す場合、連体修飾節の事態と主節の事態とは異なる事態で、かつ連体修飾節の状態には変化が見られない。

一方、連体修飾節のテイタが途切れの意味を表す場合には、連体修飾節の事態と主節の事態とは逆接の関係にあり、主節の事態によって連体修飾節の事態が中断されるので、そこには上記の「先行性」の特徴が確かに認められると言える。しかし、「完成性」と「効力」という他の二つの特徴もまた認められるとは限らない。たとえば、次の例を見られたい。

(36) メキシコ・シティまでの飛行は快調だった。ネグロ川の黒い流れを遡上し、コロンビア上空を一気に横断して太平洋上に出る。洋上はるかにユカタン半島が霞んでいる。しかし、メキシコ・シティでは予定していたロサンゼルス行きのユナイテッド航空のジャンボがエンジン・トラブルを起こし、三時間も出発が遅れてしまう。ひたすら北西へ飛びつづけて四時間、時差があるためにロス空港到着はまだ午後五時を過ぎたばかりだが、もう、東京行きの便はない。 (『狼の追跡』)

(37) 他の一つは、民衆詩人ホイットマンの詩を読み、キリスト教の「罪」の意識から解放されたことである。霊と肉の葛藤に長年悩んでいた武郎は、自己の悪や弱さを、肉欲さえも含めてそのすべてを肯定し、自己の要求のままに自己をつらぬいて生きることこそ真の愛の姿だと説くホイットマンに、一つの救いを見出したわけであった。しかし武郎を解放したこの思想は、ブルジョア的限界を持った武郎の弱点にもなった。

例(36)では、「ロサンゼルス行きのユナイテッド航空」がメキシコ・シティに行く前、既に予定するということが実現していたにちがいない。連体修飾節の状態に変化があり、「三時間も出発が遅れてしまう」という主節の事態になったのである。連体修飾節の「予定していた」は、ここでは確かに完成性を有すると思われるが、例(37)の場合、「悩んでいた」という事態が完成性を有するとはいえない。むしろ、主名詞の「武郎」は、ホイットマンの説に救いを見出し、そのことによって、彼のそれまでの「悩んでいた」という状態に途切れがもたらされたのである。また、それが「効力」という特徴をもつことも、「途切れ」の場合には十分に説明できない。

したがって、本稿は、以上のようなテイタの例を、「パーフェクト」ではなく「途切れ」の意味を表すものとする。

4 限定的連体修飾節におけるテイタの aspekto 的意味

4.1 考察範囲

限定的連体修飾節は、主名詞を限定する働きをしている。テイルとテイタの置き換えの関係には、次の三つの場合があると考えられる。

一つ目は、文意を変えずに、テイタとテイルが置き換えられる場合である。

(1) 太郎は、隣で座っている/座っていた 女の子に声をかけた。

(岩崎卓 (1998:47))

(2) 先生は、さっきからさわいでいる/さわいでいた 学生に注意した。

(岩崎卓 (1998:52))

二つ目は、文意を変えずに、双方を置き換えることが難しい場合である。

(3) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。

(岩崎卓 (1998:53))

(3') 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。

(同上)

三つ目は、テイタとテイルは置き換えられるが、文意が変わってしまう場合である。文意が変わらないことを前提とすれば、テイタをテイルには置き換えられないことになる。

(4) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒントになることがある。

(『1分間でやる気を出す200のヒント』)

テイタの場合、連体修飾節は、過去、現在、未来のどの状況を表すことも可能であるが、これがテイルに置き換えられると、表現され得るのは、「今現在の状態」に限定されると思われる。

本稿は、「途切れ」の意味をもつ連体修飾節のテイタは、テイルと置き換え不能であると考えため、以下においては、上記の二つ目の場合と三つ目の場合についてのみ検討する。

4.2 「途切れ」について

まず、二つ目の場合で、「途切れ」を表すテイタの例を見る。

(5) グロズヌイ首都救急病院の院長、アエロエフ・ヤヒヤさん(45)はアフガン戦争に軍医として従軍、「あの惨劇は二度と繰り返してはいけない」と訴え、大統領派、反大統領派の衝突に備えていた。その恐れていた事態が今、現実となっている。

(「毎日新聞」95.1.7)

中島(1995)は、途切れの特徴を「連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、以前の事態と対照的な事態が生じている」という点に見ているが、以上の例では、連体修飾節と主節が対照的な事態を表しているとは言にくい。本稿は、連体修飾節の「状態変化」という点に、途切れの本質的な特徴があると考え。例(5)では、連体修飾節の「恐れていた」が「事態」を限定修飾し、主節の事態が起こらなければ(「現実となっていない」限りでは)、連体修飾節で表された事態(「恐れている」という事態)が続いていたはずである。主節の「現実となっている」という状態が実現された時点で、連体修飾節の状態に変化がもたらされ、連体修飾節の状態が途切れたのである。

さらに、この点を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(中納言)で検証してみた。「恐れていた」を検索したところ、185件の事例のうち、条件に合致したのは31件で、そのうちの24件が「途切れ」の意味であった¹⁾。これらの主節の述語は、「ついに起きた、起きちゃった、起きていた、起こった、起こってしまう、現実のものに、現実となってしまった、確認された」など連体修飾節の状態の変化を示すものであるのに対

¹⁾他の例には、たとえば、以下のようなものがある。
予期していたのはわたしではなかったからだ。会うのをこんなに恐れていた相手はリーだった。
「動くなら、ゆっくりにして」彼女はいった。(『沈黙のセールスマン』)

し、「恐れている」の212件の事例を確認したが、こういった連体修飾節の状態の変化を示す述語は一件も見い出されなかった。

また、同じ主体や対象を共有し、かつ連体修飾節の状態が変化した場合には、テイタが使われている。

(6=3) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。
(岩崎卓 (1998:53))

(6' = 3') 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。
(同上)

文の自然さが判断しにくいものの、ここでは、テイタをテイルに置き換えることは難しいように思われる。この場合、テイタは、途切れを表していると考えられる。理由は、連体修飾節と主節が同じ主体を共有しており、連体修飾節の状態と主節の状態が一つの主体に同時に存在することは不可能なので、「見物していた」状態が途切れて初めて、「引き揚げた」という状態になることが可能になったはずだからである。ここで「小川看護婦の説得で」は、連体修飾節の状態に変化をもたらした原因を示している（そうでなければ、「見物していた」状態が続いていたはずである）。

(7) 雨と寒さとのため、始めは海岸に群がっていた見物人たちも少しずつ戻りはじめました。
(『沈黙』)

この例では、「雨と寒さとのため」は、連体修飾節の状態に変化をもたらした原因を示している。三宅 (1995 : 53) は、「連体修飾節は、名詞句が不定指示の場合は制限的であり、定指示の場合は非制限的であるといえる」と指摘している。「ていた学生」「ている学生」を例に、中納言で調査を実施した。「ていた学生」では、23 件の事例のうち、4 件が途切れの用法であった²。たとえば、以下の用例である。

²これら 4 件の事例のうちに、非限定的連体修飾節と判断される例があるというご指摘を、2015 年 1 月 24 日に関東日本語談話会で庵功雄先生からいただいた。非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節の判断には迷うところが多く、判断にゆれがあると思われるが、非限定的な場合も限定的な場合も、連体修飾節と主節とが同じ主体（対象）を共有し、かつ、連体修飾節の状態に変化がある場合にはテイタが使われる、という結果には影響はないと考える。

(11) 基幹的な役割を担う中堅の従業員が長期休業を取得することは、たしかに職場にとっては短期的に支障が生じると考えられる。しかし、それを契機に、休業を取得した従業員の担当していた仕事を職場の若手従業員に割り振ることで、若手従業員にとっては能力開発、能力発揮のチャンスとなり、仕事の幅を広げる機会と位置づけることができる。
(『男性の育児休業』)

主節と連体修飾節とが同じ対象「仕事」を共有し、「中堅の従業員が長期休業を取得する」が連体修飾節の変化の原因として示され、これが、連体修飾節の状態に変化をもたらす主節の状態に至るので（休業を取得した従業員の担当していた仕事を職場の若手従業員に割り振ること）、テイタが使われるのだと思われる。

一方、「ている仕事を」の 22 件の事例のうち、連体修飾節の状態変化が見られる例は一件もない。たとえば、以下の例では、連体修飾節と主節は同じ対象を共有しているものの、連体修飾節の状態には変化が起これないため、テイルが使われているのだと思われる。

(12) ポールはけっして気持ちを表に出さない人間だと思っていたからだ。皿を洗うのまで一緒に、私が手伝おうと言うと、ふだんふたりでしている仕事を三人で分担するにはどうしたらいいか途方にくれるありさまだった。何もしなくていいよと、ポールは言った。
(『夜明けの挽歌』)

次に、上記の三つ目の場合に該当するような連体修飾節のテイタの例を見たい。この場合、テイタは、テイルに置き換えられるが、その結果として文意が変化する。言い換えると、文意が変わらないことを前提にすれば、テイタをテイルに置き換えることはできない。ここでは、主名詞に後続する事態には、ル形が多く見られる。その特徴は、外的な出来事によって連体修飾節の状態に変化がもたらされ、その変化が主節で表されることである。前述したように、「途切れ」の主な特徴は「連体修飾節の状態変化」にあるので、この場合のテイタは、「途切れ」の用法であると考えられる。

(13) <ブノワ・マンデルブロー博士> フラクタル理論を 1975 年に提唱した数学者。

…中略…「フラクタルは、不確かなものとして科学の世界から追放されていた絵や視覚を復権させる試みだ」と話す。 (「毎日新聞」95.1.9)

(14=4) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒントになることがある。
(『1分間でやる気を出す200のヒント』)

例(13)では、連体修飾節の事態は、ニュースが書かれた95年よりも過去の時点にあっただけでなく、95年の時点にも存在していたにちがいない。「フラクタル」は、「絵や視覚」の「科学の世界から追放されていた」状態に変化をもたらす原因を示している。(14)では、「ヒントになることがある」は主節であり、「人からのアドバイス」は、連体修飾節の持続していた状態を途切れさせる原因を示している。

このように、限定的連体修飾節の場合には、連体修飾節の状態変化は、テイタが途切れの意味を表す際の主な特徴であると言える。また、非限定的な場合には、格関係一致という特徴がみられるのに対し、限定的な場合には、格関係が一致する場合(例6′、7、8、10、11)と一致しない場合(例5、13、14)の両方がみられる。そのうち、連体修飾節と主節とが同じ主体や対象を共有し、かつ連体修飾節の状態が変化した場合には、テイタが使われるという点は非限定的な場合と共通している。

4.3 他のアスペクト的意味との関連

(15) 避難していた人たちはみんな情報に飢えていた。…(中略)…ところが、「こうした身近な生活情報はメディアからでは得にくい」という声が多かった。

(「毎日新聞」95.1.19)

(16) ドラマに出ていた俳優の佐藤浩市さんを見て「この人、だれかに似てるわ」と言う母。…(中略)…数日後、テレビを見ていた母が突然、叫びました。「あっこの人に似てるんだわ」。そのCMに出ていた人は……やっぱり佐藤浩市さんでした。もう、同じ人だっつーの。(東京都江東区・20歳) (「毎日新聞」95.2.19)

例(15)は、動作持続の例で、例(16)は、変化の結果の持続の例である。連体修飾節の持続状態の中に同時に主節の事態があるという点で、連体修飾節の状態にはいずれも変化が見られない。

(17) 同協会の松友了常務理事は「薬をもらうために病院を訪ね歩いたが、どこも倒壊したり負傷者でごった返して相手にされず、途方に暮れていた人もいた。

(「毎日新聞」95.1.31)

(18) 結婚してからも日記を書き続け、厳しい現実生活の悩みを深刻につづることが増えた。…中略…日記帳をめくると、あの日、あの時のことがパノラマを見るように脳裏に浮かんでくるから不思議である。特に苦悩に打ち沈んでいた日々は最も真剣に生きた日々と思われる。

(「毎日新聞」95.1.19)

(19) 結局、ピアノをやめた私はバレエもお習字もやったけれどこれらも上達せず、特に習ったことがなかった「絵の道」に進んだのでした。スイミングのたびに泣いていた娘ですが、自分から進んで習いたいと言ったピアノのお稽古はずっと休むことなく続け、高校生の今でも週に一度先生のところに通っています。

(『おかあさんの夢づくりノート』)

(20) 小沢昭一さん とても申し訳ないような質問ですが、そもそも創価学会の「創価」がどういう意味なのかかねて気になっておりましたね。…中略…

秋谷栄之助会長 牧口常三郎初代会長がもともと教育者でございましてね。北海道や東京で校長先生をしていた人で、教育改革を進めてきた方なのです。そういうなかで「価値創造」という言葉を使っておりました。「創価」はその省略なのです。

(「毎日新聞」95.2.5)

「状態の持続」は、三原(1997:112-115)⁴によって提唱されたものであり、「結果持続」でも「動作持続」でもなく、ある状態が持続していることを表している。本稿では深く立ち入らないが、例(17)および(18)は、「状態の持続」を表し、いずれも発話時を基準にしたもので、絶対的テンスである。例(19)の連体修飾節のテイタは、「たびに」と共起し、「繰り返し」を表し、例(20)のテイタは、記録、経験を表す。上記の例は、いずれも連体修飾節の状態に変化が見られない。連体修飾節の

⁴三原健一(1997:112-115)では、テイルの中核的意味は、「持続」という抽象化された名称によって捉えられている。具体的に言うと、それは、「動作持続」、「結果持続」、「状態持続」、「効力持続」の四種類に分けられている。心理動詞(悩む、恨むなど)や認識動詞(思う、考えるなど)、テイル形になり得る状態動詞(住むなど)といった動詞がこの類型を構成している。

テイタの意味を途切れと判断する際には、主名詞に後続した事態を見なければならぬという点で、それは、文脈への依存度が高いと言える。また、途切れを表す動詞には制限がないという点では、それは、反復、記録と似ている。一方、動作の持続、変化の結果の持続、状態の持続は、絶対的テンスを表し、かつ動詞に制限があるという点で、途切れとは区別される。これについては、また第5章で詳しく検討する。

以上、連体修飾節のテイタが途切れを表すときと他のアスペクト的意味との比較を通して、連体修飾節の状態に変化が見られることが前者の主な特徴であることを示した。

さらに、「毎日新聞」95の1月1日～1月17日の用例を調査したところ、1969例のテイタ（「ていた」、「でいた」を含めて）のうち、限定的連体修飾節の数は47例であった。そのうち、途切れを表すテイタは16例で、一番数が多かった。次に数が多かったのは、状態の持続を表すテイタで12例、続いて、動作の持続を表すテイタが11例、結果持続を表す例が4例、繰り返しと経験を表すテイタは合わせて4例であった。調査対象の数は少ないが、以上の統計からもわかるように、途切れは、連体修飾節におけるテイタの意味解釈に重要な位置を占めていると言えよう。

5 連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味の特徴

第3章と第4章では、連体修飾節を、非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節に分けて「途切れ」のアスペクトの意味を考察した。まとめてみると、次のようになる。

非限定的連体修飾節については、連体修飾節と主節とは逆接的な関係にあり、連体修飾節の状態が変化し、かつ格関係が一致するという特徴を捉えた。一方、限定的連体修飾節については、連体修飾節の状態変化はテイタが「途切れ」を表すときの主な特徴である一方、格関係については、一致する場合もあるが、一致しない場合もあることを確認した。つまり、連体修飾節の状態に変化があるという点は、連体修飾節のテイタが途切れを表す場合の一般的な特徴だと言える。また、連体修飾節と主節が同じ主体や対象を共有し、かつ連体修飾節の状態が変化した場合にはテイタが使われるという点は、非限定的な場合と限定的な場合の双方に共通していることがわかった。

本章では、連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味に着目し、「途切れ」と動詞分類、テンス、文脈との関係、「完了」の検討などの角度から「途切れ」への理解を深めたい。

5.1 「途切れ」と動詞分類

本節では、連体修飾節で「途切れ」の意味を表すことが可能な動詞について検討する。

連体修飾節のテイタが、中畠孝幸(1995)の言う「ある事態の継続が途切れて、新しい事態が生じている」という「途切れ」の意味を表す例文は多く観察されている。そして、「途切れ」を表すことができる動詞には、動詞の分類にかかわらず、テイル形をとらない動詞(ある、いるなど)は除外されるということ以外には、特に制限はないものと思われる。たとえば、次に見るのは、動作動詞の例である。

(1)「克平！」と三番目の長身の半裸体の男が、くわえていた煙草を口から離して、階段のところから二階へ向って叫んだ。(『あした来る人』)

(2)……定価を守っていた百貨店も、対抗上昨年暮れから安売りに走り、定価を設定する意味合いが薄れた。(「朝日」94.8.14)

「くわえる」と「守る」は、動作動詞である。例(1)では、「煙草」が「口から離」されることにより、「くわえられていた」状態が途切れ、くわえられていない状態に変化した。一方、例(2)では、「百貨店」は、定価を守っていた状態から、「対抗上」という理由で安売りに走り、定価を守れなくなる状態に変化した。

また、変化動詞の場合としては、次のような例が挙げられる。

(3) 追っかけっこ 細道の前に倒れていた友里明日香が、身を起こし、大きく伸びをした。篝火の明かりを浴びて、必殺ミサイル・バストが輝きと影との半球に分かれる。火明かりの揺らぎのせい、光と影の境界線もまた揺れ動く。

(『かえってきた、ペとペとさん』)

(4) 玉枝が息をひきとったのは、それから五日目の四月七日の深夜である。喜助が枕もとにすわってじっと寝顔をみつめていると、昏々と眠りに入っていた玉枝が、急に瞼を半びらきにあけて、「あ、あれ、あ、あれ」と、うめくように、言葉にならないことを口走った。

(『越前竹人形』)

これらの例文中の「倒れる」と「入る」は、変化動詞である。例(3)では、主節の「身を起こす」によって、連体修飾節の状態「細道に倒れていた」に途切れがもたらされた。一方、例(4)の「入っていた」は、変化の結果の継続の意味であるが、「急に瞼を半びらきにあける」ことによって、連体修飾節で表される事態が途切れることになった。この場合、テイタには、主体の状態の変化が含意されている。この文を、次の文にすると、連体修飾節の動詞のアスペクトの意味が変わってしまう。

(5) 眠りに入っていた玉枝が、かわよくて好きだった。 (作例)

例(5)の場合、「入っていた」には、変化の結果の持続の意味しか読み取れない。このように、連体修飾節におけるテイタは、主節の述語と深く関係していることがわかる。むしろ、述語の動詞との関係を考えないと、連体修飾節のテイタの意味は判断しにくいと言える。

また、以上で取り上げた例では、主に連体修飾節の表す状態が主節の表す状態により中断され（途切れを生じ）て主節の状態に至っているが、外部的な出来事によって、動作の持続が中断される例もある。たとえば、以下の用例である。

(6) 男がその道を通っていくと、漁業組合の前の空地で遊んでいた子供たちも、傾いた縁側に腰をおろして網をつくろっていた老人も、一軒だけの雑貨屋の店先にたむろしていた髪が薄くなった女たちも、一瞬その手や口を休め、いぶかるような視線をなげかけてきた。しかし男は、一向に気にしない。彼に関心があるのは、もっぱら砂と虫だけだったのである。 (『砂の女』)

例(6)の場合は、「男がその道を通っていく」ことをきっかけに、登場人物たちが一同に手や口を休める。子供が「遊んでいる」状態や、老人の「つくろっている」という動作の持続の状態も中断された。店先で「たむろしている」女たちにも「話している」という状態が含意されていると想像できる。つまり、「話している」状態が変化し、女たちも口を休めたのである。これらは、外的な出来事が原因となって、主体の状態が変化し、動作の持続を中断させた例である。

また、次の例のように、外的な出来事が明確に示されなくても、途切れの意味を読みとることができる場合もある。

(7) 蓮太郎の右側に腰掛けていた、背の高い、すこし顔色の蒼い女は、丁度読みさしの新聞を休めて、丑松の方を眺めた。ガラス越しに山々の風景を望んでいた一人の肥大な老紳士、これも窓のところに倚凭って、振り返って二人の様子を見比べた。

(『破戒』)

(8) 管理人と並んで水槽を覗きこんでいた教授が僕を振りかえって、死体を見るような眼のまま、僕の軀中を見まわした。 (『死者の奢り』)

以上の例文の傍線部の動詞をテイル形に置き換えると、連体修飾節と主節で意味が矛盾することになる。例(7)では、老紳士は、「望んでいる」と「振り返って見比べる」という二つの動作を同時に行うことはできない。つまり、「望んでいた」という状態を途切れさせることによって、初めて「二人の様子を見比べる」という新しい状態

になることができるのである。また、例(8)も同様に、教授は、水槽を覗き込んでいると同時に「僕」を振り返って「僕の躰中を見まわ」すことはできない。つまり、前の動作を途切れさせることによって、初めて新しい状態になることができるのである。

次は、内的情態動詞の例を見る。

(9) 希望落札価格っていくらにしたらいいんですか？自分が買ってもらいたい額か、即決してもらえそうな額か。自分は安いと思っていた商品が意外と高く落札されることもありますよね……。急いで売りたいときは相場より十分安く設定すればすぐ落札されるという利点もあります。(Yahoo!知恵袋 2005)

(10) 待ち望んでいた秋が来た。希望の門のひらかれる秋であり、または絶望にたたきのめされる為の秋でもあった。どちらの道が彼の為に与えられるか。人生の大きな分岐点であった。(『青春の蹉跎』)

(11) その夜桜という言葉が、八千代には少し異様に響いた。何年も忘れていたほのかな暖かみを持っている言葉を耳にした感じである。(『あした来る人』)

(12) 他の一つは、民衆詩人ホイットマンの詩を読み、キリスト教の「罪」の意識から解放されたことである。霊と肉の葛藤に長年悩んでいた武郎は、自己の悪や弱さを、肉欲さえも含めてそのすべてを肯定し、自己の要求のままに自己をつらぬいて生きることこそ真の愛の姿だと説くホイットマンに、一つの救いを見出したわけであった。しかし武郎を解放したこの思想は、ブルジョア的限界を持った武郎の弱点にもなった。(『近代作家入門』)

「思う」、「待ち望む」、「忘れる」は内的情態動詞であり、人間の思考・感情を表すので、主体は人間に限定される。例(9)では、連体修飾節の状態に変化があり、それが主節で表されている。つまり、主節の「高く落札される」ことにより、「安いと思っていた」ことが中断されるのである。例(10)では、「秋がくる」ことによって、「待ち望んでいた」という状態が途切れる。ここで「待ち望んでいた」は、秋を限定修飾している。例(11)では、「夜桜」という言葉を聞いたことをきっかけに、「忘れていた」ほのかな暖かみを持っている言葉が思い出されている。「ほのかな暖かみを持っている」は、「言葉」を限定修飾し、「忘れていた」は「ほのかな暖かみを持って

いる言葉」を修飾しているが、これは、情報付加の働きをしている非限定的連体修飾である。例(12)の場合には、主名詞の「武郎」の「悩んでいた」という状態が、ホイットマンの説を読んだことをきっかけに途切れている。以上の例では、いずれも思考・感情の状態に変化が見られる。

以上のように、「途切れ」を意味するテイタは、動作持続の状態が途切れる場合、変化の結果の持続の状態が途切れる場合、思考・感情の状態が途切れる場合など広範囲に使われていることがわかる。また、テイタが使われると、動作や変化、思考・感情などの状態が途切れたことを表すと同時に、主名詞（動作や変化の主体あるいは対象（外的運動動詞の場合）、あるいは思考・感情の主体（内的状態動詞の場合）に状態変化が伴うこともわかった。

また、次の例のように、「単なる状態」を意味し、「異なる」、「そびえる」といった常にテイル形で表れる静態動詞が用いられている場合を、工藤真由美(1995)は、「時間の中での展開性」を問題にしない「脱アスペクト化」の事例であるとしている。しかしこれは、「途切れ」の意味を表すことが可能である。こういった例は、数は少ないものの、連体修飾節の状態が変化した場合には、テイタが使われる。

(13) 十三世祖という、この世代から大理衛左前所百戸の称号が消えている。衛所制度の廃止に伴う社会変動が当然推測される。また人口が増加に転じる十四世祖では、それまで宗族内の系統によって異なっていた輩行字が周氏全体で統一され、十五世祖もそれに続く。人口も増大するこの時期は周氏の宗族組織の発展期といえる。十七世祖と十八世祖で人口が再び減少する。(『流動する民族』)

(14) 全市統一により区内各施設の利用方法が変わります 新「まっぼっくり」運用開始と同じ日の一月二十一日、合併前の旧市町村ごとに異なっていた施設の利用区分や予約期間などについて、一部施設を除き、全市統一されます。それにより浜北区内の施設でも利用方法が変更になります。(『浜北区版広報はままつ』)

(15) 大陸から千五百キロメートルあたりの海底からそびえている、カーペンター・ギョーである。ギョーは、また、平頂海山ともいう。その名のとおり、すっぱり横に切ったような平らな頂上をもつ海底の山だ。そのむかし海上に聳えていた高山が、地殻の沈下によって海底にしずみ、その頂きを、海水の浸蝕作用のためにけずりとられてしまったものなのだ。(『フェニックス作戦発令』)

例(13)では、主名詞の「輩行字」が「宗族内の系統によって異なっていた」という連体修飾節の状態から「全体で統一され」という状態になり、連体修飾節の状態に変化が見られる。例(14)も同様で、「施設の利用区分や予約期間」が「統一される」ことにより、「合併前の旧市町村ごとに異なっていた」という状態が維持できなくなり、「異なっていた」という状態が途切れている。例(15)では、「高山」が「地殻の沈下」によって海底に沈み、「その頂きを、海水の浸蝕作用のためにけずりとられてしまった」ので、「海上にそびえていた」という状態に変化があり、以前の「聳えていた」という状態が途切れている。

このように、連体修飾節で途切れの意味を表すことが可能な動詞には、動作動詞、変化動詞をはじめ、内的情態動詞、静態動詞なども含まれる。

また、以上の例からもわかるように、連体修飾節と主節が逆接・対比の意味関係にあり、連体修飾節のテイタが途切れの意味を表すとき、主節には、タ形だけでなく、ル形も使われることがある。

(16) 国家と労働者との間の不等価交換であり、等価に満たない分を労働者が等価にしようとした当然の行為の結果が、労働意欲の低下につながったと考えられる。現在の国有企業改革は、それらの欠如していた諸条件を改めて創りだし、できるだけ人為を加えずに、市場経済のもつ客観性に依拠して経済を運営していこうとしていると考えられる。

(『中国改革・開放の20年と経済理論』)

(17) 銭外相は、香港政庁に務める公務員の不安を解消しようと「十八万人の公務員は香港の巨大な財産」と持ち上げるなどソフトムードを出しているが、返還時に完成を予定していた新空港の開港が九八年四月にずれ込むなど中英対立の後遺症も残っている。

(「毎日新聞」95.8.25)

(18) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒントになることがある。

(『1分間でやる気を出す200のヒント』)

さらに、以上で挙げた例文は、ほぼすべて小説からの引用であるが、このようなテイタの意味は、小説に限らず、辞書で言葉の意味を解説する場合にも使われることが明らかになった。たとえば、「ずれ込む」という語の意味を、『新明解国語辞典 第

五版』は、次のように解説している。

- (19) 予定していた物事が終わらず、次の区切りの時期まで延びる。

また、たとえば、「再開」という語の意味を辞書で調べると、次のような解説が出ている。

- (20) 【再開】[0]—する [中止していた会や機関などの活動] また始めること。
(『新明解国語辞典 第五版』)
- (21) 【再開】《国》〈名・他動サ変〉[やめていたものを] またひらく(・始める) こと。
(『日本語辞典(現代国語、外来語)』)
- (22) 【再開】[名] スルいったん閉じていたもの、中断していたものを、再び開いたり、始めたりすること。また、再び始まること。
(『大辞泉』)
- (23) 【再開】《名詞・他動詞自動詞。「する」と結合してサ変動詞としても用いる》活用表 [中止または休止していた物事を] ふたたび始めること。ふたたび始まること。
「雨のため中断していた試合を再開する」 (『学研国語大辞典』)

これらは、いずれも連体修飾節の状態が変化し、主節の状態になる例である。連体修飾節のテイタは、いずれも途切れの意味を表すものと考えられる。

5.2 「途切れ」とテンス

須田義治(2005)は、動詞のスル、シタ、シテイル、シテイタのテンス・アスペクト的な形が、文の連体の位置においてどのようなテンス・アスペクト的な意味を表しているかについて検討し、結果を以下のようにまとめている。

「それぞれのテンス・アスペクト的な形を簡単に整理すると、以下のようになる。

相対的なテンス：シタ(パーフェクト)、シテイル

絶対的なテンス：シタ・スル(非パーフェクト)、シテイタ

語りの連体：シテイタ、シタ・スル(限界到達)、スル(非分割的動作など)」

(須田義治 (2005 : 17)、下線は筆者注)

須田義治 (2005) は、シテイタが絶対的テンスを表すと主張していることがわかるが、シテイタの相対的なテンスの用法の存在は否定されていない。

「…前略¹…したがって、シテイタは、絶対的なテンスを表しても、相対的なテンスを表すことは、基本的に、ないのではないかと思われる。なによりも、それは、未来のある時点に先行する動作を、シテイタが表すことができないというところに現れているだろう。

それでも、もし、シテイタが、相対テンスを表しているように見えていたら、それは、次の例²のような、小説の地の文に見られる、過去のある時点に存在する登場人物の「現在」を基準とした「過去」という相対的テンスであろう。」

(須田義治 (2005 : 17))

ここで須田は、「相対テンスを表しているように見えていたら」という表現を使うことで、シテイタの相対的テンスを認める立場に立っているように見える³。そして、このような相対的テンスの用法が多く見られることは、実例の観察からも明らかであり、須田義治 (2005) の結論は、直ちに納得できるものではない。

要するに、須田義治 (2005) は、連体形のテイタが絶対的なテンスを表すことを主張しながらも、それが相対的なテンスを表す可能性を否定してはいないということになるだろう。

一方、「語りの連体」という用法も十分に説明されてはおらず、わかりにくい。須田

¹須田義治 (2005) は、次のように述べている。「シテイタの連体形は、相対的な過去を表しにくい。たとえば、発話時から見た過去のある時点に、それに先行するシテイタの動作を関係づけるのは、難しい。それは、本来の終止形としてのシテイタという形自体が、過去のある時点に対しては、同時性というアスペクト的な機能によって関係付けられうるが、発話時に対しては、パーフェクト的な意味を持たないシタと同様に、過去ということ以上の関係を持たないことと関係している。」

²須田義治 (2005:18) は、以下の2例を挙げている。

(1) 最初は、ゆうべの電話で警官が話していたコンビに向かった。 (『ビタミンF』)

(2) 「ひとごとみたいにいいやがって」と吐き捨てて、ついさっきまで加奈子が坐っていたソファのくぼみに目をやった。 (『ビタミンF』)

³ただし、ここで認められている「相対的なテンス」を「絶対的なテンス」の特殊例として捉えることもできる。

義治（2005）は、途切れの意味に関しては、この「語りの連体」という用法で片付けてしまっている。⁴そこでは、「連体形のシテイタの表す継続的な動作が、終止形のシタの表す動作が生じて、終わっている。」と述べられているだけで、詳細な検討が避けられているように思われる。

また、連体形のテイタの「語りの連体」の用法について、須田は、「連体形の動作が終止形の動作に時間的に先行しているという点においては、このシテイタを相対的なテンスと見ることができるが、一つの場面の中の一連の出来事を語る文脈における継起的な動作と見たほうがいいのではないだろうか。継起的な関係にある二つの動作のうち、先行する動作を持続的なものとして表すために、それをシテイタ（継続相）にしているのである。これも、上の例と同様に、絶対的なテンスと見ることが可能である」（下線は筆者注）」と述べている。すなわち、須田は、テイタにおける途切れの意味を絶対的テンスとして捉える一方で、連体修飾節のテイタと主節のタの関係を「継起的関係」と位置づけているのである。

しかし、須田義治（2005）は、シタの「語りの連体」の用法について、「シタの形は、主にある時点（期間）に位置付けられた一つの場面の中のいくつかの動作の間の継起的な時間的関係を表しているようである（下線は筆者注）」とも述べている。

テイタの「継起」とシタの「継起」の違いはどこにあるのか、比べてみよう。

(24) 煙草をすい終えた孝夫は、ソファから立ち上がった。 （『ビタミンF』）

(25) 彼の留守の間、彼の席に替って坐っていた人物が立ち上がった。
（『あした来る人』）

例（24）は、連体形のシタの例である。須田義治（2005）は、「これは、連体形のさしだす動作が限界に到達する時点が、終止形の動作の実現する時点に先行しているの（下線は筆者注）、相対的なテンスでも連続的であるといえる」と説明している。つまり、同じく「継起的関係」を表していても、連体修飾節のシタは、「完成」というアスペクトの意味を表すものとして捉えられているのに対して、「先行する動作を持続的

⁴ 「語りの連体」について、須田義治（2005）は、「主に小説の地の文など、語りのテキストに見られるものなので、これを、仮に「語りの連体」と名づけ、…」と説明している。しかし、「語りの連体」とは、「「語り」にでてくる連体形」であると解釈できるものの、実際にどのような用法を指しているのかは不明である。

なものとして表すために、それをシテイタ（継続相）にしているのである」と述べられているように、連体修飾節のテイタは、「持続的なもの」として捉えられているのである。これは、つまるところ、連体修飾節のテイルのアスペクト的意味と等しい。したがって、テイルとテイタは置き換え可能となるはずであるが、実際には、すべての連体修飾節のテイタがテイルに置き換えられるわけではない。要するに、須田の説に従うと、テイルに置き換えることができない連体修飾節のテイタの特徴が捉えられなくなってしまうのである。

本稿は、連体修飾節のテイタは、特に「途切れ」を意味する場合には、単に「持続的なもの」を表すに止まらず、「持続的なもの」が途切れることを表すためにシテイタになるのではないかと考える。すなわち、例(25)は、「立ち上がる」時点を基準にして、それまでずっと続いていた「坐っている」という状態が途切れたことを表していると考え⁵。

須田義治(2005)は、シテイルとシテイタの置き換えについても触れており、大変有益で参考になるが、以上の分析からもわかるように、シテイタのテンスとアスペクトの解釈については、まだ検討の余地があると思われる。

三宅知宏(1995)によれば、三原健一(1992)が提唱した「視点の原理」が適用されるのは、限定的連体修飾節の場合に限られる。つまり、非限定的連体修飾節は、この原理に従わず、常に発話時視点により時制形式が決定される。岩崎卓(1998)は、限定的連体修飾節のテンスを詳しく考察し、以下のような結論を出した。そこでは、絶対的テンスは、視点を発話時に置いているので「発話時視点」と呼ばれ、相対的テンスは、視点を主節時に置いているので、「主節時視点」と呼ばれている。

| | |
|------------|-------|
| | 内の関係 |
| 従属節：タ／主節：タ | 発話時視点 |
| 従属節：タ／主節：ル | 主節時視点 |

(岩崎卓(1998:56)から抜粋、一部修正)

たとえば、以下のような用例がある。

⁵ この例は、「途切れ」のテイタで、須田義治(2005)の言う「相対的なテンス」を意味すると思われる。

(26) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒントになることがある。

(『1分間でやる気を出す200のヒント』)

(27) 彼のひとことが仕事のスランプを脱するきっかけになったり、彼女の助言でわだかまっていた気持ちが吹っ切れたといった経験は誰にでもあるだろう。(同上)

この二つの例文は、連体修飾節の事態がその後打ち消され、それとは対照的な事態が主名詞に後続する部分で表されているという点で共通している。これらにおけるテイタは、「途切れ」を表すと思われる。

例(26)では、連体修飾節で表される「停滞していた」という事態は、「変える」という事態の前に存在していたものであり、両者の間には前後関係がみられる。前者は、主節時から見て過去のことなので、相対的テンスだと言える。一方、例(27)の場合、「わだかまっていた」という状態は、やはり「吹っ切れた」という状態の前に存在していたものであるが、それは、発話時から見ても主節時から見ても過去であるという点で、絶対的テンスでもあり、相対的テンスでもあると言える。

連体修飾節のテイタが途切れを表すとき、連体修飾節の状態は、主名詞に後続する部分が表すような状態に変化する。ここでは、連体修飾節の事態は、常に主名詞に後続する部分が表す事態の前に現れるという前後関係があるので、相対的テンスを表す事例に当たるというのが適切であろう。

また、例(26)の「停滞していた状況」は、発話時過去、発話時現在、発話時未来などの状況を表すことが可能で、このような、連体修飾節で表される時間と無関係な事態を一般的事態とする。それ以外に、たとえば、例(27)の連体修飾節の「わだかまっていた」気持ちは、ある特定の時点で存在した事態なので、「一時的事態」とする。このように、「途切れ」を意味する限定的連体修飾節が表す事態は、「一般的事態」と「一時的事態」の2種の事態に分けることができる。

5.2.1 「一般的事態」の場合

(28) 文部省と大学病院は研修義務化に向けての準備に早急に取り組むべきだろう。
…中略…臨床研修が義務化されれば、この期間のアルバイトはできなくなる。

研修医を安く雇っていた病院などには痛手だろうが、やむを得ない。

修業中の医師に診察を受けていた患者にとっても好ましい方向だろう。

(「毎日新聞」95.1.11)

(29) <ブノワ・マンデルブロー博士> フラクタル理論を1975年に提唱した数学者。70歳。米エール大教授・IBMワトソン研究所名誉フェロー。1924年、ポーランドのワルシャワに生まれ、フランスのエコール・ポリテクニクを卒業。93年イスラエルのウォルフ物理学賞、94年本田賞などを受賞。「フラクタルは、不確かなものとして科学の世界から追放されていた絵や視覚を復権させる試みだ」と話す。

(「毎日新聞」95.1.9)

例(28)では、「研修医を安く雇っていた病院」と「修業中の医師に診察を受けていた患者」が表す事態は、ニュースが書かれた95年のよりも以前に存在していただけでなく、95年の時点でも存在していた。たぶん、今もこれからも、こういった事態は存在するであろう。例(29)の場合も同様である。すなわち、「不確かなものとして科学の世界から追放されていた絵や視覚」が表す事態は、ニュースが書かれた95年よりも以前に存在していただけでなく、95年の時点でも存在していたにちがいない。つまり、途切れを表すテイタは、過去のことに限られない「一般的事態」を表している。

例(28)では、主節の述語「痛手だろう」、「好ましい方向だろう」は状態性述語であり、「だろう」が推測を表している。臨床研修が義務化されることが、連体修飾節で表された事態の変化の原因として示され、連体修飾節で表される状態に変化をもたらす。「研修医を安く雇っていた病院」の場合は、研修医を安く雇うことができなくなるだろうことが含意されている。また、「修業中の医師に診察を受けていた患者」の場合は、これからは、修業中の医師に診察を受けずにベテラン医師の診察を受けられるだろうことが含意されている。一方、例(29)では、「フラクタル」は、「絵や視覚」の「科学の世界から追放されていた」という状態を途切れさせ、その状態に変化をもたらす、つまり、それらを「復権する」という結果に至っている。いずれにおいても、連体修飾節の状態に変化が見られ、連体修飾節のテイタが途切れを表している。

5.2.2 「一時的事態」の場合

(30) グロズヌイ首都救急病院の院長、アエロエフ・ヤヒヤさん (45) はアフガン戦争に軍医として従軍、「あの惨劇は二度と繰り返してはいけない」と訴え、大統領派、反大統領派の衝突に備えていた。その恐れていた事態が今、現実となっている。

(「毎日新聞」95.1.7)

(31) 十一日は、ちょうどスケート大会にぶつかっていた。しかし神は審判も務めながら、あらゆる手だてをとっていた。写真を持っているのではないかとあてにしていた人物が一人減り、二人減りしていく。どのルートも断たれ、困り果てたすえ“ここしかない”と、ある関係者に懇願した。

(『ムネオ疑惑追及 300 日』)

例 (30) では、連体修飾節の「恐れていた」が「事態」を限定修飾している。主節の事態が起こらなければ（「現実となっていない」限りは）、連体修飾節で表された事態（「恐れている」という事態）が続いていたはずである。主節の「現実となっている」状態が実現された時点で、連体修飾節の状態は途切れたのである。この事態は、一時的で具体的な事態を表している。一方、例 (31) では、「当てにしていた」人物が減ること自体に、当てにすることができなくなるという連体修飾節の状態の変化が含意されている。

以上の考察から、連体修飾節のテイタが途切れを意味するときには、それは、相対的テンスを表すこと、また、連体修飾節が表す事態は「一般的事態」と「一時的事態」に分けられ、連体修飾節の状態に変化が見られることがその主な特徴であることが確認された。

5.3 「途切れ」と文脈の関係

テイタが途切れの意味をもつことは、主名詞に後続した事態（主節の場合が多いが、例 (26) のような場合もある）との関係から判断されるもので、文脈に依存している。これは、語彙的意味から判断できる「動作の持続」「変化の結果の持続」とは区別される。

(32) 艫に死者のごとく倒れていた水夫の一人が突然、叫びました。その指さす水平線から一羽の小鳥が飛んできました。

(『沈黙』)

例 (32) は、変化の結果の持続の例である。連体修飾節の持続状態の中に同時に主節の事態があるという点で、連体修飾節の状態には変化が見られない。

伊坂 (1997 : 133) は、「文中や文脈に付加的な要素が加わると、他方の意味になることがある」と述べている⁶。例 (32) の主節を例 (33) に変えると、テイタの意味が「途切れ」に変化する。

(33) 艫に死者のごとく倒れていた水夫の一人が突然、立ちました。 (作例)

山田 (1984 : 148) は、「ふつうは、動詞のアスペクト意味が文脈の中で他の要素と相互干渉を起こし、そこから文アスペクトが定まると考えられている」と述べている。連体修飾節のテイタの意味を判断する際には、主名詞に後続する事態との関係を見る必要がある。

また、文脈が与えられると、「動作持続」の意味と「途切れ」の意味とが重なる場合もある。

(34) それまで両手で胸のところに支えるようにして持っていた帽子を、八千代の方に差し出した。 (『あした来る人』)

「それまで」がつくと、主節時までの動作持続が読み取れる一方で、連体修飾節と主節との対照が見られ、連体修飾節の状態に変化があることから途切れの意味も読み取れる。

連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味は、連体修飾節と主節との関係を考えた上で現れてくる特徴なので、主節という文脈が必須である。したがって、それは、文脈への依存度が高いと言える。一方、どのような動詞も状態の変化を表すことが可能であるため、使用可能な動詞に制限はないと言える。これは、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」というアスペクトの派生的意味の特徴に類似する。

⁶文脈からの影響については、藤井正 (1976)、高橋太郎他 (2005)、工藤真由美 (1995) などの先行研究も触れている。

5.4 「完了」の検討

庵功雄（2001）は、工藤真由美（1995）の言うパーフェクトを「完了」と「効力持続」⁷に解体すべきであると主張した。庵は、以下の例を挙げ、「効力」をもたず、基準時以前に動作や出来事が完結したことだけを述べるものを「完了」とし、過去完了にはテイタの使用を認めている（庵功雄（2001：90-92））。

(35) (テレビのニュース) 俳優の渥美清さんが一週間前に亡くなっていたことが分かりました。 (庵功雄 (2001 : 77))

(36) 昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで 1000 勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年 5 月に到達していたことが分かった。 (同上)

江田（2013）は、テイルとテイタの aspekto を詳しく調査・分析している。テイタには、テイルにはない用法がある（江田（2013：6））という江田の指摘に、本稿は賛成である。

江田（2013：17）は、「基本的に庵功雄（2001）の考え方を採用し…中略…「ている」「ていた」を用いて基準時が過去・未来で、それ以前に動作・作用・出来事が完結したことだけを述べるものを「完了」⁸（完了①とする、筆者注）として以下の論を進める」と述べる一方で、「「ていた」については「完了」という別の考え方（「完了」②とする、筆者注）を使う。その理由は、「ていた」では庵功雄（2001）が指摘しているように効力の存在が読みきれない例が見られるためである」と述べている（江田（2013：

⁷ 「効力持続」の場合は、観察時以前の動作・出来事の効力が観察時において認められることに焦点がある（庵功雄（2001：88））。

⁸ 「完了」①については、中島孝幸（1995）も触れている。中島は、「意味解釈上、注目すべきものとしてさらに一点取り上げたいのは、主節の述語に「わかった」「明らかになった」等がかかる場合である。」（中島孝幸（1995：30））と述べ、「タ形を用いずテイタ形を用いたのは従属節の事態の発生以後その影響の持続があったことを示すためである」と指摘している。たとえば、次の用例である。

NHK の人気番組「生きもの地球紀行」で、南米の淡水魚を「サケの仲間」として放送していたことがわかった。 (中島孝幸 (1995 : 30))

これは、工藤真由美（1995）の言う過去パーフェクトに当たるが、庵功雄（2001）は、このような例には「効力」（つまりここでいう「影響」）を認めず、それを「完了」と見なしている。ここで、中島孝幸（1995）は、「過去パーフェクト」の用法（前述の「完了」①）と「途切れ」を別のものとして扱っている。

19))。この「別の考え方」としての「完了」(「完了」②)について、江田は、「「ていた」節が「た」節より以前を表すものである」(江田(2013:189))と述べ、以下の用例を挙げている。

(37) 科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた。ところが驚いたことには、1988年暮れ、アメリカの物理学者(中略)が驚異的な説を発表した。

(江田(2013:141))

(38) 日本人からみると、アメリカの老人は老いてもたいへん若々しく装って、私などもその方が好ましいと感じていた。しかし、やがてわかったのは、アメリカの社会では、あくまで若さが要求されているということであった。(江田(2013:194))

「完了」①は、動作や出来事が完結していることを意味する。そして、上記の例の「亡くなった」「到達した」は、「動作・出来事」の「完結」を表すと言える。けれども、「完了」②の「思われた」「感じた」は、「動作・出来事」の「完結」を表すとは言いにくい。効力の存在が読み取れないテイタの意味として、「完了」①と「完了」②が確認できたと言えるが、「完了」①と「完了」②は、異なる意味だと思われる。

「完了」の文は、ある状態が存在していたところ、「た」節によって状況が変化したことが示される。(江田(2013:200))ような文である、と江田は言う。この点は、連体修飾節が「途切れ」を表すときには、連体修飾節の状態変化が主節で表されるという点と類似する。(37)を例にとると、「アメリカの物理学者が驚異的な説を発表した」ことがテイタ節の変化の原因を示し、このことによって、「科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた」ことが変化し、「過去への旅は夢物語だ」とは思われなくなったということが述べられている。つまり、外的出来事によって、テイタ節の持続していた状態が途切れ、後続の状態になったということである。そうでなければ(このような外的出来事が出なければ)、「過去への旅は夢物語だと思われてい」たはずである。タ節は、テイタ節の持続していた状態を途切れさせ、テイタ節に変化をもたらした原因を示していることがわかる⁹。

⁹連体修飾節にもこういった例がある。

自分はすべて計画どおりに幸せな人生を歩んできたというのは、詐欺師でもなければいけないせりふかもしれません。昨今の状況を見れば、倒産しないと思われていた大企業が破たんしたり、入社時に終身雇用をうたっていた企業が早期退職制度を導入したりと、変化のスピードは

しかし、「途切れ」で次の文を解釈するのは無理である。「足が痛くなった」ことにより、車に乗っていた事態を途切れさせることはできないからである。

(39)行く途中に車乗ってた時から、かーっと痛くなっちゃった、足が。

(江田 (2013 : 189))

また、「完了」②では、「ていた」節に対して、「た」節が状況の変化を表現する必要がある(江田(2013 : 195))とされているが、だとすると、次の例において、銃は「拾い上げた」前に「落ちていた」が、どうしてテイルの使用が許されるのかを説明するのは困難であろう。

(40)部下の二人が敵の腕を掴み、銃を取り上げた。残りの二人が関谷を引き起こし、落ちていた銃を拾い上げた。(『白鳥殺人事件』)

テイルにないテイタの意味が注目される一方、それを統一的に説明する方法についてはまだ検討する必要があると思われる。

5.5 まとめ

本章は、連体修飾節のテイタの「途切れ」の意味に着目し、「途切れ」と動詞分類、「途切れ」とテンス、「途切れ」と文脈の関係、「完了」の検討などの角度からそれを検討した。結果をまとめると、以下のようになる。

まず、「途切れ」を表すことができる動詞にはどのようなものがあるか、という問題については、いかなる動詞も状態の変化を表すことが可能であるため、動詞の分類にかかわらず、テイル形をとらない動詞(ある、いるなど)が除外されるということの

加速しており、5年先を読むことは難しい状況にあります。

(<http://jibun.atmarkit.co.jp/lcareer01/rensai/jinzaisv06/jinzaisv01.html>)

この例では、連体修飾節の状態変化の原因となる「外部の出来事」が示されていない。秋月康夫(2003)によれば、「途切れ」には「外部の出来事」の存在が必須の条件であるが、本稿でいう「途切れ」の場合はそうではない。連体修飾節の状態変化の原因となる「外部の出来事」は、ある場合もあるが、ない場合もある。本稿はむしろ、「連体修飾節の状態の変化」が認められることが、途切れの必須の条件であると考え。

ほかには、特に制限はないものと思われる。つまり、動作動詞、変化動詞、内的情態動詞、静態動詞なども、途切れを表すことが可能である。また、主節がタ形の場合だけでなく、主節がル形の場合にも、テイタは使われ得ることが判明した。

連体修飾節のテイタが途切れを表すときには、連体修飾節によって表されていた状態が変化し、主名詞に後続する部分が表すような状態へと移行する。ここでは、連体修飾節の事態が、常に主名詞に後続する事態の前に現れる、という前後関係が認められるので、この種の文は、相対的テンスを表すというのが適切であろう。さらに、連体修飾節が表す事態は、「一般的事態」と「一時的事態」に分けられること、また、連体修飾節の状態に変化が見られることが途切れの主な特徴であることが確認された。

連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味は、連体修飾節と主節との関係があつて初めて現れてくるような特徴なので、主節という文脈の存在が必須である。したがってそれは、文脈への依存度が高く、この点は、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」というアスペクトの派生的意味の特徴に類似する。

6 連体修飾節におけるテイルとの比較

本章では、連体修飾節におけるテイルとの比較を通して、連体修飾節におけるテイタのシンタクスの特徴を明らかにしたい。このような対照研究を通じてこそ、連体修飾節におけるテイタの特徴がよりよく見えてくるものと思われる。

本稿は、第3章で、連体修飾節と主節とが「逆接」の意味関係にあるような事例を対象に、先行研究には言及されていなかった「格関係一致の可否」の観点から、非限定的連体修飾節におけるテイタとテイルとの区別を考察した。また、第4章では、限定的連体修飾節の場合の「途切れ」のアスペクト的意味を考察した。これらのいずれにおいても、連体修飾節におけるテイタとテイルとの比較考察をあわせて行った。

しかし、例(1)、例(2)のように、連体修飾節と主節が「逆接」の意味関係を表さない場合もあり、このような場合のテイルとテイタの使用上の違いについては、まだ検討の余地が残されている。

(1) 女たちと一緒に立っていたアルさんは言った。 (『あした来る人』)

(2) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。 (益岡隆志(1997:169))

これらの問題に立ち入る前に、まず、従属節のテイルとテイタに関する先行研究を検討する。

6.1 先行研究

従属節のテイルとテイタの問題を取り上げた研究としては、岩崎卓(1995)が挙げられる。岩崎卓(1995:73)は、従属節・主節事態同時のノデ(カラ)節を考察する際、主節主語がagent(動作主、王注)またはpatient(対象、王注)で、従属節と同一主語の場合にはテイル(従属節・主節事態が同時)は使用不可能だが、異主語の場合には使用可能である、という結論を述べている。たとえば、以下の用例がある。

(3) 太郎は原稿を*書いている／書いていたから、電話に出なかった。

(4) 相手が黙っているのに、彼女はもう一度言いかけた。

例 (3) では、従属節の主語が主節の主語と同じ「太郎」(動作主)なので、テイルは使えないがテイタを使うことはできる。一方、例 (4) では、従属節の主語は「相手」(対象)で、主節の主語は「彼女」(動作主)であり、従属節の主語と主節の主語が異なるので、テイルが使える、ということになる。

言い換えると、岩崎は、主語一致の可否について、従属節のノデ(カラ)節に現れるテイタとテイルを区別している。従属節と主節とで主語が一致する場合には、テイルは使えずテイタが使われるのに対し、主語が不一致の場合には、テイルが使える¹、ということである。

それでは、連体修飾節の場合を検討しよう。

連体修飾節については、主名詞に焦点を絞るならば、主名詞と連体修飾節の格関係はいかなるものか、またそれは、主名詞と主節の格関係と一致するか、ということが問題になる。まず、以下で、連体修飾節と主節とが「逆接」の意味関係にある場合を見てみよう。

(5) 彼は、噛んでいたチューインガムを吐き捨てながら言った。

「そうか、知らねえのか、おまえの家はどこだ？」 (『人間の証明』)

(6) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。
(『あした来る人』)

例 (5) では、主名詞はチューインガムで、それは、「チューインガムを噛んでいた」、「チューインガムを吐き捨て」るというように、連体修飾節に対しても主節に対しても対格をもつので、双方の格関係は一致している。一方、例 (6) では、主名詞はリボンで、それは、「リボンが子犬の首輪とかごとを結びつけている」「リボンを解く」というように、連体修飾節に対しては主格をもち、主節に対しては対格をもつので、格関係は一致していない。

岩崎 (1995) が従属節のノデ(カラ)節について指摘したのと同様に、連体修飾節の場合も、テイタが含まれる連体修飾節では、双方の格関係が一致しているのに対し、

¹岩崎卓 (1995) は、テイタが使えるかどうかについて言及していない。

テイルが含まれる連体修飾節では、それが一致していないという事実が観察される。

本章は、「格関係一致の可否」の観点から、連体修飾節におけるテイルとテイタの比較考察を進めたい。

6.2 「原因・理由」と「付帯状況」

第3章では、連体修飾節と主節とが「逆接・対比」の関係にある場合、テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致するのに対し、テイルが含まれる連体修飾節では、双方の格関係が一致しないことを見た。すなわち、「格関係一致の可否」の視点が、連体修飾節のテイタとテイルの区別に有効であることが明らかになった。

ここでさらに、連体修飾節と主節とが「原因・理由」、および「付帯状況」の意味関係にある場合を見てみよう。

まず、「原因・理由」関係で、テイタが含まれる連体修飾節の例を見られたい。

(7=2) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。(益岡隆志(1997:169))

(8) そこへ娘たちが、にぎやかに笑いさざめきながら近づいてきた。娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした。それを岩陰から眺めていた人魚姫は、取り残されたような思いで悲しくなった。王子が娘たちの手で白い寺院の中に運びこまれてしまうと、姫はしょんぼりして海の底のお城へもどっていった。

(「本当は恐ろしいグリム童話」)

例(7)と(8)では、連体修飾節で表された事態が主節の事態の原因を示している。また、そこでは、主名詞が連体修飾節の述語と主節の述語のどちらに対してもガ格の関係を持ち、双方の節に対する主名詞の格関係が一致している。一方、テイルが含まれる連体修飾節の例を見られたい。

(9) 目を前方に据えて、ひたすら車を進めている恭平に、路子は不吉な予感をおぼえていた。

「あなた、まさか！」路子は自分の予感を言い当てるのが恐ろしかった。

(『人間の証明』)

(10) 親と同居しているので、生活には困らない。ただしその親が、いつまでもぶらぶらしている息子に何かと口うるさいことにはうんざりしていた。

(『探偵ガリレオ』)

例(9)では、主名詞「恭平」が連体修飾節の主体(「恭平が目を前方に据えて、ひたすら車を進めている」)に当たり、また主節の相手(「恭平に路子は不吉な予感をおぼえていた。’)に当たる。それは、連体修飾節の述語に対してはガ格の関係にあるが、主節の述語に対してはニ格の関係にある。双方の節に対する主名詞の格関係が一致していない。例(10)も同様で、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致していない。

このように、連体修飾節と主節が「原因・理由」の関係にある場合、テイタが含まれる連体修飾節では、それぞれの節に対する主名詞の格関係が一致しているのに対し、テイルが含まれる連体修飾節では、二つの格関係が一致していないことが判明した。

次に、付帯状況の場合を見たい。

(11) 昭夫はため息をつき、カーテンから離れた。ソファに腰を下ろした。

「どう？」ダイニングチェアに座っていた八重子が訊いてきた。

「刑事はいない。たぶん見張ってもいないと思う」 (『赤い指』)

(12) 「被害者というのは？」

「二十歳前の男が五人だ」そして間宮はぶっきらぼうに続けた。「一人死んだ」メモを取っていた草薙は顔を上げた。

「焼死、ということですか」 (『探偵ガリレオ』)

例(11)は、「八重子」が「座っていた」という状態に付随して「聞く」という動作を行ったことを表す。例(12)では、「草薙」が「顔を上げた」という動作に付随する状態を連体修飾節「メモを取っていた」が表している。テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致し、また連体修飾節の主語と主節の主語も一致していることがわかる。

一方、テイルが含まれる連体修飾節を見られたい。

(13) 松宮は静かに腰を上げた。いつか必ず恭さんを連れてくるよ——眠っている隆正に、心の中で約束した。 (『赤い指』)

(14) 啓造はうしろに来て立っている夏枝にだまって受話器を渡した。 (『氷点』)

連体修飾節と主節とが「付帯状況」を表す関係にある場合は、双方が表す状態の「同時」性という条件が前提とされていると言える。例(13)では、松宮の状態が主要な状態で、隆正の状態は付随的な状態であると言える。例(14)も同様で、啓造の動作の状態が主要で、夏枝の状態は付随的に見える。本稿は、このような関係も付帯状況と認める。例(13)では、主名詞「隆正」は、連体修飾節の述語「眠っている」に対してはガ格の関係にあるが、主節の述語に対してはニ格の関係にある。双方の節に対する主名詞の格関係が一致していない。例(14)も同様である。

このように、連体修飾節と主節とが「逆接・対比」、「原因・理由」、「付帯状況」を表す関係にある場合には、テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致するのに対し、テイルが含まれる連体修飾節では、二つの格関係が一致しないことがわかる。

6.3 連体修飾節におけるテイタとテイルの用例調査

本稿は、連体修飾節におけるテイルとテイタの使用傾向を調べるために、『中日対訳コーパス』(2003 第一版)(北京日本学研究中心)所収の作品を4部(『あした来る人』、『黒い雨』、『青春の蹉跎』、『ノルウェイの森』)と、他の小説(『赤い指』、『点と線』、『証明』、『人間の証明』、『氷点』)を5部、合わせて9部の小説を対象として、連体修飾節におけるテイルとテイタの用例を集めて調査した。主な調査対象は、「ていた」「でいた」「ている」「でいる」²の形式である。また、次のような例は除外した。すなわち、

² 「てた」「でた」などの省略形は、連体修飾節では考えられないため、調査対象としていない。

(15) それまで両手で胸のところに支えるようにして持っていた帽子を、八千代の方に差し出した。 (『あした来る人』)

「それまで」があればテイタが確実に選ばれるので、これを含む文を調査対象とするのは、本稿の目的にとっては不適切である。これに類似の表現としては、「これまで、今日まで、いままで、昨夜まで、～（動詞）まで、しばらく、先刻」などがある。これらを含む文は、すべて調査の対象外とした。

調査の結果、条件に合致する用例は合計で70例であった。まとめると以下の表1になる。

表1：連体修飾節におけるテイタとテイラの調査結果

| 連体修飾節と主節の関係 | 視点 | テイタ | テイラ |
|-------------|--------|-----------------|-----|
| 原因・理由 | 格関係一致 | 4 ³ | 0 |
| | 格関係不一致 | 1 | 5 |
| 付帯状況 | 格関係一致 | 36 ⁴ | 3 |
| | 格関係不一致 | 5 | 16 |
| 合計 | | 46 | 24 |

収集した「付帯状況」の用例は、60例であり、「原因・理由」の場合は、例文が非常に少なく、10例に過ぎない。

「原因・理由」の場合は、連体修飾節のテイタの例もテイラの例も共に多くない。連体修飾節のテイタの用例では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致する場合が4例で、不一致の場合が1⁵例である。一方、連体修飾節のテイラの用例では、格関係一致する場合が1例もなく、不一致の場合が5例である。テイラ

³ 4例ともガ格（主格）一致をしている。

⁴ 36例はすべてガ格（主格）一致をしている。テイラの場合も、3例ともガ格一致をしている。

⁵ 次のような例である。

待つ間もなく、ユキコが手に数枚の印画紙をもって隣の部屋から出て来た。

「あら、おかけになればよろしいのに」

立ったまま待っていたケンに、彼女はびっくりしたような声をあげた。

ユキコは、ケンにソファを勧めると、

「なるべく特徴のありそうなを選んできましたけれど、これが日本爺さんです」

(『人間の証明』)

とテイタの用例数は共に 5 例であるが、比べれば、格関係一致する場合には、テイタが多く使われ、不一致の場合には、テイルが多く使われている。

「付帯状況」の場合は、連体修飾節のテイタの用例では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係が一致する場合は 36 例で、不一致の場合が 5⁶例である。一方、連体修飾節のテイルの用例では、双方の格関係が一致する場合は 3⁷例で、不一致の場合が 16 例である。双方の格関係が一致する場合には、テイタが多く、不一致の場合には、テイルが多いという使用傾向がわかる。

表 1 に示したように、テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節の主語と主節の主語が一致する例は、合わせて 40 例で、不一致の例は、6 例である。一方、テイルが含まれる連体修飾節では、双方の主語が一致する例は、3 例に過ぎず、不一致の例は、合わせて 21 例である。

以上の調査では、テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係の一致が特徴で、テイルが含まれる連体修飾節では、双方の格関係の不一致が特徴であった。しかし、今回調査対象としたのはすべて小説で、小説では普通タ形が多く使われるため、必然的に、テイタの使用がテイルよりも多くなったと考えられる。先行研究についての論評 (2.1) で指摘したように、テンス (主節がル形であれ、タ形であれ) の角度から非限定的連体修飾節のテイルとテイタの区別をするのは難しい。むしろ、以上のような使用傾向の観点からこそ、連体修飾節のテイタとテイルの違いは明確になるものと思われる。

6.4 まとめ

本章では、非限定的連体修飾節が主節と「原因」もしくは「付帯状況」の意味関係にある場合を対象に、格関係一致可否の観点から連体修飾節におけるテイルとテイタの比較考察をし、当の連体修飾節に現れるテイルとテイタの使用傾向を調査した。

テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の

⁶たとえば、次のような例である。

裏の井戸端で顔を洗っていた十二、三の少年に、杏子はどれが鹿島槍かきいてみた。

(『あした来る人』)

⁷たとえば、次のような例である。

「子供ってのが参るよな」横に座っている坂上がうんざりしたような声を出した。(『赤い指』)

格関係の一致が特徴で、テイルが含まれる連体修飾節では、双方の格関係の不一致が特徴であることを確認した。

7 連体修飾節におけるタとの比較

連体修飾節において、テイタと（動詞の）タ形はともに「逆接・対比」の関係を表すが、両者のアスペクト的意味は異なっている。本節では、その違いを含めて、連体修飾節におけるタとテイタの構造上の違いを検討したい。

7.1 タ形が含まれる連体修飾節と主節との関係

テイタ形が含まれる連体修飾節と主節との関係と比較対照するため、ここでは、先行研究を踏まえ、タ形が含まれる連体修飾節と主節との関係について簡略に説明する。非限定的連体修飾節の述語と主節の述語の関係を、益岡隆志（1997）庵功雄他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）などは、「付帯状況」、「逆接・対比」、「原因・理由」、「継起」に分けていることはすでに述べた¹。これらのうち、テイタ形やタ形を含む連体修飾節と主節とは、いずれも「付帯状況」、「原因・理由」の関係を表すことができる。一方、テイタ形は、「継起」の関係を表さないのに対し、タ形は、「継起」の関係を表すことが多くある。また、タ形が「逆接・対比」の関係を表す場合には、形容詞、形容動詞や名詞の過去形の使用事例は多く見られるのに対し、動詞の使用事例はあまり多くない。動詞のタ形の例としては、たとえば以下の例がある。

- (1) 殺人を犯した暴力団メンバーは罪の意識が全くない。（佐良木昌、新田義彦（2008））
- (2) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。（『赤い指』）

連体修飾節の「殺人を犯した暴力団メンバー」は、「罪の意識がある」ことが当然だ

¹ タ形についてのみ、佐良木昌、新田義彦（2008）は、連体修飾節の主節述語の意味的なかかわりを「時」、「時間的継起」、「原因・理由」、「付帯状態」、「相反」に分類した。比較したところ、「時」が新しい関係として確認できた。たとえば、

- (1) 人ごみの中に私をみつけた父は「おおい！」と叫んだ。
→ 父は人ごみの中に私を見つけたとき、「おおい！」と叫んだ。
- (2) 20年ぶりに再会した二人は感窮まって号泣した。
→ 二人は20年ぶりに再会したとき、感窮まって号泣した。

しかし、例（2）は、「原因・理由」を表すとも解釈できる。「時」についてはまだ検討の余地があると思われる。テイタについては同種の事例がまだ確認できていないこともあり、この問題の追究は今後の課題としたい。

と普通は考えられるため、主節の「罪の意識が全くない」と対照的になっている。また、連体修飾節と主節との間には、連続性が見られない。これは、テイタ形の「逆接・対比」とは意味が異なる。つまり、タ形の場合は、連体修飾節の動詞は「動作の完了」を意味するのに対し、テイタ形の場合は、動詞は「途切れ」の意味を表している。

7.2 連体修飾のしかた

連体修飾節にテイタが現れる場合は、連体修飾節で表される事態と主節で表される事態との間につながりが認められる一方、タ形が現れる場合は、連体修飾節で表される事態と主節で表される事態とは独立しており、連体修飾節の述語が完了したことで主節の述語との間にはつながりが見られない。たとえば、次の例をみられたい。

(3) この日は朝方チラチラと降っていた雨もすっかり上がってどんどん気温も上昇し、嬉しい海水浴日和となっていました。 (Yahoo!ブログ)

(4) 天下取りの合戦、賤ヶ岳の合戦の舞台となったところでもあり、水上勉の名作「湖の琴」の舞台でもある余呉湖。例年この時期深い雪に埋れた余呉湖であるが、この日の余呉湖は先月降った雪もすっかり解けて春を感じさせるような日差しが明るく降りそそいでいた。 (同上)

例(3)では、連体修飾節の「降っていた」²は途切れの意味を表し、連体修飾節で表された状態が変化し、その変化した後の状態が主節で表されている。ここでは、連体修飾節の状態と主節の状態との間に、確かにつながりが見られる。

一方、例(4)では、主節の述語「解ける」と連体修飾節の述語「降る」との間には、直接的な関係が見られない。連体修飾節の「降った」は、「雪」だけを修飾している。また、主節で表された事態「解ける」も、「雪」だけに関連づけられる。「降った」と「解けた」との間には、つながりや関係がみられない。

また、次の例を見られたい。

² 「降っていた」の160例のうち、連体修飾節は16例で、そのうちの10例が途切れの用法である。

飾節が主名詞とも主節とも関連付けられてこれらを修飾するものである。前述したことからわかるように、前者ではタ形が用いられ、後者ではテイタ形が用いられる。

次に、このような連体修飾節におけるテイタの構文的な特徴を、「形容詞＋タ」に適用することを試みる。

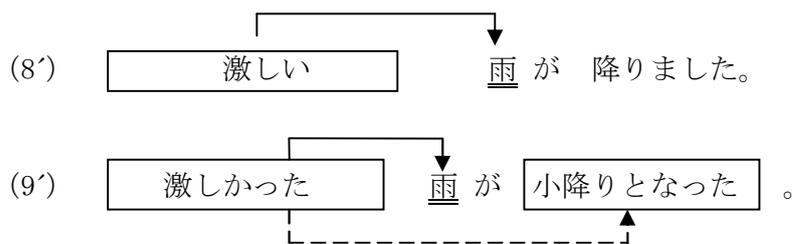
7.3 「形容詞＋タ」への適用

寺村（1984：204）は、次の文を挙げている。

- (8) ハゲシイ雨ガ降りマシタ。
- (9) ハゲシカッタ雨ガ……コブリニナッタ。

寺村（1984：204）は、「修飾・限定」の仕方には二通りあると指摘している。一つは、他のものと比べ、主名詞を区別する特徴づけをするもので、もう一つは、主名詞自身の異なるありかたの中から一つをとりだして、他のありかたと区別する特徴づけをするものである。例（8）は前者で、例（9）は後者である。

そこで、前節で述べた連体修飾節のタとテイタの違いを、「激しい雨」と「激しかった雨」の違いに適用してみる。図に示せば次のようになる。



(8) の場合、連体修飾節の「激しい」は、主名詞「雨」だけを限定し、主名詞「雨」の変わらぬ特徴・性質を表している。また、連体修飾節の事態と主節の事態とは互いに独立している。一方、(9) の場合、主節の述語「小降りとなった」は、主語の「雨」を説明しているが、そこでは主に、連体修飾節の状態の変化が焦点になっている。つまり、連体修飾節の「激しかった」という状態は、主節の「小降りになった」（激しくない）前の状態として捉えられ、連体修飾節の状態と主節の状態とは対照的な関係にある。そして、激しかった状態から小降りの状態、すなわち激しくない状態へ、とい

う連続性がそこにはある。

連体修飾節のテイタが途切れを表す場合と連体修飾節の形容詞の過去形は、①形態上でタが付いている、②一時的状態を表す、③状態の変化が見られる、という三つの点で共通している。品詞が違うものの、動詞の途切れの意味構造は、形容詞の過去形の解釈にも適用できると考えられる。

まとめてみると、形容詞の非過去形は、名詞の性質を表し、連体修飾節で主名詞を修飾する場合は主名詞だけに関わるという点で、動詞のタ形が「ひとまとまり性」という基本的な意味を持ち、連体修飾節では主名詞だけに関わるのと類似する。一方、形容詞にはアスペクト的意味はないものの、形容詞の過去形は状態を表し、連体修飾節の状態がその後打ち消され、対照的な事態が主名詞に後続する部分で表現されるという点は、動詞の途切れの構文的特徴と類似する。

してみると、「形容動詞＋タ」、「名詞＋タ」なども、「途切れ」を意味する「動詞＋テイタ」と同じ構文的特徴を有しているのではないかと思われる。次章では、「形容詞＋タ」をはじめ、「形容動詞＋タ」、「名詞＋タ」などを含めてこの点を詳しく検討する。

8 タにおける「変化」の意味について

前節では、連体修飾節のテイタが途切れを表すときには、連体修飾節と主節とは互いに関連付けられおり、またこの特徴は、「形容詞＋タ」の解釈にも適用できるということを見た。本章では、「形容詞＋タ」のほか、「形容動詞＋タ」、「名詞＋タ」などを含めて、過去形の「タ」の意味を検討したい。

8.1 はじめに

寺村秀夫（1984：201）には、次のような例文がある。

- (1) 昨日、{激しい／*激しかった} 雨が降りました。
- (2) {*激しい／激しかった} 雨が、夕方やっと小降りになった。

ここで、本章が取り上げたい問題点は三つある。一つ目は、「激しかった」が例（1）では使えないのに対し、例（2）では使えるという事実に示されているような、「激しかった」と「激しい」の使い方の違いは何か。二つ目は、例（2）の「激しかった」におけるタの用法はいかなるものか。そして三つ目は、このようなタの用法は、普遍性をもつのか否かである。

従来、タの用法に関する研究は、動詞を中心に行われており、形容詞のタの用法にはあまり触れられていない。また、主文末のタは、これまでテンス、アスペクト、ムードなど多くの角度から考察され、過去、完了、発見、認識修正、思い出し、反事実、命令などの用法が明らかにされたが、上記の例（2）の「激しかった」のような連体修飾節の中に現れるタをどう理解すべきかについては、まだ検討の余地があると思われる。

8.2 形容詞のタ

8.2.1 先行研究

日本語記述文法研究会（2007）は、「形容詞が過去形をとって名詞を修飾するのは、節として名詞を修飾する場合である。…形容詞の過去形は、主文で述べられている事態や状態と対比して、「今ではそうではない」という意味を強調している。…名詞＋「だ」や動詞の過去形も同様の意味をもっている。」（日本語記述文法研究会（2007：171-172））と述べ、次の例を挙げている。

(3) さっきまで激しかった雨がいつの間にか止んでいた。

（日本語記述文法研究会（2007：171））

(4) 買ったときは赤かったバックが今ではオレンジに近い色をしている。（同上）

(5) 最初にあったときは20歳だった私たちだが、もうあれから20年も経つ。

（日本語記述文法研究会（2007：172））

(6) 以前ボーリング場があった場所には、今はコンビニがある。（同上）

しかし、この説明にはいくつかの問題点が指摘できる。一つ目は、この場合のタがどのような意味をもつかの説明されていないことである。二つ目は、次の例のように、連体修飾節は明らかに過去の事態を表しているにもかかわらず、形容詞の過去形が使われていない理由を説明できないことである。

(7) お彼岸なので、八王子の実家のお墓に兄弟でお参りしてきました。二十日土曜日は午前中は激しい雨で田舎の山の中にあるお墓にいけるか心配でしたが、八王子についていたらうそのようにいい天気になり、無事お墓参りができました。

（Yahoo!ブログ 2008）

(8) 7月9日（水）晴昨日、午前中激しい雨でしたが、午後は雨が上がりました。梅雨の合間に、亀の子山周辺を散策しました。（同上）

また、形容詞のタの主な用法としては、テンスとしての「過去」が挙げられる。岩崎卓（1998）は、連体修飾節のテンスを考察するうえで、Josephs（1972）¹を引用し、「寺村秀夫（1984）は、「{*激しかった／激しい}雨が降った。」のように、絶対的テ

¹ JOSEPHS, Lewis S. (1972) Phenomena of Tense and Aspect in Japanese Relative Clauses. *Language* 48:1. pp.109-133 を参照。

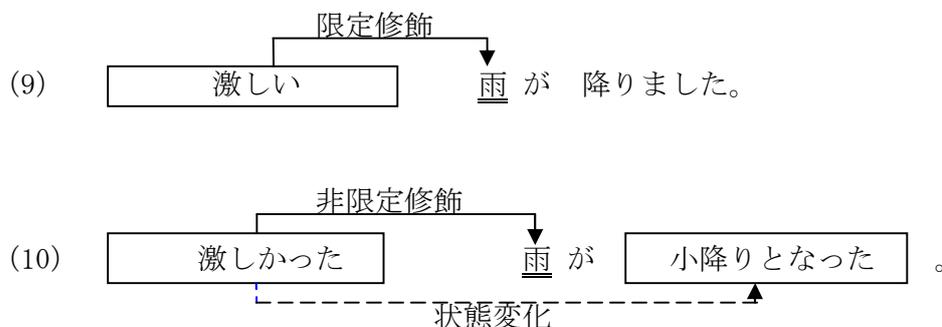
ンス・タ形が、文意としては可能であってもいいはずなのに、不可能である事実を指摘している。…（中略）…寺村秀夫（1984）の現象について、本稿の考察では説明できない」（岩崎卓（1998：62））と指摘している。

高橋他（2003：143）は、「形容詞の一番大事なはたらきは、名詞をかざって、名詞のさししめすものごとの特徴をしめすことである。その用法の場合には、テンスに無関心なのが基本である」、と述べている。つまり、(1)の「激しい」と(2)の「激しかった」は、テンスから解放されているのであり、それゆえに、テンスの角度からその使用の可否を説明することは、当然不可能なのである。

寺村秀夫（1984：204-205）は、「修飾・限定」の仕方には二通りあると指摘し、この現象を説明している。一つは、他のものと比べ、主名詞を区別する特徴づけをするもので、もう一つは、主名詞自身の異なるありかたの中から一つをとりだして、他のありかたと区別する特徴づけをするものである。すなわち、例(1)の「激しい雨」は、「静かな雨」「穏やかな雨」など、色々な降りよりの雨がある中の一つを限定し、例(2)の「激しかった雨」は、そのときの雨の、時間に沿った変化の中の一局面を捉えた限定、特徴づけである、ということになる。以上の解釈は受け容れやすいが、ここでは、「激しかった」のタの用法は明確に説明されていない。

8.2.2 本稿の立場

本稿は、基本的に寺村秀夫（1984）の解釈に賛成であるが、連体修飾節で表される事態と主節で表される事態との関係には、二つの異なる種類のものが存在すると考える。図に示せば次のようになる。



つまり、例 (1) の場合は、(9) に示したように、連体修飾節の「激しい」は、形容詞の非過去形としてテンスから解放されていて、主名詞「雨」だけを限定し、主名詞「雨」の変わらぬ特徴・性質を表している。またそこでは、連体修飾節の事態と主節の事態とは互いに独立している。一方、例 (2) の場合について、寺村秀夫 (1984 : 205) は、「激しかった雨」を、「そのときの雨の、時間にそっての変化の中の一局面を捉えた限定、特徴づけである」と説明している。(10) に示したように、主節の述語「小降りとなった」は、主名詞の「雨」を説明しているが、そこでの焦点は、主に連体修飾節の状態の変化を説明することにある。「激しかった」は、主節の「小降りになった」(激しくない) 前の状態として捉えられ、主節の状態とは対照的な関係にある。そして、雨が激しかった状態から小降りになる、つまり、激しくない状態へと移行したことが述べられているという点で、連体修飾節と主節のそれぞれが表す状態には連続性がある。次に、「激しかった」と「激しい」をコーパスで検証した結果を分析する。

8.2.3 コーパスによる「激しかった」と「激しい」の調査²

「現代書き言葉均衡コーパス 中納言」で「激しい」と「激しかった」の用例を調査した。「激しい」の全 3445 例 (主文末の例を含めて) のうち、上記のような状態変化の連続性という特徴をもつ連体修飾節の例は見つからなかった。

(11) 「暑さ寒さも彼岸まで・」と良く言われているように、昨日から急激に寒くなりました。冷たい秋雨の朝、一瞬青空が現れ朝日に輝く雲をパチリ、午前には激しい雨やあられが降りました。おお！さむ〜い！ (Yahoo ブログ 2008)

(12) 大尉は高綱を連れ、老人子供女のいる建物に案内させた。婦女子のあるものは位牌に向かって合掌しており、数分前の激しい銃声に、夫たちが銃殺されたものと信じて泣き伏しているものもあった。 (『満州崩壊』)

(13) 確かにガラス張りの大ホテルで、設備も整っている「近代的な」ホテルだが、

²寺村秀夫 (1984 : 201) は、例 (1) と例 (2) を挙げ、次のように指摘している。

「しかし、実際に色々な例を調べてみると、上のようにはっきりどちらかと判断される場合もあるが、人によって両形とも許容される場合もある。そのどちらかがより自然だとされる場合も、平等に許容される場合もある。」(寺村秀夫 (1984 : 201))

資料がないため、母語話者の意見によって文の自然さを判断するのは不可能であるが、本稿は、日本語母語話者の判断ではなく、調査実例の分析によっている。

それだけに団体客が多い。昨夜来の激しい雨は止んだものの、どんよりした空からいつまた降り出してもおかしくない。この空模様ではチロルの高原も無理だろう、せっかく楽しみにここまで来たというのに…。 (『ドイツ手作り紀行』)

(14) 3年前に激しい頭痛と吐き気で脳外科にかかりました。いろいろ検査しましたが異常はなく、「疲れやストレスからきているのでしょうか」といわれ、頭痛薬とデパスを処方されました。 (Yahoo!知恵袋 2005)

上例のように、過去の事態を述べるときも、形容詞の非過去形が使われる。これは、連体修飾節の「激しい」は、主名詞の性質にだけかかわり、連体修飾節で表される事態と、主節で表される事態とは独立しているからである。

一方、「激しかった」の全 129 例（主文末の例を含めて）のうち、連体修飾節は 11 例であるが、その中には、このような「状態変化」を表すものが 6 例³ある。

(15) 前夜激しかった雨も小降りとなり、回復の兆しがうかがえる早朝、東京・品川区東五反田、通称「池田山」の高台にある瀟洒な洋館の正田邸は、ピーンと張りつめた空気に包まれていた。 (『美智子皇后』)

(16) 筋肉痛が発生してからの四日間の痛みの変化を調べてみると、下右のグラフのように最初は痛みが激しかった温チームのほうが痛みがなくなっていたのです。 (『ためしてガッテン効果がすぐ出る安心健康法』)

(17) プログラム修了時の柴崎は、素手、ナイフ、狙撃、すべての技術において、ジョゼフとダンを凌駕するまでになっていた。誰よりも喜怒哀楽の激しかった柴崎は、技術と引き換えに、人間らしさを失った。涙を、怒りを、笑顔を、氷壁の心に封印した。 (『闇の貴族』)

³ 他にも、たとえば、以下のような例がある。

大人だけでなく、子どもたちからも、おこづかいや、バザーであつめたお金が次々と寄付され、なんとアメリカ中で一万一千九百七十体もの人形が、かわいい「平和の親善使節」として日本へ送り出されたのでした。排日運動の激しかったカリフォルニアからも、四百六十一体の人形が贈られたほどでした。人形は、どれも四十センチほどの大きさのマーマー人形でした。 (『先生のわすれられないピアノ』)

カリフォルニアは、「排日運動」が激しいという性質をもっていない。そもそも「排日運動が激しい」というのは、「性質」とはいえない。これは、カリフォルニアの過去のある時期の状況を述べているだけで、今のカリフォルニアでは、排日運動が激しいかどうかは分からない。連体修飾節のタは、基準時と切り離された「過去」を表すと理解してよいと考える。

同じく過去の事態を述べるにも、連体修飾節の状態に変化があり、主節でそれとは対照的な事態が生じた場合には、形容詞の過去形が使われている。ここでは、連体修飾節の状態と主節の状態には連続性が見られる。すなわち、連体修飾節の状態に変化が起こった場合には、形容詞の過去形が使われると言える。

また、例(1)と例(2)を比べると、もう一つの特徴が認められる。すなわちそれは、例(1)の「激しい」を削除すると、文の意味が変わるのに対し、例(2)の「激しかった」を削除しても、文の意味は変わらないことである。このことは、形容詞の非過去形は限定的な働きをするのに対し、形容詞の過去形は非限定的な働きをすることを示しているものと思われる。

要するに、例(1)の「激しい」は「限定」で、「激しい雨」は、「静かな雨」「穏やかな雨」など、色々な降り方の雨がある中の一つを限定するものであり(寺村秀夫(1984:204-205))、削除されれば、雨の降り方の特徴が特定できず、文意が変わってしまう。それに対し、例(2)の「激しかった」は、たとえそれが削除されても、主節の「小降りになった」という文を見るだけで、「激しかった」状態から変化してきたことが想定できるわけである。

また、このような用法は、形容詞に限らず、形容動詞や名詞にもあることが確認されている。

8.3 形容動詞の夕

(18) こちらからは式神の姿は見えなかったが、宮の周囲が陽光に似た明るい光で満ちあふれているのがわかる。たぶん、日曜星の能力だ。やがて、鏡のように静かだった水面が、細かな振動を伝えるように波立ち始めた。それはわずかな揺れでしかなかったのだけれど...この閉ざされた静かな世界が、今はじめて外からの力で動かされていた。 (『積善白花』)

「水面」は、「鏡のように静かだった」という状態から「細かな振動を伝えるように波立ち始めた」という状態へと連続的に変化している。一方で、「宮」という「世界」は、常に閉ざされ、静かな性質をもち、「今はじめて外からの力で動かされていた」と

いうようにその性質が変わりつつあることが説明されてはいるものの、連体修飾節の状態が完全に変化したとはいえない。また、ここでは、「静かだった」は「水面」を限定せず（非限定）、「静かな」は世界を限定していると解釈される。

(19) ガラリと戸があいて、人々が入って来た。静かだった土間は、忽ちにぎやかな談笑の声にみたされた。 (『二本の銀杏』)

(19) も同様に、連体修飾節の「土間」は、「静かだった」状態から「にぎやかな談笑の声にみたされた」状態へと変化したのである。

「現代書き言葉均衡コーパス 中納言」で「静か」と「静かだった」の用例を調査した。「静かだった」の全 109 例（主文末の例を含めて）のうち、連体修飾節は 8 例であり、その中でこのような「状態変化」を表すのは 6⁴例である。一方、「静かな」の 1653 例（主文末を含めて）の中に、このような状態変化を表す例はまだ確認されていない。

(20) カンクンは、広大なリゾート・ゾーンだった。カリブ海にむかって斧のような形の砂洲があり、その内部にはいくつかの潟湖があり、静かな水面が広がっていた。私とミゲールは、毎日夕方にそこで小魚を釣り、外洋の釣りのための餌にするのだ。 (『いつか光は匂いて』)

(21) 季節はちょうど二月の半ばを過ぎたばかりだが、今日は朝からあたたかく三月の末に近い気候を思わせる日だった。風もなく、静かな日差しがまだ雪が残る庭を照らしている。その風景の中に、池の右端にある梅の老木が一、二輪の花をつけはじめ

⁴ほかの 2 例は、以下のようなものである。

(1) 八幡宮の左、「永代寺門前仲町」とあるところが現在の江東区門前仲町。【図 1】深川七場所富岡八幡祭板橋飯盛女の評価が低かったため？ 四宿のなかでも静かだった板橋宿上、中、下に分かれていた中山道の首駅「板橋宿」 家康が江戸に幕府を開いた慶長八年(千六百三)、五街道の制定にあわせて中山道に板橋宿が置かれることになった。 (『江戸東京古地図』)

(2) ! 中居ファンの皆さまーはモチロンご存知ね!!! 二十七時間テレビがほんと面白かったと~~やはりさんまさんは面白い! 夜中のタモリさん、たけしさん、中居くん、さんまさんの所では静かだった中居クン、やはりさんまさんたちのペーストかを崩すのがいやだったそうで~~邪魔はしないって~~ (Yahoo! ブログ 2008)

例 (1) は、東京古地図の話で、主節がない。連体修飾節と主節がみられないため、この夕は「過去」を表すと考えられる。例 (2) は、「中居」という人物がテレビに映ったときの特徴であり、ここでも夕は「過去の一時的状態」を表すと考えられる。

ているのが見えた。

(『漆の実のみる国』)

以上の二例では、連体修飾節の「静かな」は主名詞だけにかかわり、連体修飾節は主節とは無関係で、連体修飾節から主節へという状態変化がみられない。また、この用法は、「静かだ」以外の形容動詞にも確認された。

(22) これがシミュレーションゲームなら、設定を一つ変えれば、何かがすぐ変わるけれども、組織として何か変えようとする、一つ一つに1~3年はかかるんです。継続することが大の苦手だった僕が、ずいぶん気長になったものだと思います。

(『がなり流!』)

(23) 本物の信州蕎麦...だが、今までとはひと味違う...そんな店をやってみたい。そう狙いを定めると、県下は勿論、全国の蕎麦処をじっくり食べ歩いた。嫌いだった蕎麦が、だんだん好きになってきた。

(『日本列島すぐ蕎麦の旅』)

以下のように、状態変化の「きっかけ」を示した例もある。

(24) でもダイエットを始めた頃、(小6とか中学の時) 野菜や魚しか食べれない環境になり、あれ?おいしいじゃん!!って気付きました。今は大嫌いだった牛乳も妊娠を機に好きになりましたし、時期ってあると思います。(Yahoo!知恵袋 2005)

一方、これらの形容動詞の非過去形が「状態変化」を表すような連体修飾節は、本稿の調査の範囲ではまだ確認できていない⁵。

8.4 名詞の夕

次に、名詞の場合を見られたい。

(25) 現実の男性には、一向に興味を示さない。男の人を好きになったという話は聞

⁵ 連体修飾節に現れる「大嫌いな」の例は151例、「苦手な」は971例、「嫌いな」は1287例で、その中に連体修飾節が「状態変化」を表すような例はまだ確認されていない。

いたことがないし、普通の友達だった男の子が実は自分に好意を寄せていたことがわかると、途端に手のひらを返したように避け始める。もちろんデートの経験もない。

(『中国洗面器ご飯』)

この例は、名詞の過去形の「過去」という意味では解釈できない例である。連体修飾節の「友達だった」が主名詞「男の子」を修飾し、連体修飾節の事態と対照的な事態が主節で表され、連体修飾節の状態が変化していることがわかる。

寺村秀夫(1984: 201)には、次のような例文がある。

(26) a 川口は軍需工場 {の／?だった} 会社を三つ経営していた。

b 川口は、軍需工場 {?の／だった} 会社を平和産業に切りかえた。

軍需工場の会社は平和産業とはいえない。平和産業でない産業が平和産業に変化した場合、「?」がついた名詞の非過去形より、名詞の過去形が自然に使われることから、連体修飾節における名詞の過去形が、連体修飾節の名詞の状態が変化したという意味を担っていることがわかる。

8.5 連体修飾節のタの用法—「変化」について

8.5.1 「変化」の用法

以上、連体修飾節に現れる形容詞、形容動詞、名詞の過去形の考察を通して、これらは、品詞が違うものの、①形態上タが付いている、②一時的状態を表す、③状態の変化が見られる、という三つの点で共通していることを確認した。本稿は、連体修飾節に現れる場合、タには「変化」⁶という用法があると考えられる。

この用法は、形態上、形容詞の場合にはカタになり、名詞または形容動詞の場合

⁶ 「変化」の用語の概念について、孫(2008)は、新たな動詞分類を行い、動作性動詞、非動作性動詞、動作性・非動作性動詞(両用動詞)に分けてアスペクトを研究している。その中で、孫は、「消える」、「倒れる」など従来「変化動詞」と見なされてきた動詞を「非動詞性動詞」とし、それらのタ形のアスペクト意味は「完了」ではなく「変化」であるとしたうえで、「変化」を「完了と同列に扱うべきだ」と主張している。この「変化」は、主文末を中心に検討した結果としてのアスペクト的意味であり、本稿でいう連体修飾節の「変化」の意味とは異なる。

にはダッタになる。また、連体修飾節のタが「変化」を表すときには、「それまで」「これまで」を伴うことがある。

(27) 添削指導を通して、子どもたちは文章を書くことが好きになり、それまで苦手だった国語が得意になり、さらには考えることができるようになっていきます。

(『書く力が伸びる!』)

(28) 日本の企業はいま、グローバルな大競争に勝ち抜く体質を目指して、これまで強みだった従来システムを抜本的に見直している。「一社懸命」だった働く側も今度は、自分の能力を十分に発揮できる場で仕事に燃焼したいと流動化を始めた。

(『2020年からの警鐘』)

8.5.2 動詞のタについて

タの変化の用法は、形容詞、形容動詞、名詞だけでなく、動詞にもあることが確認できる。しかし、動詞の種類により、連体修飾節の状態変化を表す形式が異なる。たとえば、「ある」という状態動詞について、寺村秀夫(1984:201)は、次のような例文を挙げている。

(29) a 清子は汽車で三時間ほどのM市に {ある/ ?あった} 大学に通っていた。

b 都心に { *ある / あった } 大学が郊外に移転した。

(29) bの場合に「あった」が選ばれることも、連体修飾節の状態に変化が見られるためだと思われる。

一方、動作動詞や変化動詞などは、形態上は、タでなく、テイタでこの状態変化の意味を表現する。これは、第三章、第四章で詳しく述べた。たとえば、

(30) ……定価を守っていた百貨店も、対抗上昨年暮れから安売りに走り、定価を設定する意味合いが薄れた。 (『朝日』94.8.14)

(31) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。 (『赤い指』)

これらの例では、連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、以前の事態とは対照的な事態が生じていることが主節で表されている。つまり、連体修飾節の状態に変化が見られる。

このように、連体修飾節に現れるタの「変化」という意味は、普遍性をもつと思われる⁷。

8.5.3 位置づけ

日本語文法学会編（2014：370）には、従属節のタについて、①発話時以前（「昨日彼からもらった本を無くしてしまった。」）、②主節時以前（「昨日勝ったチームが来年の世界大会に出場できる。」）、③状態（「まっすぐ伸びた道」）、④仮定（「今 100 円あったとします。」）などの用法を有していると述べている。

本章で述べた「変化」は、動詞、形容動詞、形容詞、名詞などに広範囲で確認できた用法であり、以上の①～④の用法と並立すべき用法だと考える。

8.6 まとめ

本章は、「{*激しかった／激しい} 雨が降った。」の文を手掛かりに、連体修飾節に現れるタに着目し、それがもつ「変化」という用法とその特徴を考察した。

連体修飾節に現れる形容詞、形容動詞、名詞の過去形の考察を通して、品詞は違うものの、それらは、①形態上タが付いている、②一時的状態を表す、③状態の変化が見られる、という三つの点で共通していることが判明した。本稿は、連体修飾節に現れるタには、「変化」という用法があると考えた。また、タの「変化」の用法は、動詞、形容動詞、形容詞、名詞などに広範囲に適用できることが確認された。

⁷ 本章でいうタの「変化」は、品詞の種類にも関わらず、動詞、形容詞、名詞、形容動詞などに広範囲で確認できた用法であり、普遍性を持っている。一方、この「変化」は、動詞の場合、テイタ形で表されている。本稿は、動詞にテイタがついた場合、テイタの意味を途切れと呼んでいる。

9 「状態持続」について

9.1 問題提起

連体修飾節についての研究は、従来、テンスの角度から行われることが多く、アスペクト的意味の角度から行われることはほとんどなかった。又、従来指摘されてきたような、「動作の持続」および「変化の結果の持続」というテイル（テイタ）の主な二つのアスペクト的意味だけでは、小説などの実際の分析には不十分であると思われる。たとえば、次の用例を見てほしい。

(1) みんなこくんとうなずく。「同じ数を使っていいの」 後ろの端の座席に座っていた大野くんが、机に両手をついて乗り出すようにして言う。

(『算数授業に子どもたちの生きる姿を見た』)

(2) 窓ぎわに立っていた村井が、白衣のポケットに手を入れたまま啓造をみてうすわらいを浮かべた。

(『氷点』)

例(1)の「座る」と(2)の「立つ」は、従来の研究では一般に変化動詞とされている。しかし、それらは、典型的な変化動詞である「死ぬ」、「結婚する」などとは異なる。そのことは、たとえば、「長い間死んでいる」、「長い間結婚している」とはいえないが、「長い間座っている」、「長い間立っている」とは言えるという点からも明らかである。

筆者は、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を調べるため、北京日本語学研究所『中日対訳コーパス』(2003 第一版)に収録された日本語の文学作品⁵¹作品(『あした来る人』『坊ちゃん』『越前竹人形』『蒲団』『鼻』)を対象にして用例を調査したことがある²。合計で129例を収集したが、そのうちの45例(35%)は、そのアスペクト的意味が判断しにくいものであった³。その中でも特に、「座る」「立つ」

¹「ていた」を検索したところ、6063件見つかったが、すべてを分析する時間的余裕がなかったため、この五作品だけを取り上げることにした。

²具体的には、王守利(2014a)を参照。

³たとえば、以下のような例である。

八千代とはい合って坐っていた夫人は、夫をちょっと見上げるようにして言った。

(『あした来る人』)

は高い出現率を示している。これらの継続相の意味を解明することが、一つの課題になる。また、これに類似の動詞がないか、そしてそれは、どのような方法で判断できるかを追究する必要もあると思われる。

こうした課題を解決するためには、「状態の持続」というアスペクト的意味を導入する必要があると本稿は考える。したがって、本章では、連体修飾節のテイタのアスペクト的意味を手がかりとして、新たに「状態の持続」というアスペクト的意味を提案したい。

では、「状態の持続」とは何か、またそれは、どのように判断され、どのような動詞のテイル（テイタ）が「状態の持続」を意味すると言えるのだろうか。

9.2 先行研究

「座る」「立つ」のような動詞のテイルの意味の特殊性は、研究者にはよく知られている。藤井正（1966：111）は、シテイルの意味を、動作の進行、持続、結果の残存、経験、単純状態、反復に分けている。「座っている」は、「持続」の意味を表すとされている。つまり藤井は、「動作の進行」や「結果の残存」とは別に、「持続」という意味を承認する意義を認めていると言えよう。

高橋太郎（1985：97）は、「立つ」や「座る」を二局面動詞とし、「座る」「立つ」タイプの動詞が動作動詞と変化動詞の中間に位置づけられることを認めながらも、継続相の意味としては「動作の持続」になると判断していると考えられる。

工藤真由美（1987：14）は、「座る、持つ、行く」などの動詞の例文をあげ、シテイルは、＜変化結果の持続＞を意味するのか、それともく（変化した状態を維持するという）動作過程の持続＞を意味するのか、実は捉えがたい、と指摘し、このタイプの動詞の位置づけが難しいことを述べている。

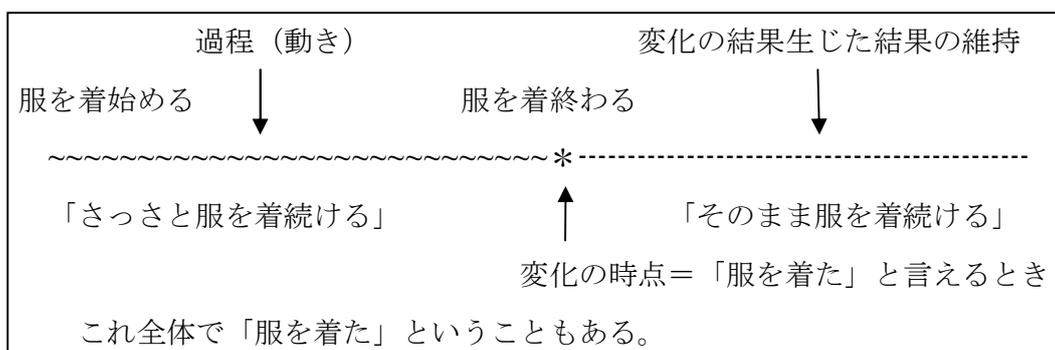
一方、「状態持続」というアスペクト的意味を提唱した三原健一（1997）は、「座る」や「立つ」といった動詞の位置づけには触れていない。ここでいう「状態持続」は、「結果持続」でもなく、「動作持続」とも言いにくいような、ある状態が持続していることを表している。「立つ」「座る」は、当然「状態持続」を表す動詞の一部だと思われるが、三原健一（1997）は、心理動詞や認識動詞、テイル形になり得る状態動詞（「住む」）などといった動詞がこの類型を構成する（p. 114）と述べるに止まり、「座る」タ

イプの動詞がこの類型に入るかどうかについては明言していない。

以上からみれば、従来の研究において、「状態持続」の概念は決して明白なものではなく、「座る」「立つ」の位置づけもまちまちであると言えよう。

9.3 時定項分析と「状態の持続」

森山卓郎（1986）は、動きの質的变化を表す点（時定項）を規定し、それを組み合わせることによって意味を総合的に分析する方法（時定項分析）を提案し、動詞句⁴が内包するアスペクト的局面の明示化を目指した。本稿も、この方法に依拠する。森山は、「服を着る」を、次の諸要素に分解することが出来ると述べている。



（森山卓郎（1986：92））

つまり、「服を着る」は、＜過程＞という時定項、＜動作主体の変化＞を表す時定項、そして＜維持＞という時定項を含んでいる。筆者はさらに、これらの概念を記号化し、森山の記述に従って、時定項の定義と例を表1にまとめている。

森山は、動きがどのようなありかたをしているのかを局面とする。この局面には、大別して、持続的なものと、一時点的なものがある。一時点的なものは、一つの項で表せる。そして、一時点的な変化（永続的）（s、o）か、無変化か（z）に分けられる。一方、持続的なものは、二つの項で表せる。持続の局面はさらに、〔過程〕〔維持〕

⁴「動詞句」という言い方が用いられているのは、動詞の意味が、単独では決定されず、格成分、副詞的成分、用法などによって、連語的に決定されるということを重視することによる（森山卓郎（1986：114））。本稿では、文脈の影響を否定はしないが、一つの動詞は、いくつかの語彙的意味をもつことが可能である一方、特定の文脈に置かれると一つの意味でしか使えないので、この「動詞句」の概念を、文に現れる動詞の語彙的意味と同様に理解してもよいと考える。

〔結果持続〕と三つに分けられる⁵。過程を表す区間は、**ab** 二つの項で表す。**a** がその始まりの点を、**b** がその終わりの点を表す。〔維持〕、〔結果持続〕を表す空間は、維持、持続すべき状態が成立するための変化が始めになければならないので、変化点を表す項（主体変化 **s** または客体変化 **o**）と、その終結を表す項（維持が **d**、結果の持続が **e**）で表す（次ページを見られたい）。

森山卓郎（1986：84）は、持続的な動きの局面の中で、〔過程〕が典型的に運動的であるのに対し、典型的に非運動的なものは〔結果持続〕であり、両者の中間にあるものが〔維持〕であると述べ、〔維持〕を、持続的な動きの局面の中の必須の概念として認めている。

森山は、時定項分析を通して、アスペクト的な意味の決まり方のプロセスを分析・整理している。そして、「〔維持〕が状態化された場合、結果が主体の意志によって、保存、維持中という意味になる。この意味は特に維持状態と呼ぶことにする」（p. 88）とあるように、「維持状態」は、藤井正（1966）がいう「持続」とほぼ同じで、本稿でいう「状態の持続」に当たる⁶。こうして、テイルの意味から表1を見ていくと、**ab** の場合は「動作の持続」を表し、**s**、**se**、**oe** は「変化の結果の持続」を、**sd**、**od** は「状態の持続」を表す⁷。「座る、立つ」は、表1の **sd**（主体変化による維持）に属し、そのほか「黙る」「持つ」「休む」などもこのタイプに入る。

⁵持続的な場合は、期間成分共起可能で、「し続ける」「し始める」の可能な〔過程〕、期間成分共起可能で、「し続ける」のみ可能な〔維持〕、期間成分共起のみ可能な「結果持続」に分けられる（森山1986：92）。

⁶本稿で「状態の持続」という用語を使うのは、「持続」をテイル（テイタ）の中核的な意味として位置づけ、「動作の持続」「変化の結果の持続」と並立するものと考えているからである。

⁷**z**、**o** の場合は、テイルの意味は「経験・経歴」とされている。

表 1：森山卓郎（1986）の時定項の定義と例

| 記号 | 定義 | 動詞句の例 |
|----|-------------------------------------|--|
| z | 無変化一時点的動き | 見掛ける、目撃する、ひらめく、一瞥する、驚く、命中する、あきれる、飲み込む、ぽかんという音が聞こえる |
| s | 動作主体の変化（これだけなら一時点におこる永続変化を表す） | きる、(野菜が) いたむ、うせる、枯れる、生まれる、消える、結婚する、離婚する、死ぬ、割れる、(完全に) 壊れる、焦げる、成立する、(行事が) 流れる、(柿が) なる |
| o | 客体の一時的変化（これだけなら一時点におこる永続変化を表す） | 枯らす、無くす、設ける、(うっかり) 殺す、設立する、(うっかり) こがす |
| c | s、o の代わりに、特に、s、o の違いが問題にならない場合に代用する | |
| ab | 過程を表す（始まり、終結が取り出されない場合、括弧でくる） | ab：扱う、争う、歩く、言う、祈る、伺う、(試験を) 受ける、歌う、運転する、追う、教える、踊る、考える、叱る、しゃべる、調べる、吸う、勉強する、(映画を) 見る、養う、読む、笑う |
| | | a(b)：愛する、憧れる、疑う、怒る、思う、悲しむ、心配する、楽しむ、務める、怠ける、悩む、憎む、喜ぶ |
| | | (a) (b)：生きる、過ごす、住む |
| sd | 主体変化による維持 | お辞儀をする、浮かぶ、接触する、電気がつく、(目を) 閉じる、灯る、並ぶ、はさむ、向ける、向く、座る、立つ、黙る、握る、もたれる、(荷物/興味を) 持つ、休む |
| od | 客体変化による維持 | 預ける、貸す、借りる、許す、禁ずる |
| se | 持続可能な結果を伴う主体変化 | 諦める、覚える(覚えようとする動作をも含まない場合)、(病気に) かかる、乾く、(気持ち) を捨てる、転ぶ、知る、倒れる、間違う、(花が) 咲く、忘れる、(ひとつのことを) わかる、溶ける |
| oe | 持続可能な結果を伴う客体変化 | 移管する、出す、無くす |

また、これらの記号を組み合わせることによって、進展的变化と複合的な局面を表すことができる。これらを、森山の記述に従い、次の表 2 にまとめた。それらのうち、asbd、aabd、absd、abod の場合は、「状態の持続」を表すことが可能である。

表2 森山卓郎 (1986) による進展的变化と複合的な局面

| 記号 | 動詞句の例 |
|------|---|
| asbe | 温度が上がる、集まる、降りる、(スピードが) 加わる、(勉強が) 進む、溜まる、散る、疲れる、遠ざかる、慣れる、開く、登る、(心が) 晴れる、太る、痩せる、汚れる |
| asb | 夜が明ける、(野菜が) いたむ、消える、腐る、(芝生が) 枯れる、育つ、(時が) 近づく、(桜の花が) 散る、(草が) 伸びる |
| aobe | 集める、降ろす、(スピードを) 加える、太らせる、(次第に) 汚す |
| aob | 枯らす、腐らせる、伸ばす (使役的動詞) |
| asbd | (旗が) 揚がる、(人々が) 集まる、ドアが開く、うしろに下がる、前に出る |
| aobd | 温度を上げる、旗を揚げる、(次第に) 減らす |
| abs | 心を磨く (?) |
| abo | 洗う、売る、(枝を) 折る、織る、腐らす、殺す、(意志的に) 壊す、作成する、建てる、作る、(水に菓を) 溶かす、直す、煮る、蒸らす、焼く、沸かす |
| absd | 服を着る、眼鏡をかける、靴を履く、帽子をかぶる |
| abod | 窓を開ける、蓋を閉じる、雑誌を置く、積む、(荷物などを) のける、旗を揚げる、服を着せる |
| abse | (自分の席へ) 動く、移る、通る、習う、脱ぐ、乗り換える、(~へ) 向かう、渡る |
| aboe | 集める、入れる、動かす、映す、覚える、降ろす、返す、揃える、(水を) 足す、(ボタンを) 留める、取り替える、抜く、開く、結ぶ、渡す |

「服を着る」は、前記の通り、[過程] と [維持] が含まれているところから absd に属し、それに伴うテイルは、「動作の持続」も「状態の持続」も表せる。それらの判断には、文脈や副詞句などの構文的環境が関わってくる。

以上の表 1、表 2 を整理すると、各種のアスペクト的意味を表すことが可能な動詞句のタイプは、以下のようにまとめられる。

表3 アスペクト的意味と対応する動詞句の記号

| アスペクト的意味 | 動詞句の記号 |
|-------------|--|
| 動作の持続 (進行中) | ab、asbe、asb、aobe、abo、aob、asbd、aobd、abs、absd、abod、abse、aboe |
| 変化の結果の持続 | s、se、oe、abse、aboe、asbe、aobe |
| 状態の持続 | sd、od、absd、abod、asbd、aobd |
| 他 | z、o |

他：以上の三種類に属さないもの。

「状態の持続」は、「動作の持続」や「変化の結果の持続」と同様、意味解釈が文脈や構文環境に影響されるが、動詞の基本的なアスペクト的意味の解釈には、動詞の具体的な語彙的意味が大きく関わっている。「状態の持続」というアスペクト的意味は、「座る」という動詞だけがもつ特殊なものではなく、あるタイプの語彙的意味を有する複数の動詞がもつ一般的なアスペクト的意味なのである。

9.4 まとめ

日本語教育において教授される「動作の持続」および「変化の結果の持続」というテイル（テイタ）の主な二つのアスペクト的意味は、実際の用例の分析には不十分だと思われるため、本章では、小説の調査を糸口に、「状態の持続」というアスペクト的意味を導入した。「状態の持続」は、森山卓郎（1986）の言う「維持の状態」に相当する。本稿は、「座る」「立つ」以外にも「黙る、並ぶ、握る、（荷物/興味を）持つ、持たれる、休む」などの動詞がこのアスペクト的意味をもつことにしておく⁸。

このようにして、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味は、動作の持続、変化の結果の持続、状態の持続、途切れ、パーフェクト、反復・繰り返しなどに分けられる。具体的な用例の意味を判断する際には、いずれも文脈の影響を無視することはできないが、「状態の持続」は、動作の持続、変化の結果の持続と並んで文脈への依存度が低く、基本的には語彙的意味に左右されるという特徴をもつ。一方、「途切れ」は、パーフェクト、反復・繰り返しと同じく、文脈への依存度が高いという特徴をもっている。

⁸ 森山（1986）の時定項分析では、sdに所属された「電気がつく」、「灯る」などの例は、「主体変化による維持」とは言えないところもあり、また、「忘れる」「思う」「悩む」「悲しむ」などの内的情態動詞は、時定項で分析していいのか、まだ検討する余地が残されている。これらを追及するのは今後の課題とする。

10 主節におけるテイタのアスペクト的意味の調査

本章では、主節に現れるテイタのアスペクト的意味を考える。また、次章では、連体修飾節に現れるテイタのアスペクト的意味を考えたい。

10.1 はじめに

テイタの基本的な意味は、過去における動作の持続と過去における結果の残存とされることが多い。しかしながら、実際の小説を読むと、学習者には理解できないテイタの意味が数多く見られる。本稿は、テイタのアスペクト的意味を中心として、どのような意味でそれがよく用いられるのかを、小説の用例を通じて考察したい。

まず、第2節では、先行研究を踏まえてテイタの意味を整理する。次に、第3節では、テイタのアスペクト的意味を中心に、小説の用例を検討し、小説において文末のテイタがどのような意味で使われるのかを検討する。

10.2 主節におけるテイタのアスペクト的意味

10.2.1 基本的なテンス・アスペクト的意味

現代日本語のテンス・アスペクトに関する研究としては、金田一春彦（1976）、奥田靖雄（1977）、高橋太郎（2003）、工藤真由美（1995）などが挙げられる。基本的なアスペクト・テンスの体系は以下のようなになる。

表1 基本的アスペクト・テンス体系

| アスペクト テンス | 完成相 | 継続相 |
|--------------|-----|------|
| 非過去 | スル | シテイル |
| 過去 | シタ | シテイタ |

（工藤真由美（1995：36）から抜粋）

表 1 に示されるように、テイタは、基本的に継続相のテイルの過去と位置づけられている。まず、高橋太郎他（2005：82-91）をもとに、テイタのテンス・アスペクト的意味を概観する。

① 過去における動作の持続

- (1) 太郎は、さっき運動場を走っていた。 (高橋太郎他 (2005 : 81))

下線部は、太郎が走るという動作が過去に進行していたこと、つまり、動作がある一定期間持続していたことを表している。「走る」は、動作動詞で、ただ単に動作を行うことを表しているので、動作の後、主体の状態がどうなるかについては何も示唆されていない。

② 過去における変化の結果の持続

- (2) 雨戸がしまっていた。 (高橋太郎他 (2005 : 81))

雨戸が閉まるという事態は既に起こっていて、今眼前にあるのは閉まった雨戸である。すなわち、閉まった結果の状態が現在まで持続している。ここにおいて、「閉まる」は、主体（「雨戸」）に状態変化が生じて、その変化の結果が残ることを表す変化動詞である。三原健一（1997）は、これを「結果動詞」とも言う。

③ 過去の繰り返し過程の中にあるすがた

- (3) 1950年ごろ、5メートル望遠鏡による新しい観測事実が次々と現れていた。
(高橋太郎他 (2005 : 88))

これは、一つ一つの運動は個別化されず、それらを合わせて＜そういう運動を繰り返すという状態を続ける＞という過程の中にあることを表している（高橋太郎他（2005：88））。これは、「反復」や「繰り返し」の意味であるとも言える。

④ パーフェクトの用法その一：ある局面の完成後に次の局面の中にあるすがた

(4) ずいぶん急いだのだが、会場についたのは5時であった。研究会が閉じていた。
雑談が始まっていた。(高橋太郎他 (2005 : 88))

ここでは、「閉じる」(または「始まる」)という変化の局面が基準時間(会場についた5時)よりまえに完成したことと、その場の状況が基準時間においてそうした変化の結果の局面の中にあることが、合わせて表されている(高橋太郎他 (2005 : 89))。

⑤パーフェクトの用法その二：以前の動作や出来事を経歴・記録として表すがた

(5) ゆみえは、3年前の5月13日に1度離婚していた。
(高橋太郎他 (2005 : 88))

この文は、以前にある出来事があったことと、その後そのことが主体の特徴になっていることの二つを述べている(高橋太郎他 (2005 : 90))。つまりそれは、基準時点より過去の事態が何らかの効果を基準時点(過去)まで維持しているということを表している。④と⑤は、一つにまとめて、「過去パーフェクト」を意味するとも言う¹。

そして、①の過去における動作の持続、および②の過去における変化の結果の持続は、一定の種類動詞を要求するのに対し、③の反復、および④と⑤の過去パーフェクトは、動詞のタイプを選ばない。

このように、テンスの要素を除けばテイタのアスペクト的意味は、「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「反復・繰り返し」、「パーフェクト」に分けることができる。

10.2.2 「状態の変化の結果」について

続いて、許夏珮(2005)の言う「状態の変化の結果」の意味を表すテイタを検討したい。たとえば、以下の例を見られたい。

¹ 工藤真由美(1995 : 97-98)は、以下の例を用いて、未来パーフェクト、現在パーフェクト、過去パーフェクトを説明している。

<未来パーフェクト>

(1) あなたが家庭をもつ頃には、私はもうとっくに死んでいるわよ。

<現在パーフェクト>

(2) 私の父は、癌で、もう死んでいます。

<過去パーフェクト>

(3) 私が帰郷した時には、父は既に3時間前に死んでいた。

(6) きのうち多摩川に遊びに行った。忘れ物をしたので、一度家に帰り、また多摩川へ戻ってみると川の水位が上がっていた。(許夏珮 (2005 : 104))

(7) 三年ぶりに姉の子供に会ったら、見違えるほど大きくなっていた。(許夏珮 (2005 : 112))

許夏珮 (2005) によれば、上の二つの例の下線部は、「状態の変化の結果」を表している。許夏珮 (2005) は、変化後の状態を示すテイタを、「結果の状態」(注：本稿では、テイタの「変化の結果の持続」と呼ぶ)を意味するものと、「状態の変化の結果」を意味するものに分けている。「それは、「消える」「始まる」のような動詞と「上がる」「大きくなる」のような動詞が、絶対的な限界を示すか相対的な限界を示すかで異なるためである。絶対的な限界を示す「消える」「始まる」などは限界に到達すれば、それ以上状態は変化しない。それに対し、相対的な限界を示す「上がる」「大きくなる」などは、その都度限界が存在しており、その限界は更なる限界に比べれば相対的なものに過ぎない」(許夏珮 (2005 : 104))。ここにテイルとテイタの一つの区別が見られる。つまり、テイルの場合は、絶対的な限界動詞(例：電気が消えている)と結びつく場合も、相対的な限界動詞(例：温度が38度まで上がっている)と結びつく場合も、同様に「結果の状態」を意味するものとして扱われるのである。

なるほど、(7)の「大きくなっていた」については、「大きくなった」という状態の変化の結果が残っているために「大きくなっていた」になるものと理解できるが、それは、より詳しく言えば、「状態の変化の結果の状態」と理解しても差支えないと本稿は考える。すなわち、「なる」という動詞には「状態の変化」の意味が含まれているため、「なった」は、「状態の変化の結果」を意味すると言える。これがさらに、「なっていた」になると、「状態の変化の結果の状態」を意味すると理解できるわけである。要するに、許夏珮 (2005) のいう「状態の変化の結果」という用法は不要であると考えられる。

10.2.3 状態の持続

前章では、小説の調査を糸口に、テイタの表すアスペクト的意味として「状態の持

続」を導入した。「状態の持続」は、森山卓郎（1986）の言う「維持の状態」に相当し、森山卓郎（1986）の時定項分析が有効で、「座る」「立つ」以外にも多数の動詞がこのアスペクト的意味をもち得ることが明らかになった。そこで、本章でも「状態の持続」をテイタのアスペクト的意味と認めることとする。例えば、以下の用例である。

(8) と言って立ち上がると、勘定場の方へ行った。その間、杏子は勘定をすませて梶が戻って来るまで動かないで、同じ席に坐っていた。 (『あした来る人』)

(9) こんどは、はっきりと克平の声であることが判った。杏子は、すぐには出て行けない気持で、部屋に立っていた。 (同上)

例(8)では、主体はもともと「坐っている」状態なので、「動かないで、同じ席に坐っていた」というのは、「座っている」という状態の持続を表すと理解できよう。また、(9)も、「立つ」には動作の意味が見られず、ただ「立っている」という状態の維持を意味するものと考えられる。

10.2.4 単なる心理状態

次に、「思う」「考える」などの内的情態動詞について検討したい。

森山卓郎（1986）の時定項に従えば、ab、a(b)（愛する、憧れる、疑う、怒る、思う、悲しむ、心配する、楽しむ、務める、怠ける、悩む、憎む、喜ぶ）、se（諦める、覚える、忘れる）に属し、アスペクト的意味から見れば、動作の持続（ab、a(b)）や変化の結果の持続（se）になる。

一方、三原健一（1997）は、以下の例をあげ、これらのアスペクト的意味を「状態持続」と認めている。

(10) 太郎が結婚問題で悩んでいる。 (三原健一(1997:115))

(11) 花子が大家を恨んでいる。 (同上)

(12) 僕は以前からそう思っている。 (同上)

(13) 太郎は就職のことを考えている。 (同上)

(14) 私は生まれてからずっと大阪に住んでいる。 (同上)

(15) もう長い間ステーキを食べていない。 (同上)

つまり、心理動詞 ((10)、(11)) や認識動詞 ((12)、(13))、テイル形になり得る状態動詞 ((14))、あるいは、動作動詞が「テイナイ」という形で否定形になることにより状態化した動詞 ((15) などが、この類型を構成する (三原健一 (1997 : 114))。

これらのアスペクト的意味を検討する前に、まず動詞の語彙的意味を見てみよう。工藤真由美 (1995) は、「アスペクトは、動詞の語彙的意味と直接的に相関している。従って、動詞分類が重要な意味を持つ。」(工藤真由美 (1995 : 44)) と主張し、奥田靖雄 (1977) の見解に従って、精密に動詞を分類している。工藤真由美 (1995 : 73-78) は、アスペクト対立の有無の観点から、動詞を大きく外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞の 3 種類に分けている。これに、アスペクト対立の状況と動詞の語彙的意味の分類を合わせて表にすると、以下のようになる。

表 2 動詞の分類 (工藤真由美 (1995 : 45、73-78) を整理したもの)

| | |
|---------------------------------|---|
| A 外的運動動詞 (アスペクト対立 有) | A1 主体動作・客体変化動詞<内的限界動詞> A2 主体変化動詞<内的限界動詞> A3 主体動作動詞<非内的限界動詞> |
| B 内的情態動詞 (アスペクト対立の部分 的変容) | B1 思考動詞 B2 感情動詞 B3 知覚動詞 B4 感覚動詞 |
| C 静態動詞 (アスペクト対立 無) | C1 存在動詞 C2 空間的配置動詞 C3 関係動詞 C4 特性動詞 |

三原健一 (1997) が述べている心理動詞「悩む」「恨む」は、内的情態動詞の B2 感情動詞に、また、認識動詞は、内的情態動詞の B1 思考動詞にそれぞれ相当する。

これに関して、工藤真由美 (1995 : 94) は、「内的情態動詞は、アスペクト対立のある外的運動動詞と、アスペクト対立のない静態動詞の中間的なものである」と指摘し

ている。また「内的活動・状態であるがゆえに、直接把握できるのは話し手のみである。このような特徴のために、人称性・ムード性の違いが絡み合ってきて、スルーシテイルが、＜完成性＞か＜継続性＞かの典型的なアスペクト対立を形成しないと思われる。」(工藤真由美(1995:92))と述べている。

国立国語研究所(1985:64)は、「「思う」「考える」などは、テンスのうえでも特殊であるが、アスペクトのうえでも特殊である。」としている。

高橋太郎(2003:91)は、「思う」「感じる」「信じる」「気になる」などの動詞が表す内容は、心の動きだという。それによると、こうした動詞は、内的ではあるが、運動的要素をもっており、またその運動が終わったあとの主体の状態に無関心であるので、動作動詞であると言える。さらに、「これらの動詞はアスペクト的な性格を失っている」ということも、そこでは指摘されている。

まとめると、心理動詞や思考動詞などは、心の動きを表すという点で、動作動詞であると言える。そして、多くの先行研究によれば、このような動詞は、典型的なアスペクトを形成しないとされている。一方、前述したように、三原健一(1997)は、これらの動詞にテイルが後接する場合について、「状態持続」という一種のアスペクト的意味を認めている。

本章は、「思う」と「思っている」、「思った」と「思っていた」のようなスルーシテイル、シターシテイタは、＜完成性＞か＜継続性＞かの典型的なアスペクト対立を形成しないと考えているが、それは決して、各々の表現にアスペクト的意味がないということではない。

(16) 喜助は、竹細工をしながら、昼も夜も玉枝のことばかり考えた。

(『越前竹人形』)

(17) 時雄は机の上に一通の封書を展いて、深くそのことを考えていた。(『蒲団』)

(18) なんという憎らしいことをいう夫だろうと、八千代は思った。

(『あした来る人』)

(19) 口ではそんな風に言ったが、しかし、八千代はこれで助かったと思っていた。

(同上)

テイル、テイタの意味だけに注目するならば、上記の動詞にテイルが後接する場合

について、三原健一（1997）が統一的に「状態持続」のアスペクト的意味をもつと見なしていることは理にかなっている。一方、本稿は、これらの動詞にテイタが後接する場合は、さらに意味が分化すると考える。たとえば、

（20）前まで大人ニキビに悩んでいました。脂っこい物を食べると翌日には口の周りにポツリ。それで、自宅での料理にはサラダ油等は使わずに、すべてオリーブオイルを使ったところ、大人ニキビがまったくできなくなりました。

（http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1336602513 2012年12月17日検索）

ここでは、「悩む」という状態が過去の長い時間にわたって持続していたという意味が読み取れる一方、「大人ニキビに悩んだことがある」のように、過去に一定の経歴がある、という意味をも同時に読みとることができる。「悩む」のほかには、「苦しむ」「後悔する」なども挙げられる。

つまり、「悩む」「恨む」などの感情動詞は、テイタがつくと、状態の持続の意味と、一種の経歴、経験としてあとまで残る「パーフェクト」の意味の両方をもち得るのに対し、「思う」「考える」などからは「過去パーフェクト」の意味を読みとることができないので、同じく「内的情態動詞」であるが、そのアスペクト的意味は相違する可能性がある。詳細な検討は今後の課題に譲るが、ここでは、内的情態動詞はテイタがつく場合、心理活動を述べる「単なる心理状態」を意味するものと考えたい。

10.2.5 「途切れ」について

第五章で「途切れ」と江田（2013）の「完了」とを検討したとき、次の例文を挙げた。

（21）科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた。ところが驚いたことには、1988年暮れ、アメリカの物理学者（中略）が驚異的な説を発表した。

（江田（2013：141））

この例は、「アメリカの物理学者が驚異的な説を発表した」ことがテイタ節の変化の原因を示し、このことによって、「科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた」ことが変化し、「過去への旅は夢物語だ」とは思われなくなったということが述べられている。つまり、外的出来事によって、テイタ節の持続していた状態が途切れ、後続の状態になったということである。そうでなければ（このような外的出来事が起こらなければ）、「過去への旅は夢物語だと思われてい」たはずである。江田（2013）はこのテイタを「完了」の意味として捉えているが、本稿はこのテイタを「途切れ」の意味として捉えることができると考える²。

また、会話文の中に、このような例がある。

(22) 「驚きましたな。まだ他にありますか、カジカは貴方一人かと思っていた！」

（『あした来る人』）

(23) 「私は殉死という言葉を殆んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たような心持がしたのです。（『ころ』）」

例（22）の場合、「驚きましたな。まだ他にありますか」と認識したことによって、「カジカは貴方一人かと思っていた」ということが中断され、「カジカは貴方一人かと思われなくなる。また、例（23）の場合、「殉死という言葉」は、「妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時点で、「殉死という言葉を殆んど忘れていました」ことが途切れると考える。本章は、以上のような文を主節の途切れの用法と認め、テイタのアスペクト的意味として調査を進める。

²本稿は、連体修飾節におけるテイタの特徴として「途切れ」を挙げているが、主節の場合は、例（21）のように、連文的角度から、主節の状態変化が見られ、「途切れ」と解釈できる場合がある。本稿は、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の調査と対照的に見るように、主節の「途切れ」をテイタのアスペクト的意味として調査を入れている。しかし、後の調査結果からもわかるように、主節のテイタが「途切れ」を表す例が少ないため、主節のテイタが「途切れ」を表す場合の連文的条件は本稿は追究していない。これを今後の課題とする。

10.2.6 まとめ

以上のテイタの aspekts 的意味を整理すると、「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「状態の持続」、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」、「単なる心理状態」、「途切れ」の七種類に分けることができる。

しかし、実際にテイタの aspekts 的意味がどのように用いられるのかについては、先行研究ではまだ十分に考察されていない。そこで、本章は、文末におけるテイタの aspekts 的意味の実際の使用率を見るため、中日対訳コーパスを使用して、『あした来る人』、『ノルウェイの森』という小説を題材に調査を実施することとした。

10.3 小説に出現するテイタの aspekts 的意味の調査

10.3.1 調査対象

本章では、『あした来る人』と『ノルウェイの森』という二つの小説を対象に、文末に現れるテイタの aspekts 的意味の調査を実施した。より具体的には、「テイタ。」の形式を主な調査対象としつつ、終助詞「よ、ね、よね、わ、わね、な、か、かな」を伴う例文も調査対象とした。ただし、以下のような例文は除外した。(波線は意味に影響を与える文脈要素を示す)

一つ目は、文末にノダがついた文は、「ていたのだ(った)」のようにダブルテンスになること、まだ、ノダが動詞の aspekts 的意味に影響を与えるかどうか不明であることから、今回の調査の対象外とした。

(24) 克平がもしそのまま何年も帰って来なかったら—そう思っただけで悲しさがあふれて来ていたのだ。 (『あした来る人』)

(25) 世の中には、こうしたことはざらにあるが、しかし、大貫夫妻の間に限って、かかることはあり得ないと思っていたのだ。 (同上)

二つ目は、複合動詞の場合である。

(26) 曾根二郎は汗だくになって西銀座の通りを歩いていた。ふいてもふいても、汗は顔からも、首すじからも吹き出していた。 (『あした来る人』)

(27) 梶は戸外から店内へと視線を移して言った。子犬がくさりをつけたまま、梶の足許を歩き回っていた。 (同上)

たとえば、例 (27) の場合、「歩き回っていた」は、前項動詞「歩く」という動作の持続と見るか、あるいは後項動詞「回る」という動作の反復・繰り返しとみるか、判断しにくい。これらのような複合動詞においては、前項動詞の意味と後項動詞の意味とが絡み合っているので、今回は複合動詞全般を扱わないことにした。

また、以下のように、動詞の受身形と使役形にテイタがついた場合、テイタのアスペクトの意味が判断しにくいものが多く、今回扱わないことにした。

(28) 山名杏子はそう言ってから、自分でも変なことを言ったと思った。そして異性に甘えることの快さが、生れて初めて彼女の心をしびれさせていた。 (『あした来る人』)

(29) 杏子は三沢とアルさんの間にはさままれていた。女店員二人と克平はそれぞれ隔てられて離れた場所に立っていた。 (同上)

さらに、次のような文脈不明な文も対象外とした。

(30) 「売っていた。どんなところか行ってみよう」 (同上)

(31) 「そんなになっていたかな」 (同上)

分析の対象として用いられる例文は、全て北京日本語学研究センター『中日対訳コーパス』(2003 第一版) の日本語の文学作品である『あした来る人』、『ノルウェイの森』からのものである。

10.3.2 調査方法

まず、『あした来る人』と『ノルウェイの森』の二部小説を対象に、「ていた」「でいた」「でた」「てた」「ていました」「でいました」「てました」「でました」の8項目を

検索し、合計 1542 例を集めた。そこから前述した対象外とした例文などを除外した結果として、条件に合致するものは合計 778 例であった。表 3 に数字を示す。

表 3 テイタの各形式の語例数

| | ていた | でいた | てた | でた | でいました | ていました | てました | でました | 合計 |
|----|-----|-----|----|----|-------|-------|------|------|-----|
| 語例 | 688 | 58 | 16 | 0 | 0 | 14 | 2 | 0 | 778 |

例文を見ると判断に迷うところも多いが、この調査を通して判明したその使用率から、テイタの意味が小説の中でどのように用いられているのかについての一定の傾向が読みとれるのではないかと思われる。

この 778 例を逐一チェックしたところ、以下のことが判明した。以下の例文は全て『あした来る人』と『ノルウェイの森』からのものである。(あ) は、『あした来る人』の略で、(ノ) は『ノルウェイの森』の略とする(以下同)。具体的な例文を見られたい。

10.3.3 小説に出ているテイタのアスペクト的意味

10.3.3.1 動作の持続

(32) 自動車は京浜国道を走っていた。窓から入ってくる風は冷かった。(あ)

(33) 彼はしばらく黙って食事をしていた。(ノ)

10.3.3.2 変化の結果の持続

(34) 「その男が、つい先刻まで来ていた。」(あ)

(35) カラスの群れが西の方からやってきて小田急デパートの上を越えていった。もう夜はすっかり明けていた。(ノ)

10.3.3.3 状態の持続

(36) 杏子は息を詰めて、じっと立っていた。彼女がむかい合って立っているのは克平ではなかった。 (あ)

(37) 何のことかよくわからなかったので僕は黙っていた。彼もしばらく黙っていた。 (ノ)

10.3.3.4 単なる心理状態

(38) 母も、姉も、杏子などの知らないところに女としてのよろこびを持っているかも知れなかったが、しかし杏子は自分だけの生き方をしてみようと思っていた。 (あ)

(39) 僕はそんな無茶苦茶な唄を聴きながら、もしガソリン・スタンドに引火したら、この家も吹きとんじゃうだろうなというようなことを考えていた。 (ノ)

10.3.3.5 途切れ

(40) 「それはいかん! どうしているでしょうな、奥さんは一。実は僕は大阪から御一緒だったんです。品川でお別れしたんですが、もちろんお家へいらしたと思っていましたよ」 (あ)

(41) 「あなた意外にいろんなこと知らないのね」と緑は言った。「ワタナベ君って、世の中のことはたいてい知ってるのかと思ってたわ」 (ノ)

10.3.3.6 パーフェクト

(42) 曾根はぎっしり詰って重そうなリュックを、右肩を少し上げて背負い、車の動揺に時々身体をふらつかせながら、幾つもの車輛を通り抜けて行った。食堂車には客が八分通り詰っていた。曾根は入口でゆっくりと内部を見渡した。 (あ)

(43) 四月六日に緑から手紙が来た。四月十日に課目登録があるから、その日に大学の中庭で待ちあわせて一緒にお昼ごはんを食べないかと彼女は書いていた。 (ノ)

しかし、パーフェクトであるか否かが曖昧なものもある。動詞「言う」がその一例である。

(44) 「春、一度上京したいと言っていた。」 (あ)

(45) 直子は少し赤くなって、にっこり微笑んだ。「キズキ君もそう言ってたわ」 (ノ)

許夏珮 (2005) では、「言っていた」が使用されるのは、発見的な意味を含むムード的な要素が関わっているからではないかと考えられているが、このような例文は、「言ったことがある、言ったことを記憶から取り出して改めて取り上げる」という「記録」の意味で使われており、「パーフェクト」と理解できるのではないかと本稿は考える。

10.3.3.7 反復・繰り返し

(46) 梶は一日に一回鼻の治療をしていた。治療というと大げさだが、スポイト様のもので、鼻孔に薬品の霧を吹き込むだけのことである。 (あ)

(47) 僕は肯いた。レイコさんはむずかしいパッセージを何度も何度もくりかえして練習していた。 (ノ)

10.3.4 調査結果

まず、主節におけるテイタの7種類の意味に、次のように①～⑦まで番号をつける。
①「動作の持続」②「変化の結果の持続」③「状態の持続」④「単なる心理状態」⑤「途切れ」⑥「パーフェクト」⑦「反復・繰り返し」。以上の分類に属さず、今の段階では分類されていないもの、または、判断しにくいものを⑧「他」とする。

上述のテイタのアスペクト的意味に基づき、各用法を確認して、テイタの各種の意味の使用数と使用率を次の表4にまとめた。

表4に示されるように、①「動作の持続」(30.3%)の使用率が一番高い。③「状態の持続」(25.4%)と②「変化の結果の持続」(20.1%)が続き、さらに、「単なる心理状態」(7.3%)、「パーフェクト」(6.3%)などが続く。また、主節におけるテイタの「途切れ」の使用数(4例)が少なく、0.5%しか占めておらず、ほぼ会話文に使われ

ている。

表4 主節におけるテイタの意味の使用数と使用率

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | 合計 |
|--------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| (あ) 語例 | 55 | 54 | 92 | 32 | 2 | 35 | 11 | 21 | 302 |
| (ノ) 語例 | 181 | 102 | 106 | 25 | 2 | 14 | 26 | 20 | 476 |
| 合計 | 236 | 156 | 198 | 57 | 4 | 49 | 37 | 41 | 778 |
| 使用率(%) | 30.3 | 20.1 | 25.4 | 7.3 | 0.5 | 6.3 | 4.8 | 5.3 | 100 |

また、小説作品により、主節のテイタの意味の傾向に違いが見られる。『あした来る人』の場合は、「状態の持続」の意味の使用数が圧倒的多く（92例）、「動作の持続」（55例）、「変化の結果の持続」（54例）がそれに続き、さらに「パーフェクト」（35例）と「単なる心理状態」（32例）が続く。一方、『ノルウェイの森』の場合、「動作の持続」（181例）が一番多く、「状態の持続」（106例）、「変化の結果の持続」（102例）が続く。その一方、「パーフェクト」（26例）と「単なる心理状態」（25例）という意味の使用数が少ない。

日本語教育の現場では、「ている」と「ていた」という二つの形式が統一的にテイルという形で表記され、「動作の進行」と「結果の残存」をテイルの主な二つのアスペクト的意味として学習者に教えている。この二つの意味がわかりやすいことは確かだが、実際の例文を見ると、判断に迷うところが多い。今回の調査結果を見ると、テイタには、「動作の持続」（上述の「動作の進行」の意味に類似）と「変化の結果の持続」（上述の「結果の残存」の意味に類似）の二つの意味があるが、使用率から見れば、テイタは、「状態の持続」の意味でも負けず劣らずよく使われていることがわかる。したがって、日本語教育の現場では「状態の持続」の意味もまた、「動作の進行」や「結果の残存」と同様に重要視されるべきではないかと思われる。

また、⑧「以上の7種類の意味に含まれないもの」の例文が41例にも達しているが、これらのテイタのアスペクト的意味はまだ解明されていない。テイタのアスペクト的意味については、まだ研究の余地がある³と言えよう。

³ どうしてもうまく理解できず、適切な扱いがわからない文が多くあることも否定できない。たとえば、以下の用例が挙げられる。

10.3.5 まとめ

以上、小説に出てくるテイタの意味を調査し、テイタがどのように使われているかを見た。よく知られている「動作の進行」(本稿における「動作の継続」)と「結果の残存」(本稿における「変化の結果の持続」)の意味に加え、「状態の持続」の意味もよく使われていることが判明した。

10.4 文脈からの影響

山田小枝(1984:148)は、「ふつうは、動詞のアスペクト意味が文脈の中で他の要素と相互干渉を起こし、そこから文アスペクトが定まると考えられている」と述べている。

また、伊坂淳一(1997:133)も、「文中や文脈に付加的な要素が加わると、他方の意味になることがある」と述べている。たとえば、「登ル」は、主体動き動詞で、「落ちル」は、主体変化動詞である。

(48) a 太郎ははしごを登っている。(進行) (伊坂淳一(1997:133))

(1) これは、地方で百貨店を営んでいる青年で、なかなかやり手だが、金がつまっているので、梶に一枚加わってもらい、梶の顔で他から金を引き出そうという虫のいい了見をもっていた。(あ)

「了見をもっていた」は、「単なる心理状態」と見るべきか、「状態の持続」と見るべきか、判断に迷っている。また、以下のように、「聞こえていた」や「見えていた」の用例が多く使われるが、その意味は判断しにくい。

(2) 克平が乗っている飛行機であるかどうか判らなかつたが、とにかく、彼女は飛行機が定時に出発したのもとして、その時刻に聞こえて来た爆音を克平たちの飛行機のそれとして聞いたのであった。その爆音が、そのまま、まだ杏子の耳には聞こえていた。(あ)

(3) 彼だけが構わない服装をしていた。ワイシャツも他の人ほど白く光っていなかつたが、そんなところが、ふしぎに少しも彼を不潔には見せていなかつた。曾根は多少場違いの感はあつたが、落ち着いて見えていた。(あ)

さらに、テイタのアスペクト的意味が判断しにくい例は、以下のように挙げられる。

(4) 彼女が先に立ち、僕がその少しうしろを歩いた。直子はいろんなかたちの髪どめを持っていて、いつも右側の耳を見せていた。(ノ)

(5) 人々を率いて楽天的にどンドン前に進んで行きながら、その心は孤独に陰鬱な泥沼の底でたうっていた。(ノ)

(6) いずれにせよ門番の言うとおりに良い天気だった。空は抜けるように青く、細くかすれた雲がまるでペンキのためし塗りでもしたみたいに天頂にすうっと白くこびりついてた。(ノ)

(7) 温かく親密で、そこには演奏する喜びのようなものが充ちていた。(ノ)

- b 太郎は台の上に登っている。(結果) (同上)
- (49) a 木の葉がひらひらと落ちている。(進行) (同上)
- b 木の葉が庭一面に落ちている。(結果) (同上)

以上の二つの例は、動作動詞であれ、変化動詞であれ、文中や文脈に条件が加わると、テイルの意味が変わることを示していると言えよう。

文脈からの影響については、藤井正(1976)、高橋太郎他(2005)、工藤真由美(1995)、三原健一(1997)、吉川武時(1976)などの先行研究でも触れられている。本稿でテイタの意味を考察するなかでも、こうした文脈の重要さは明らかになってくる。たとえば、「立つ」を例にすると、

- (50) 梶大助は先きに来てそこに立っていた。手には何も持っていなかった。 (あ)
- (51) 杏子は、しかし、妙に部屋へは行って行けない気持で、なおもそこに立っていた。
(同上)
- (52) 振り返ると、大学の工学部の教授の三村明が立っていた。 (同上)

(50) の「立っていた」は、「立つ」という変化が起きたあとに残されている「変化の結果の持続」を表す一方、(51) では、杏子は、「立っていた」の前にもずっと「立つ」という状態を維持しており、それは、単なる状態の維持、「状態の持続」の意味を表している。ここで「なおも」が付け加わっていることは、この意味を補強していると思われる。さらに、(52) は、「振り返ると」によって、「立つ」がすでに完了し、その効力が「振り返る」まで続いていたという「パーフェクト」の意味を表している。以上からも、文脈がどのように動詞の意味に影響を与えるのかを窺うことができよう。

10.5 まとめ

本章ではまず、先行研究を踏まえて、テイタのアスペクト的意味を改めて整理し、それを「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「状態の持続」、「単なる心理状態」、「途切れ」、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」の7種類に分類した。そして、『あした来る人』と『ノルウェイの森』を調査対象に、以上述べた7種類のテイタのアスペクト

的意味のそれぞれの使用率を調査した。その結果、よく知られている「動作の進行」（本稿では「動作の継続」という）と「結果の残存」（本稿では「変化の結果の持続」という）の意味に加え、テイタが「状態の持続」の意味でもよく使われていることが明らかになった。また、文脈が文の理解にとって不可欠であることも判明した。

11 連体修飾節におけるテイタの aspektoic 意味の調査

第三章と第四章では、連体修飾節のテイタの「途切れ」の意味に着目し、非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節のテイタの aspektoic 意味を考察した。以下では、例を挙げながら、連体修飾節におけるテイタの aspektoic 意味を整理する。そして、これらの意味が小説の中に占める比率を、小説の調査データに基づいて確認する。

11.1 aspektoic 意味

11.1.1 動作の持続

(1) 裏の井戸端で顔を洗っていた十二、三の少年に、杏子はどれが鹿島槍かきいてみた。

(『あした来る人』)

(2) 正直なところ、そのときの僕には風景なんてどうでもいいようなものだったのだ。僕は僕自身のことを考え、そのときとなりを並んで歩いていた一人の美しい女のことを考え、僕と彼女とのことを考え、そしてまた僕自身のことを考えた。

(『ノルウェイの森』)

例(1)の下線部は、杏子が少年に質問した時点では、少年は顔を「洗っている」という状態にあったことを意味していると考えられる。また、例(2)では、過去の「そのとき」の時点において、「一人の美しい女」の歩くという動作が持続している状態にあったと考えられる。

11.1.2 変化の結果の持続

(3) 今朝、九一色病院へ行きがけに雑貨屋へお礼に寄ると、昨日のお昼すぎに矢須子さんが黒田病院から出て来るのを見かけたと親爺さんが云う。すると店に来ていた吉村屋の小母はんが、「そう云えば、あたしも見ましたけん。黄色いパラソルでしょうが。大村医院に入って行かるところを見ましたけん」と云う。黄色いパラソルの娘なら、この村では矢須子さんより他にない。吉村屋の小母さんは二時半ごろパラソ

ルを見たと言い、雑貨屋の親爺さんは一時ごろ見たと云う。 (『黒い雨』)

例 (3) では、「来ていた」は、「小母はん」が「店に来る」という変化が起こった後、その変化の結果の状態が持続している、つまり、今もその店にいるという変化の結果の持続¹を表している。また、次は、二通りの解釈ができる例である。

(4) その見えざる海も、志楽村のうしろに聳える青葉山頂からはよく見えた。私が青葉山に登ったのは二度である。二度目のとき、私たちは折しも舞鶴軍港に入っていた聯合艦隊を見たのだった。 (『金閣寺』)

聯合艦隊が舞鶴軍港に入るには時間がかかるので、下線部は、「動作の持続」を表しているとも考えることもできる。一方、聯合艦隊が舞鶴軍港にすでに入った、その変化の結果がまだ持続していると解釈すれば、それは、「変化の結果の継続」を表しているとみなすことも可能である。

11.1.3 状態の持続

(5) 多摩川の長い鉄橋をわたると、人家がすくなくなり、稲田や芋畑が見えて来た。窓ぎわに坐っていた登美子が男の肩に自分の肩を寄せて来て、まじめな口調で言った。 (『青春の蹉跎』)

(6) 女たちと一緒に立っていたアルさんは言った。 (『あした来る人』)

(5) は、「坐っていた」という状態への変化が見られない一方、「坐る」という動作自体が行われているともいえないため、この場合の「坐る」は、状態の持続の意味を表していると考えられる。また、(6) の「立つ」には動作の意味が見られず、ただ「立っていた」という状態の維持を意味するものと考えられる。

¹ただし、ここで連体修飾節の動詞をテイルに置き換えることができるかどうか、また、置き換えた意味がどう変わるかについては、確定的なことは言えない。

11.1.4 単なる心理状態

(7) 私はその決心で遣り出した。そうして忽ち動けなくなった。今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけは略出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。 (『ころ』)

(8) 学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜こんでくれる父の前に恐縮した。 (同上)

「考える」は、「私」の心理活動であり、「考えていた」は単なる心理状態と考える。

11.1.5 途切れ

(9) 僕はどうしたらいいか処置に迷った。それで富士田工場長と相談していると、何かの用事で外出していた守衛が帰って来て、川原の至るところに火葬の煙が上っていると云った。火葬場が立てこんで、順番を待つ余地がないそうだ。 (『黒い雨』)

(10) 趙州はたちまち、はいていた履を脱いで、頭の上のにのせて、出て行った。 (『鼻』)

例(9)の場合は、連体修飾節テイタが「途切れ」の意味を表し、「[守備が] 外出していた」状態が途切れ、状態変化し、「[守備が] 帰ってきた」という新しい状態が生じたということである。一方、例(10)の場合、「履」は、主節の動作「脱ぐ」によって連体修飾節の「はいていた」状態に変化をもたらし、「はいていた」が途切れる。

11.1.6 パーフェクト

(11) 「ピアノはレイコさんに教わってるの」と直子は言った。「彼女は他にギターも教えてるのよ。私たちみんな生徒になったり先生になったりするの。フランス語に堪能な人はフランス語教えるし、社会科の先生してた人は歴史を教えるし、編物の上手な人は編物を教えるし、そういつのだけでもちょっとした学校みたいになっちゃうのよ。残念ながら私には他人に教えてあげられるようなものは何もないけれど」

(『ノルウェイの森』)

(12) 老師の叱責は忽ち洩れて、寺の人々の私に対する態度は日ましに険しくなった。
私の大学進学を嫉んでいた例の徒弟は、いつも勝ち誇った薄ら笑いで私を眺めた。

(『金閣寺』)

例(11)の場合、「社会科の先生してた人」は、「社会科の先生をしたことがある人」、つまりは「社会科の先生をした経歴がある人」を意味するものと考えられる²。また、例(12)のような内的状態動詞にもこれと同じ用法が観察された。これは、「わたし」の印象に残された「記録」として、「例の徒弟」が「わたし」を嫉んでいた、ということの意味するものと解釈できる³。

(13) そこへ娘たちが、にぎやかに笑いさざめきながら近づいてきた。娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした。それを岩陰から眺めていた人魚姫は、取り残されたような思いで悲しくなった。王子が娘たちの手で白い寺院の中に運びこまれてしまうと、姫はしょんぼりして海の底のお城へもどっていった。

(『本当は恐ろしいグリム童話』)

「人魚姫」は、「娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした」ことを「岩陰から眺め」た後、つまり、「眺める」という動作が完了した後、「取り残されたような思いで悲しくなった」わけで、ここでも、前の事態の効力ゆえに、主節の事態に至ったものと見ることができる。連体修飾節のテイタがパーフェクトの意味を表している。

11.1.7 反復・繰り返し

² さらに、中日対訳コーパスの中国語訳も傍証できる。中国語訳は、以下のようなになる。“钢琴由玲子姐教，”直子说，“此外她还教吉他。我们都互相当学生当老师。擅长法语的教法语，做过社会科教师的教历史，织东西高明的教编织。只就这点来说，差不多成了一所学校。遗憾的是我没一样东西可教别人。”

つまり、中国語に訳されると、「経験・経歴」を表す「过」になっている。

³ 中国語の翻訳でも傍証できる。中国語に訳されると、次のようになる。

受老师斥责的消息泄露出去后，使我在寺院里的处境越发艰难。升入大学时曾嫉妒过我的那个徒弟，总是用胜利者的一种浅笑望着我。

つまり、中国語では「経験・経歴」を表す「过」が用いられているのである。

(14) すると、医者の内弟子で薬局、拭掃除もすれば惣菜島の芋も掘る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯の熊蔵という、その頃二十四五歳、稀塩酸に単舎利別を混ぜたのを瓶に盗んで、内が吝嗇じゃから見附かると叱られる、これを股引や袴と一所に戸棚の上に載せて置いて、隙さえあればちびりちびりと飲んでた男が、庭掃除をすると言って、件の蜂の巣を見つけたッけ。 (『高野聖』)

ここでは、連体修飾節は、「男」がどのような人であることを説明している。「隙さえあればちびりちびりと飲んでた」は、一種の生活習慣として捉えることができる。つまり、「隙さえあれば飲む」は、「飲む」という動作が繰り返されることを示すために使われている。

以上、「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「状態の持続」、「単なる心理状態」、「途切れ」、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」といった7種類の連体修飾節におけるテイタの意味・用法を確認・整理した。次に、これらの用法の使用率を見ていきたい。

11.2 調査

11.2.1 調査目的と調査対象

調査は、以上で述べてきた「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「状態の持続」、「単なる心理状態」、「途切れ」、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」といった連体修飾節における7種類のテイタのアスペクト的意味が実際にどのように用いられているのか、具体的な使用率を見ることを目的とする。

ここでは、北京日本語学研究センター『中日対訳コーパス』(2003 第一版)に収録された22部の日本語の文学作品(『あした来る人』、『坊ちゃん』、『こころ』、『越前竹人形』、『蒲団』、『雁の寺』、『破戒』、『鼻』、『羅生門』、『高野聖』、『金閣寺』、『黒い雨』、『野火』、『ノルウェイの森』、『青春の蹉跎』、『飼育』、『死者の奢り』、『砂の女』、『斜陽』、『痴人の愛』、『友情』、『雪国』)を調査対象とし、修飾節における「ていた」「で

いた」「でた」「てた」「ていました」⁴「でいました」「てました」「でました」の8つを抜き出して調査した。ただし、以下のような例文は除外した。たとえば、動詞の受身形や使役形にテイタについての連体修飾節の場合、そのアスペクト的意味が判断しにくいものが多い⁵、誤差が生じやすいと考えるため、今回対象外とした。

(15) 隣組で一ばん博識の学者として、また用意周到な人として立てられていた誇の高いこの人と、こんな間の悪い別れかたをするとは妙な成りゆきであった。

(『黒い雨』)

(16) そんなに陽当りはわるくはないのだけれども、細工師の消えた氏家の藪は雑草のしげるにまかせているため、整然と区劃されて、まるで絨氈でも敷いたみたいに美しく掃かれていたメダケ、クロチク、モウソウ、イヨダケ、ハチクなどの藪には、昔日の面影はない。

(『越前竹人形』)

(17) 担架に乗せられていた仲三さんは、救護班の仮本部へ着いたときには死んでいた。

(『黒い雨』)

(18) 名誉総代にもなっていたから、和尚がこうして奥の間にさっさと通っても不思議ではないのだが、折から、枕元に坐っていた弟子たちの中で、病人の口もとを水綿でしめらせていた兄弟子の笹井南窓が、ちょっと気に病んだ。縁起でもないと思ったのである。

(『雁の寺』)

また、以下のような複合動詞の場合も、前項動詞の意味と後項動詞の意味とが絡み合っている。すでに10章で述べたように、そのアスペクト的意味が判断しにくいものが多い、誤差を避けるために、今回扱わないことにした⁶。

⁴ 「ていました」「でいました」「てました」「でました」の四つは、連体修飾節に出てくる可能性は低いが、全くないとはいえないため、調査対象に含めてある。

⁵ 以下のように「途切れ」の意味を判断しやすい文もある。

昨夜まで彼にあたえられていたすべての自由が一度に失われ、自由を主張する権利さえも失われていた。(『青春の蹉跎』)

⁶ 以下のような「途切れ」の意味を判断しやすい文が含まれている。テイタが途切れを表す場合、語彙的意味に関わらず、動詞の制限がないと第5章で述べた。一方、「途切れ」以外の連体修飾節の複合動詞のテイタの意味の判断は難しく、調査の結果に誤差を生じる恐れがあるため、今回複合動詞のテイタのアスペクト的意味を調査対象外とした。

宴会が終わってから、賢一郎は母と二人で車に乗った。あの事件以来の張りつめていた気持が崩れて、もうどうでもいいという気になっていた。彼は疲れていた。(『青春の蹉跎』)

(19) 里子は、慈海が帰らなかった七日の風が吹き荒れた孤独の深夜を思った。あの夜、里子はいいようのない恐怖で眠れなかったのである。そうして、慈念が、今出川の久間家に読経に行って、死にかけていた平三郎を見たはずなのに、帰ってから何もいわなかったことを思いだしたのだった。 (『雁の寺』)

(20) 僕が言ったことがやっと彼女の耳に届き、時間をかけて理解され、そのせいで彼女をしゃべらせつづけていたエネルギーのようなものが損われてしまったのかもしれない。直子は唇をかすかに開いたまま、僕目をぼんやりと見ていた。

(『ノルウェイの森』)

さらに、以下のような連体修飾節が主節を構成する名詞句の一部を修飾するものについても、調査の対象外とした。たとえば、

(21) 忠平は玉枝の髪の毛の匂いに、半年前の竹神の家のうす暗い炉端で、ペシペシと燃えていた薪の音をきくように思った。 (『越前竹人形』)

(22) その声はたかかったので、ひくい天井にはねかえって、襟もとまですっぽり絹蒲団をかぶって朽木のようにねていた南嶽の耳を打った。 (『雁の寺』)

のような例である。例(21)は、「(薪が) ペシペシと燃えていた」ので、連体修飾節は、「薪の音」を修飾するのではなく、「薪」までを修飾するのである。一方、例(22)は、「朽木のようにねていた」のは、「南嶽」であり、「南嶽の耳」ではない。このような、連体修飾節は節を構成する名詞句の一部を修飾する場合を今回調査対象に入れていない。

11.2.2 調査方法

今回調査した連体修飾節は、非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節からなる。主節、連体修飾節など全部含めて収集した6260例の例文を一つ一つチェックした結果、非限定的な場合の例数は、213件であり、限定的な場合のテイタの例数は138件であ

った。合計すると、条件に合致するものは、351 例である⁷。それぞれの形式の語例数を次の表 2 にまとめている。(非) は、非限定的連体修飾節の略で、(限) は限定的連体修飾節の略とする (以下同)。

表 1 連体修飾節におけるテイタの各形式の語例数

| | ていた | でいた | てた | でた | でいました | ていました | てました | でました | 合計 |
|--------|-----|-----|----|----|-------|-------|------|------|-----|
| (非) 語例 | 197 | 14 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 213 |
| (限) 語例 | 119 | 11 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 138 |
| 合計 | 316 | 25 | 9 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 351 |

11.2.3 調査結果

まず、連体修飾節におけるテイタの 7 種類の意味に、次のように①～⑦まで番号をつける。①「動作の持続」②「変化の結果の持続」③「状態の持続」④「単なる心理状態」⑤「途切れ」⑥「パーフェクト」⑦「反復・繰り返し」。以上の分類に属さず、今の段階では分類されていないもの、または、判断しにくいものを⑧「他」とする。

上述のテイタのアスペクト的意味に基づき、各用法を確認して、テイタの各種の意味の使用数と使用率を次の表 2 にまとめた⁸。

表 2 に示されるように、テイタの「途切れ」の意味は、351 例のうち 103 例であり、全体の 29.3% を占める。このことから、連体修飾節におけるテイタが、「途切れ」の意味で多用されてきたこと、言い換えれば、「途切れ」は、決して特殊な用法ではないことが確認されたと言える。連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の用法は、新しいテイタの用法として十分に承認できる。そして、「動作の持続」(66 例、18.8%)、「状態の持続」(44 例、12.5%) が続き、さらに「パーフェクト」(42 例、12.0%)、「変化の結果の持続」(35 例、10%) が続く。また、「単なる心理状態」の例は、12 例(3.4%)、「反復・繰り返し」の例は、6 例(1.7%) となっている。

⁷それぞれの形式の語例数を次の表 1 にまとめている。

表 1 テイタの各形式の語例数

| | ていた | でいた | てた | でた | でいました | ていました | てました | でました | 合計 |
|----|------|-----|-----|-----|-------|-------|------|------|------|
| 語例 | 4877 | 448 | 505 | 107 | 21 | 280 | 20 | 2 | 6260 |

⁸判断に迷うところも多いが、一定の傾向が見られる。

表2 連体修飾節におけるテイタのAspect意味の調査

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | 合計 |
|--------|------|------|------|-----|------|------|-----|------|-----|
| (非) 語例 | 37 | 22 | 27 | 11 | 82 | 16 | 2 | 16 | 213 |
| (限) 語例 | 29 | 13 | 17 | 1 | 21 | 26 | 4 | 27 | 138 |
| 合計 | 66 | 35 | 44 | 12 | 103 | 42 | 6 | 43 | 351 |
| 使用率(%) | 18.8 | 10.0 | 12.5 | 3.4 | 29.3 | 12.0 | 1.7 | 12.3 | 100 |

また、非限定的連体修飾節と限定的連体修飾節と比べると、非限定的な場合、テイタの「途切れ」の意味の使用数は82例で一番多く、「動作の持続」(37例)、「状態の持続」(27例)、「変化の結果の持続」(22例)がそれに続く。一方、限定的な場合は、「動作の持続」の使用数(29例)が一番多く、判断しにくいものとされる「他」(27例)、「パーフェクト」(26例)、「途切れ」(21例)、「状態の持続」(17例)、「変化の結果の持続」が続く。使用率の高さから、テイタの「途切れ」、「状態の持続」、「パーフェクト」などの意味を、日本語教育の現場では重要視されるべきではないかと思われる。

さらに、「他」⁹に属するものは43例で、12.3%というその高い比率が示しているように、残された課題はほかにもまだ多くある。

⁹ 「他」には、たとえば、次のような例である。

(1) 少年はそこらに漂っていた夏の朝のしめやかな空気をえぐるような勢いで身を起したが、私を見て、「何だ、君か」と言った。(『金閣寺』)

ここで、「漂っていた」は、「雨が降っていた」のように、「動作の持続」と判断していいか、「状態の持続」と判断していいか、迷うところである。

また、以下の用例のように、「考えていた」「思っていた」のように思考内容を述べていないが、「単なる心理状態」と判断しにくいものである。

(2) 「ふふ、そう大事を取っていた日にや、事業も何も出来やしない」(『破戒』)

(3) しかし私は、わざと少年らしく(私はこんな時だけ、故意の演技の場合だけ、少年らしかった)、陽気に先に立って、ほとんど駆けて行った。そこであれほど夢みていた金閣は、大そうあっけなく、私の前にその全容をあらわした。(『金閣寺』)

(4) だが、頼みにしていた石炭はなかった。その場所は整地されたようになっていた。(『黒い雨』)

(5) この間に働いていた感情を、私はその後すべて未熟な感覚の混乱として無視していたが、それは果して過ぎ去っていたであろうか。(『野火』)

(6) 「ナオミちゃん、お前又何か取ったんだね！お前のようにてんや物ばかり喰べていた日にゃお金が懸って仕様がなないよ。第一女一人でもってそんな真似をするなんて、少しは勿体ないと云う事を考えて御覽」(『痴人の愛』)

(7) 自分に住む資格がないような幸福が自分をとりまいて、悲しみと淋しさに向って彼が自ずと用意していた甲冑がいつのまにか溶けている。(『友情』)

(8) 黒人兵は僕の腕を離すと、その午前まで僕らの間にあふれていた親しい日常の感情に胸をしめつけられるように、僕を見つめた。(『飼育』)

11.3 まとめ

本章では、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を整理し、調査した。その結果、アスペクトの面では、テイタは、「動作の持続」、「変化の結果の持続」、「状態の持続」、「単なる心理状態」、「途切れ」、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」などの意味を有していることが明らかになった。さらに、北京日本語学研究センター『中日対訳コーパス』（2003 第一版）の日本語の文学作品 22 部を調査したところ、連体修飾節におけるテイタは、「途切れ」の意味で多用されていることが明らかになった。連体修飾節におけるテイタの「途切れ」は、特殊な用法ではないことがこうして明白になった以上、それは、新しいテイタの用法として十分に承認され得ると思われる。

それに対し、主文末におけるテイタの意味については、前章で検討されている。調査の結果、よく知られている「動作の継続」と「変化の結果の持続」の意味のほか、テイタは、「状態の持続」の意味においてよく使われていることが判明した。このように、連体修飾節におけるテイタは、主文末におけるテイタとは用法を異にすることが明らかになった。

12 結論と今後の課題

12.1 結論

本稿は、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察した。

第1章と第2章では、本稿の研究対象を内の関係の連体修飾節に絞り、連体修飾節および連体修飾節のテイタなどについての先行研究を概観し、その問題点を指摘した。

本稿は、連体修飾節におけるテイタがテイルにないアスペクト的意味をもつと考える。そして、そのアスペクト的意味とは、「途切れ」であると考え。しかし、従来の研究では、この点は深く追究されておらず、研究の余地がまだ多く残されている。

第3章、第4章、および第5章では、連体修飾節と主節との関係から、連体修飾節におけるテイルにはないテイタのアスペクト的意味「途切れ」を集中的に考察した。

連体修飾節は、機能的には、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節に分けられる。非限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除いても文意は大きく変わらないのに対し、限定的連体修飾節の場合は、修飾節を取り除くと文が成り立たなくなるか、文意が変化する。こうした違いがあるため、連体修飾節のテイタが「途切れ」を表すときには、それが、限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節のどちらに現れるかによって、様子が違ってくる。

非限定的な連体修飾節の場合は、連体修飾節と主節とは逆接的な関係にあり、連体修飾節の表す状態が変化し、かつ格関係が一致するという特徴が確認された。一方、限定的な連体修飾節の場合、連体修飾節の表す状態の変化は、テイタが「途切れ」を表すときの主な特徴であることが確認された一方、格関係は、一致する場合もあれば、一致しない場合もあった。つまり、連体修飾節の状態に変化があるという点は、連体修飾節のテイタが途切れを表す場合の一般的な特徴だと言える。また、非限定的な場合においても、限定的な場合においても、連体修飾節と主節とは同じ主体や対象を共有し、かつ連体修飾節の表す状態が変化した場合には、テイタが使われる、という共通点が明らかになった。

続く第5章では、「途切れ」を表す連体修飾節が含まれる複文が有する特徴を、動詞分類、テンス、「途切れ」と文脈の関係、「完了」の検討などの角度から分析した。「途

切れ」を表すことができる動詞については、いかなる動詞も状態の変化を表すことが可能なため、動詞の分類にかかわらず、テイル形をとらない動詞（ある、いるなど）は除外されるということ以外には、特に制限はないと思われる。また、連体修飾節のテイタが途切れを表すとき、それは、相対的テンスを表し、連体修飾節はさらに、「一般的事態」を表すものと「一時的態」を表すものに分けられる。加えて、連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味は、連体修飾節と主節との関係を考えた上で初めて現れてくる特徴なので、主節という文脈を本質的に必要とする、つまりは文脈への依存度が高いと言える。これは、「パーフェクト」、「反復・繰り返し」というアスペクトの派生的意味の特徴に類似する。

第6章では、非限定的連体修飾節が主節と「原因」もしくは「付帯状況」の意味関係にある場合を対象に、格関係一致可否の観点から連体修飾節におけるテイルとテイタの比較考察をし、当の連体修飾節に現れるテイルとテイタの使用傾向を調査した。テイタが含まれる連体修飾節では、連体修飾節と主節のそれぞれに対する主名詞の格関係の一致が特徴で、テイルが含まれる連体修飾節では、双方の格関係の不一致が特徴であることを確認した。さらに、第7章では、連体修飾節の二つの修飾の仕方から、連体修飾節のテイタとタの相違を検討し、またこれらの相違を「形容詞+タ」の解釈に応用した。そこでは、「動詞+テイタ」と「形容詞+タ」の共通の特徴が観察された。

第8章では、第7章で取り上げた「動詞+テイタ」と「形容詞+タ」の共通の特徴を追究し、「形容動詞+タ」「名詞+タ」の場合も含めて考察し、これらに共通する「変化」というタの意味を詳しく検討した。

第9章では、小説の調査を糸口に、「座る」、「立つ」といったアスペクト的意味を判断しにくい動詞について考察し、「状態の持続」というアスペクト的意味を導入した。「状態の持続」は、森山卓郎（1986）の言う「維持の状態」に相当する。「座る」「立つ」以外にも「黙る、並ぶ、握る、（荷物/興味を）持つ、持たれる、休む」などの動詞がこのアスペクト的意味を持ち得ることが示された。

第9章を踏まえ、第10章と第11章では、主節におけるテイタのアスペクト的意味と連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を整理し、小説での使用率を調査した。その結果、小説にはどのようなアスペクト的意味が多く使われているかが明らかになった。主文末（主節）の場合、テイタは、よく知られている「動作の継続」や「変化の結果の持続」の意味のほか、「状態の持続」の意味においてよく使われていること

も判明した。一方、連体修飾節の場合には、テイタは、「途切れ」意味で多用されていることが明らかになった。このように、連体修飾節におけるテイタの「途切れ」は、特殊な用法ではないことが明白であり、新しいテイタの用法として十分に容認できると本稿は考える。また、「途切れ」の小説での使用率が高いことが明らかになったことを踏まえ、「途切れ」というテイタの特有の意味を、日本語教育の現場でも認識してもらう必要があると考える。

以上、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味についての本稿の考察を概説した。日本語学習者のテイタの理解に少しでも役立てば幸いである。

12.2 今後の課題

本稿は、連体修飾節と主節との関係から、連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味を考察した。アスペクト的意味の点で、テイタがテイルとは区別されることが示されたことから、テイタが単純にテイルの過去形ではないことが明白になった。一方で、残された課題としては、以下のことが挙げられる。

まず、本稿は、「座る」「立つ」のような動詞がもつアスペクト的意味として、「状態の持続」を提案し、多くの動詞がこのような意味をもち得ることを第9章で指摘した。けれども、これらの動詞が、動詞の分類上どのように位置づけられるかなどについては追究していない。こうした点を追究することは、今後の課題としたい。

そして、第10章と第11章の用例調査は、「複合動詞+テイタ」の用例および「受身形、使役形+テイタ」の用例の場合を対象外としたが、複合動詞および動詞の受身形、使役形はテイタ（テイル）のアスペクト的意味との関連はまだ課題である。

さらに、今回の用例調査分析では、例文の判断に迷うところが多かった。「アスペクトに関しては、正誤の判断が微妙で、研究すべきことがたくさん残っている。」（明治書院企画編集部（1997：36））とされているが、まさにそのとおりだと筆者は実感している。特に、第10章と第11章に関しては、考え不足や研究が足りない部分もたくさんあると反省している。しかし、判断に迷うところが多いとはいえ、主節のテイタと連体修飾節のテイタには、一定の使用傾向が見られる。つまり、主節に現れる場合、テイタは、日本語教育の場で一般に教えられる「動作の持続」や「変化の結果の持続」の意味のほか、課題が多く残されている「状態の持続」の意味で多用される傾向があ

る。一方、それが連体修飾節に現れる場合には、「途切れ」の意味で用いられることが多い。現在の日本語教育の現場で教えられるアスペクト的意味だけでは、実際の用例の分析には不十分なこと、また、アスペクトに関しては、まだ多くの課題が残されていることも、認識される必要があると思われる。

参考文献

日本語文献（五十音図順）

- 秋月康夫（2003）「「ていたところ」が表す局面としての「途切れ」相」『日本語教育』（117）pp. 53-62、日本語教育学会.
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（監修：白川博之）（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵 功雄（2001a）「テイル形／テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4、一橋大学.
- 庵 功雄（2001b）『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—』. スリーエーネットワーク.
- 庵 功雄・清水佳子（2003）『上級日本語文法演習 時間を表す表現』スリーエーネットワーク.
- 庵 功雄（2014a）「テイル形、テイタ形における「ル、タ」のとらえ方についての一考察—日本語教育文法から日本語学、一般言語学への貢献—」第 131 回関東日本語談話会発表要旨.
- 庵 功雄（2014b）「現代日本語のテンス・アスペクト体系の形態・統語論的位置づけに関する一考察」第 134 回関東日本語談話会発表要旨.
- 伊坂淳一（1997）『ここから始まる日本語学』. ひつじ書房.
- 井上 優（2001）「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム（編）『「た」の言語学』ひつじ書房 pp. 97-163.
- 岩崎 卓（1995）「従属節のテンスと視点」『現代日本語研究』（2）：67-84 大阪大学現代日本語学講座.
- 岩崎 卓（1998a）「従属節テンス認定の問題—外の関係の連体修飾節の場合—」『日本学報』（17）：pp. 27-42 大阪大学.
- 岩崎 卓（1998b）「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』（3）：pp. 47-66 国立国語研究所.
- 岩崎 卓（2000）「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5.
- 岩崎 卓（2001）「複文における時制」『言語』30-13、pp. 50-55、大修館書店.

- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』 開拓社.
- 王 守利 (2013) 「テイタの意味に関する一考察—小説の用例を中心に—」 『人文社会科学研究』 千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第 27 号. pp. 149-163.
- 王 守利 (2014a) 「実質名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」 『人文社会科学研究』 千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第 28 号. pp. 190-204.
- 王 守利 (2014b) 「非限定的名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」 『人文社会科学研究』 千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第 29 号. pp. 140-152.
- 王 守利 (2014c) 「限定的連体修飾節におけるテイタに関する一考察—途切れの意味を中心に—」. 『日本学論壇』 新日本文化研究会. 2014 年第 1 期. pp. 1-9.
- 王 守利 (2014d) 「連体修飾節におけるテイタの意味の一考察—テイルとの比較を中心に—」 第 15 回千葉大学文学部文化大会. 口頭発表.
- 王 守利 (2015a) 「連体修飾節のテイタの意味について—「途切れ」を中心に—」 『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』. 第 287 集. pp. 27-47.
- 王 守利 (2015b) 「連体修飾節のテイタのアスペクト的意味に関する一試案—「状態の持続」と「途切れ」を中心に—」 『日语教学与日本研究：中国日语教学研究会江苏分会 2015 年刊』. 华东理工大学出版社. pp. 69-84.
- 王 守利 (2015c) 「連体修飾節のタについて—「{*激しかった/激しい} 雨が降った。」を中心に—」 2015 年日本学国際シンポジウム並びに中国日本語教育研究会西北分会成立大会. 口頭発表.
- 大島資生 (2003) 「連体修飾の構造」 北原保雄 (編) 『朝倉日本語講座 5 文法 I』, pp. 90-108, 朝倉書店.
- 大島資生 (2011) 「日本語連体修飾節構造の時制解釈について—修飾節・主節が共にタ形述語をもつ場合—」 『日本語文法』 11-1. pp. 54-70, 日本語文法学会.
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一の段階—」 宮城教育大学 『国語国文』.
- 加藤晴子 (1997) 「“了” “着” による中国語動詞の分類とその日本語への対応」 『明海大学外国語学部論集』 (9) pp. 173-184.
- 加藤万里 (2005) 「日本語の制限・非制限修飾に関する一考察」 『日本語文法』 5-1, pp. 3-19, 日本語文法学会.
- 加藤泰彦・福地務 (1989) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 15 テンス・

- アスペクト・ムード』荒竹出版.
- 紙谷栄治 (1989) 「テンスとアスペクト」北原保雄 (編) 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』明治書院 pp. 201-225.
- 許 夏珮 (2005) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』. くろしお出版.
- 金水 敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院.
- 金 水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp5-61.
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.
- 金 春女 (2007) 「連体修飾節における「～タ」形と「～テイル」形について—述定性という観点から」名古屋大学大学院言語文化研究科『言葉と文化』v. 8 pp. 157-172.
- 工藤浩、小林賢次、真田信治、鈴木泰、田中穂積、土岐哲、仁田義雄、畠弘巳、林史典、村木新次郎、山梨正明 (2009) 『改訂版 日本語要説』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『人文紀要第二類 語学・文学』36、横浜国立大学. pp. 1-24.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』. ひつじ書房.
- 江田すみれ (2013) 「「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法—」くろしお出版.
- 国立国語研究所 (1951) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』. 国立国語研究所報告 82、秀英出版.
- 佐良木昌、新田義彦 (2008) 「主節主名詞に係る連体修飾節と主節述部との意味的相関の分析 : 連体修飾節と英語文型との対照」『電子情報通信学会技術研究報告』2008-1、pp. 49-53. 電子情報通信学会.
- 鈴木重幸 (1976) 「日本語の動詞のとき (テンス) とすがた (アスペクト) —～シタと～シテイタ」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp83-95.
- 鈴木康之監修、日本語文法研究会編 (1991) 『概説・現代日本語文法—改訂版—』. 桜楓社.

- 須田義治 (2005) 「連体形のテンス・アスペクトについて」『沖縄大学人文学部紀要』
(6)、沖縄大学人文学部 pp. 15-24.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』 ひつじ書房.
- 砂川有里子 (1986) 『する・した・している』 (日本語文法セルフマスターシリーズ 2)
くろしお出版.
- 孫 敦夫 (2008) 『日本語アスペクトの研究』. 中国社会科学出版社.
- 高橋太郎 (1974) 「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」『教育国語』
39 pp. 41-57.
- 高橋太郎 (1979a) 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会
編『言語の研究』むぎ書房 (高橋太郎 (1994) 所収) .
- 高橋太郎 (1979b) 「動詞の連体修飾法 (1)」高橋太郎 (1994) 『動詞の研究』むぎ書房
pp. 279-293.
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』. ひつじ書房.
- 高橋太郎他 (2005) 『日本語の文法』. ひつじ書房.
- 単文垠 (2005) 「中国語のアスペクト助詞“着”とそれに対応する日本語表現に関する
考察」『北陸大学紀要』(29) pp. 167-176.
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1—」『日本語・日本文化』4号
大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 2—」『日本語・日本文化』5
号大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 3—」『日本語・日本文化』6
号大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 4—」『日本語・日本文化』7号
大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1~その 4」『日本語・日
本文化』4号-7号 大阪外国語大学留学生別科 (寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集
I —日本語文法編—』に所収) .
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第2巻 文法』、
pp. 221-266、大修館書店.

- 寺村秀夫 (1982) 『シンタクスと意味 第Ⅰ巻』. くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『シンタクスと意味 第Ⅱ巻』. くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版.
- 中島孝幸 (1994) 「連体修飾と動詞の形」『日本語学文学』. pp. 27-36 三重大学.
- 中島孝幸 (1995) 「現代日本語の連体修飾節における動詞の形について—ル形・タ形・
テイル形・テイタ形—」『人文論叢』三重大学人文学部文化学科研究紀要. pp. 23-32.
- 中右 実 (1980) 「テンス、アスペクトの比較」国廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第
2巻 文法』大修館書店 pp. 101-155.
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろし
お出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版.
- 日本語文法学会 (2014) 『日本語文法事典』大修館書店.
- 丹羽哲也 (2001) 「連体修飾節のテンスとアスペクト」『言語』30-13、pp. 56-62、大修
館書店.
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法4 複文と談話』
岩波書店.
- 春木仁孝 (2001) 「テキスト構成とテンス・アスペクト」Gallia. (40) pp. 11-18.
- 藤井 正 (1976) 「「動詞+ている」の意味」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペク
ト』むぎ書房 pp.97-116
- 藤城浩子 (1996) 「シテイタのもう一つの機能—感知の視点を表すシテイター」『日本
語教育』(88) pp. 1-12 日本語教育学会.
- 前田直子 (2011) 「時間節および時間句「時」「頃」の用法」『研究年報』学習院大学文
学部 (58) pp. 1-12.
- 益岡隆志 (1994) 「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に」田窪行則編『日本語の名
詞修飾表現』、pp. 5-27、くろしお出版.
- 益岡隆志 (1997a) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1997b) 「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志『新日本語文法選書2
複文』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク.

- 町田 健 (2002) 『シリーズ・日本語のしくみを探る 1 日本語文法のしくみ』. 研究社.
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院. 復刊、くろしお出版. 1972.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版.
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」 中右実 (編) 『日英語比較選書 7: ヴォイスとアスペクト』 研究社 (鷲尾龍一との共著) pp. 108-144.
- 三宅知宏 (1995) 「日本語の複合名詞句の構造—制限的/非制限的連体修飾節をめぐって—」 『現代日本語研究』 (2) : pp. 49-66 大阪大学現代日本語学講座.
- 明治書院企画編集部 (1997) 『日本語誤用分析』. 明治書院.
- 森山卓郎 (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」 宮地裕 (編) 『論集 日本語研究 (一) 現代編』 明治書院 pp78-116.
- 山田小枝 (1984) 『アスペクト論』. 三修社.
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房 pp155-327.

中国語文献 (ピンイン順)

- 曹大峰 (1993) 《现代日语高级语法教程》. 山东大学出版社.
- 陈访泽、刘小珊 (2009) 《标准日语现代语法教程》. 华南理工大学出版社.
- 陈 岩 (2001) 《日语句法与篇章法》. 北京大学出版社.
- 陈 岩 (2009) 论汉语母语日语学习者对“时”“体”的误用. 《日语学习与研究》、(02).
- 樊 慧颖 (2009) 论日语连体修饰节中形容词的“体”. 《日语学习与研究》、(01).
- 房国铮 (2009) 「テイル」的效力持续用法刍议. 《黑龙江教育学院学报》、(01).
- 顾明耀 (2004) 《标准日语语法 (第二版)》. 高等教育出版社.
- 李所成 (2009) 试论「テイル」的性质及意义. 《日语学习与研究》、(05).
- 林 罍 (2007) 日语“ていた”和汉语“着”的比较研究. 《日语学习与研究》、(03).
- 林 罍 (2005) 试析“teita”的用法及其中文表达方式. 《北京第二外国语学院学报》、(06).
- 林 璋 (2004). 论作为状态完成的结果维持问题—汉日两种语言体的对比研究. 《日语学习与研究》、(01).
- 刘耀武 (1986) 现代日语动词体的研究. 《外语学刊 (黑龙江大学学报)》、(04).

潘寿君（2007）论中译日中的“体”与“时”——从实例看“～た”和“～ていた”的不同用法.《日语学习与研究》、（03）.

王 忻（2006）《中国日语学习者偏误分析》. 外语教学与研究出版社.

修 刚（2001）再论现代日语动词的“体”.《日语学习与研究》、（04）.

续三义（1990）关于日语动词的体 四十年来日本国内动词体的研究.《外语教学与研究》、（03）.

用例出典

『中日対訳コーパス』(2003 第一版) (北京日本学研究センター)

文学作品 22 部：

井上靖『あした来る人』

夏目漱石『坊ちゃん』、『こころ』

水上勉『越前竹人形』

田山花袋『蒲団』

水上勉『雁の寺』

島崎藤村『破戒』

芥川龍之介『鼻』、『羅生門』

三島由紀夫『金閣寺』

泉鏡花『高野聖』

井伏鱒二『黒い雨』

大岡昇平『野火』

村上春樹『ノルウェイの森』

石川達三『青春の蹉跎』

大江健三郎『飼育』、『死者の奢り』

安部公房『砂の女』

太宰治『斜陽』

谷崎潤一郎『痴人の愛』

武者小路実篤『友情』

川端康成『雪国』

文学作品以外：

『近代作家入門』

電子文庫

東野圭吾『赤い指』

東野圭吾『探偵ガリレオ』

東野圭吾『放課後』

松本清張『証明』

森村誠一『人間の証明』

三浦綾子『氷点』

国立国語研究所 現代書き言葉均衡コーパス中納言 BCCWJ

(書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、 ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

正木孝昌『算数授業に子どもたちの生きる姿を見た』

桐生操『本当は恐ろしいグリム童話』

内田康夫『白鳥殺人事件』

新堂冬樹『カリスマ』

大藪春彦『狼の追跡』

斎藤茂太『1分間でやる気を出す200のヒント』

段躍中『現代中国人の日本留学』

林鎬根『韓流の源』

佐藤博樹、武石恵美子『男性の育児休業』

マイクル・Z・リューイン(著)/石田 善彦(訳)『沈黙のセールスマン』

レナード・チャン著、三川基好訳『夜明けの挽歌』

中山庸子『おかあさんの夢づくりノート』

木村航『かえってきた、ぺとぺとさん』

塚田誠之、瀬川昌久、横山廣子『流動する民族』

『浜北区版広報はままつ』

Yahoo!知恵袋 2005

福島正実『フェニックス作戦発令』

折戸洪太『中国改革・開放の20年と経済理論』

日本共産党国会議員団鈴木宗男疑惑追及チーム『ムネオ疑惑追及300日』

Yahoo!ブログ 2008

榎本捨三『満州崩壊』

伊関武夫『ドイツ手作り紀行』
河原敏明『美智子皇后』
NHK「ためしてガッテン」編『ためしてガッテン効果がすぐ出る安心健康法』
新堂冬樹『闇の貴族』
宮乃崎桜子『積善白花』
海音寺潮五郎『二本の銀杏』
北方謙三『いつか光は匂いて』
藤沢周平『漆の実のみのる国』
高橋がなり『がなり流！』
富永政美『日本列島すぐ蕎麦の旅』
一条さゆり『中国洗面器ご飯』
樋口裕一『書く力が伸びる！』
日本経済新聞社『2020年からの警鐘』

新潮文庫 100 冊 CDROM 新潮社 1995

椎名誠『新橋烏森口青春篇』
松本清張『点と線』
堀辰雄『美しい村』
遠藤周作『沈黙』

「毎日新聞」95

Yahoo! JAPAN

辞書：

『新明解国語辞典 第五版』
『日本語辞典（現代国語、外来語）』
『大辞泉』
『学研国語大辞典』

従来の筆者の研究との関係

本稿は、以下にあげた論文・発表に加筆・修正したものである。

第1章 はじめに

新規執筆

第2章 先行研究および問題点

王 守利(2014d)「連体修飾節におけるテイタの意味の一考察—テイルとの比較を中心に—」第15回千葉大学文学部文化大会. 口頭発表.

第3章 非限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味

王 守利(2014b)「非限定的名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」『人文社会科学研究』千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第29号. pp.140-152

王 守利(2015a)「連体修飾節のテイタの意味について—「途切れ」を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』. 第287集. pp27-47

第4章 限定的連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味

王 守利(2015a)「連体修飾節のテイタの意味について—「途切れ」を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』. 第287集. pp27-47

第5章 連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の特徴

王 守利(2015a)「連体修飾節のテイタの意味について—「途切れ」を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』. 第287集. pp27-47

王 守利(2014c)「限定的連体修飾節におけるテイタに関する一考察—途切れの意味を中心に—」. 『日本学論壇』新日本文化研究会. 2014年第1期. pp.1-9

第6章 連体修飾節におけるテイルとの比較

王 守利(2014d)「連体修飾節におけるテイタの意味の一考察—テイルとの比較を中心に—」第15回千葉大学文学部文化大会. 口頭発表.

第7章 連体修飾節におけるタとの比較

王 守利(2014c)「限定的連体修飾節におけるテイタに関する一考察—途切れの意味を中心に—」.『日本学論壇』新日本文化研究会. 2014年第1期. pp. 1-9

第8章 タにおける「変化」について

王 守利(2015c)「連体修飾節のタについて—「{*激しかった/激しい}雨が降った。」を中心に—」2015年日本学国際シンポジウム並びに中国日本語教育研究会西北分会成立大会. 口頭発表.

第9章 「状態持続」について

王 守利(2015b)「連体修飾節のテイタのアスペクト的意味に関する一試案—「状態の持続」と「途切れ」を中心に—」『日语教学与日本研究：中国日语教学研究 研究会江苏分会 2015年刊』. 华东理工大学出版社. pp69-84.

第10章 主節におけるテイタのアスペクト的意味の調査

王 守利(2013)「テイタの意味に関する一考察—小説の用例を中心に—」『人文社会科学研究』千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第27号. pp. 149-163

第11章 連体修飾節におけるテイタのアスペクト的意味の調査

王 守利(2014a)「実質名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」『人文社会科学研究』千葉大学大学院人文社会科学研究科. 第28号. pp. 190-204

第12章 結論と今後の課題

新規執筆

謝 辞

本論文を完成するに当たっては、多くの方々からご指導とご援助をいただきました。心より感謝いたします。

まず、本論文が完成するに至るまで、終始暖かく激励しきめ細かな指導を与え、辛抱強く見守ってくださった主任指導教員の岡部嘉幸先生に、衷心より感謝とお礼を申し上げます。また、副指導教員である神戸和昭先生と中川裕先生からは、数多くのご指導や貴重なご助言をいただきました。心より感謝いたします。

千葉大学日本語学研究会において、数多くのご助言をくださいました金田章宏先生、ならびにハウダ・マーチン先生に深く感謝いたします。また、非常に有益なアドバイスをくださった千葉大学人文社会科学研究所の留学支援室の伊丹謙太郎先生、日本語をチェックしていただいた池田さつき先生に、心から感謝申しあげます。

また、いつも私を励まし、暖かく見守ってくださった鈴木泉先生、張昕先生、黄奕男先生に心から感謝いたします。

最後に、家族全員、とりわけ、どの状況においても私を応援してくれた夫と、ずっと私を見守ってくださった神様に感謝いたします。